333.5
Ta29

新體制の經濟

0023203000

0023203-000

３３３．５－Ｔａ２９ウ

新体制の経済

高木友三郎・著

第一書房

昭和１５

ADD

333.5
TA29

高木友三郎著

新體制の經濟

東京
第一書房

905
283

はしがき

何のための新體制であるか。その理念は如何、その構想は如何、そもそも又その將來は如何。本書はまづ筆をその歴史的必然性から說き起こし、ついで戰爭の哲學から全體主義の人生觀を述べて、個人主義と功利主義が現狀維持派の哲學と倫理であり、ドイツの汎神論哲學と創造的人生觀が森林の子ゲルマン民族の戰ひの歴史に由來せるを示した。

一轉して本書は、普通、我國の經濟力は個人的消費と生產的利用——國內生產力擴充と滿支開發並びに貿易向け——と國防充實に使用せられ、個人的消費と國防充實向けは不生產的と云はれるも、實はこの區別の根據なきを述べ、三者ともその使ひかた如何で聯關性がある、總力戰の現代は殊に然りとし、新體制の目的はこの三つをすべて結局は一國の發展に貢獻せしめる、生產的經濟的に轉用する所にありと說いた。

第一章より第十四章まで、凡そ新體制をめぐつて思考にのぼる問題は、これを或ひは世界歴史から、或ひは哲學や人間性から、或ひは日本民族性から、その起源とその可能力若くは實現條件を檢討した。

世界ブロック問題の將來と南洋圈の經濟價値、金貨の運命、公益優先の人性的及び心理的吟味、さては國土建設や人口問題、優生學的斷種法の批判に至るまで、すべて一應の檢討と結論を下し、以て高度國防國家建設の構想がいかなるものなるかを明かにした積りである。

新體制はかく歷史的必然ではあるが、それが果して實現するか否かは、一にかかりて日本國民の能力と努力にある。ちやうど今ブロック經濟が歷史的發展段階に達してゐると云つても、それは自然に成るものではなく、その成否はやはり指導國家の實力によるのと同樣である。そしてこの何れもが、日本歷史に於ける一大事業なる事も豫め覺悟しておかなければならぬ。

本書は新體制に關する最初の手引書として、讀者に廣き視野を與へ、或ひはその構想をめぐらす資料として少しでも役立たばといふ意圖から書いたものである。まづ最後の十四章を讀んで新體制の見取圖を頭腦に入れ、それから各章適意その興味ある部分から讀んで頂ければ幸ひである。

皇紀二千六百年九月、第二次歐大戰一周年

著者

目次

第一章　世界歷史の現段階

第一　戰爭の世代……三

一　第二次世界戰の契機包藏……三

二　現狀維持的な正義觀……八

三　持たぬ國と正義……一〇

四　戰爭の歷史的意義……一一

第二　全體主義の將來……一四

一　「自我」の發見と個人主義の効果……一四

二　僞りの自由主義……一六

三　眞の自由主義と統制……一八

四　階級主義・共產主義の自壞運動……一九
五　現代と全體主義の哲學……二四
第三　東亞ブロックから協同體へ……二六
一　資本主義の三轉とブロック經濟の必然性……二六
二　東亞協同體と民族問題……三一
第四　統制經濟から計畫經濟へ……三五
一　統制經濟の變質……三五
二　全體主義と計畫經濟……三九
第五　强力日本の再建……四二
一　武裝國家の建造……四二
二　日本の歷史的使命如何……四三
第二章　人生觀の轉向
第一　人生觀の大別……四五

一　人生觀の大別……四五
二　快樂論の批判……四六
三　幸福論の批判……四九
四　英國人と幸福的人生觀……五二
第二　價値創造的人生觀……五五
一　價値の意味……五五
二　理想とは何ぞ……五六
三　ドイツ哲學の勝利と發生原因……五八
四　ドイツは歷史的に全體主義國……五九
五　何故の世界歷史の轉換ぞ……五九
第三章　經濟の意味と目的
第一　經濟と生活との密接性……六一
一　最小費用則……六一
二　最大効用則……六四

第二　人間心身の經濟的構造……六五
第三　經濟行爲とその目的……六八
第四　費用と効用との差引計算……七二

第四章　世界五大ブロックから三大ブロックへ

第一　内村鑑三氏の三大ブロック論……七五
第二　ブロック成立の可能性と條件……七七
第三　ブロックの生成と戰爭・平和の世代交代……八〇
第四　各ブロックの自給力……八二
第五　ブロックの形態……八八

第五章　貨幣價値のコペルニクス轉向時代

第一　フンクの宣言と金の價値……九二
一　歐新秩序と金貨……九二
二　ブロック完成と世界貿易の變化……九四

三　銀の低落歷史と金貨……九六
四　金銀も貨幣に用ひられずば價値なし……九七
第二　貨幣價値の意味……九八
第三　貨幣價値と金屬說……九九
第四　紙幣價値と名目說……一〇一
一　紙幣も費用と効用を兼備する……一〇二
二　貨幣の効用性……一〇四
三　貨幣の費用性……一〇六
四　金貨の將來……一〇七
五　米國の貯藏金の運命……一〇八

第六章　國力の意味と日本の現實

第一　國力概論……一一五
一　世界狀勢と國力……一一五
二　國力の意義……一一六

三　國力の强化……一一六
四　一國の經濟力……一一八
五　日清・日露戰と現在との經濟比較……一一九
六　第一次歐洲戰の國富並びに戰費論……一二二
第二　國民所得と戰費との關係……一二三
第三　未結實の投資時代……一二六
一　國防費は果して不生產的か……一二六
二　滿洲投資は生產的か……一二七
三　生產力擴充資金……一二八
第四　轉向期に達したわが經濟……一三一
一　通貨膨脹と財の生產比率……一三一
二　惡性インフレの意味……一三三
三　勞力不足と賃銀高……一三六
第五　第二次歐洲戰と日本財界の再出發……一四三
一　歐洲戰わが財界に幸ひせず……一四三

二　日本財界の新體制……一四四
第七章　日滿支ブロックの再吟味
第一　滿支の自給力……一四五
一　滿支ブロックと歐洲ブロックの差……一四五
二　對滿投資額……一四六
三　支那の開發……一四八
第二　石炭……一四八
一　我國の石炭過去需給表……一四八
二　將來の需給豫想……一四九
三　北支炭の價値……一五二
四　北支炭よりも滿洲炭開發が有利有効……一五四
五　北支炭は滿洲炭の補充用……一五六
第三　鐵鋼……一五七
一　我國の鐵鋼過去需給表……一五七

二　鐵鋼を何處に求むべきか……一六三
第四　棉花……一六六
一　日本の棉花過去需給表……一六六
二　日滿支一體の將來需給量……一六八
三　支那棉の增產……一六九
四　支那の棉花需給……一七一
五　日支の將來需給觀……一七三
第五　鹽……一七五
一　日本の鹽過去需給表……一七五
二　需要增と輸入難……一七七
三　支那鹽……一七八
四　ブロック增產五箇年計畫……一七九
第六　日滿支ブロックの價値……一八〇

第八章　南洋圈の經濟價値
第一　太平洋時代の意味……一八二
一　太平洋時代の出現……一八二
二　米國と南洋資源……一八六
三　太平洋の特殊價値……一八七
第二　南洋と我國……一八七
一　英領マレー主要輸出品……一八七
二　フイリッピン主要輸出品……一八八
三　蘭印主要輸出品……一九〇
四　タイ（シヤム）主要輸出品……一九二
五　佛印主要輸出品……一九三
六　不可離の我國と南洋諸國……一九三

第九章　日本工業の高度化
第一　日本經濟の內包的發達……一九五
第二　日本產業の發展段階……一九六
第三　日本重工業の現地位……一九八
一　滿洲事變と日本產業の工業化……一九八
二　輕工業から重工業へ……二〇〇
第四　日本の機械工業……二〇三
一　英米獨との比較……二〇三
二　ドイツの機械輸出入額……二〇五
三　日本の機械貿易……二〇六
四　質・量とも最高工業國へ……二〇七
第十章　日本經濟の再組織
第一　再組織の要素……二〇八

一　廣域經濟の成立條件……二〇八
二　國力組成要素の能率發揮策……二〇九
第二　生活の原理……二一一
一　能率發揮の基本則……二一一
二　贅澤論……二一二
第三　簡單生活論……二一四
一　精神的贅澤……二一四
二　衝動の種類……二一五
三　衝動の起因とその說明……二一七
第四　消費合理化の社會組織……二二五
一　消費の生產化・能率化……二二六
二　隣組制度の確立……二二七
三　慰樂の健康化……二二八
四　適性檢査……二二九

第十一章　日本企業再組織論
第一　企業目的の變化……二三一
一　公益優先主義……二三二
二　個人主義企業の利害……二三二
第二　産業再編成……二三五
一　ドイツの産業團體……二三五
二　日本の産業團再編成……二四五
三　農業團體の整理……二四六
第三　利潤統制の要請……二四八
一　公益主義と利潤……二四八
二　物價と利潤統制……二五一
三　公益優先と經濟倫理の規範力……二五三
四　觀念化する勿れ……二五九

第十二章　勞働の奉公性
第一　生産と勞働……二六一
一　生産の要素と原價……二六一
二　資本も亦勞力の集結……二六二
第二　生産費と勞力の合理化……二六四
一　賃銀切下げの三形態……二六四
二　全體主義と社會政策の變化……二六五
三　新勞働政策の內容……二六七
第三　賃銀平衡資金……二六八
一　物價騰貴率と賃銀上騰の關係……二六九
二　賃銀引上げが要求の根據……二七一
三　賃銀引上げの經濟的・社會的影響……二七二
四　賃銀平衡資金を設けよ……二七三

五　生活合理局を設置せよ……二七五
第四　サラリー、賃銀の公益性と均衡化……二七六
第十三章　武裝國家の建設
第一　國家財政の集中化……二七七
一　財政と經濟の協同化……二七七
二　國策の集中化……二七九
第二　國土計畫……二八三
一　國土計畫の目標……二八三
二　國土計畫の範圍……二八四
三　國土計畫と工業立地主義……二八四
四　各國の國土計畫……二八五
第三　民族設計……二八八
一　國力支柱の最後は民族……二八八
二　民族の數と質……二八九
三　民族强化運動……二九一
第十四章　新體制構想の批判と眼目
第一　新體制の構想……二九八
一　新體制の意圖……二九八
二　新體制の組立……二九八
第二　過渡期の施設……三〇五
一　公益優先主義……三〇六
二　轉・失業者對策……三〇六
第三　新體制の眼目……三〇七
一　國民に對して……三〇七
二　指導者に對して……三〇八

新體制の經濟

第一章　世界歴史の現段階

第一　戰爭の世代

一　第二次世界戰の契機包藏

一世代を三十年とせば今は正しく戰爭の世代である。一九一四年に始まり一九一八年に休戰を告げた第一次歐洲大戰或は世界戰は、その廣さと深さにおいて今更云ふまでもなく世界史最初の大戰であつた。そこで誰れ言ふとなく「この戰爭こそ人間社會に戰爭を終止する戰爭」だと傳へ「地に平和、人に幸福あれ」とジウネヴ湖畔に聯盟の白堊殿は建設せられた。そして、銀嶺モン・ブランを仰いで嚴かなる平和の誓ひをなすと共に、ワシントン會議は太平洋の浪永へに靜かなれと軍縮會議を實行したのである。かのカントの永久的平和の理念がもてはやされたのも方に其時であつた。誰か測らん、この時こそ世界歴史が再び戰ひの世代に入る端初ならんとは。

史家は云ふ、十九世紀の歴史は、これウイーン會議と神聖同盟瓦壊の歴史なりと。廿世紀の歴史も亦同じくベルサイユ條約と國際聯盟打壊の歴史にほかならないのである。

洵に一八一四年九月ナポレオンの退位後ウイーン會議が開かれ神聖同盟の成るや勝者たる英・墺・普・露は現状維持を建前としてフランスに苛酷なる媾和條件を強ひ、以て勝者の權利を永久に保障せんとした。そこで世界はこれ等帝王たちの組織せる秩序をひたすらに喜び迎へ歐洲にも平和來たると思ひきや、その足もとから内には自由、外には民族主義の改革運動が伊に佛に將またスペインにドイツに所在に起りて全歐洲は一朝にして火と血の世界に化してしまつた。

かくて三十年後の一八四八年、佛國二月革命をモメントとしてメッテルニヒの亡命と神聖同盟の沒落で自由主義はつひに凱歌を奏した。それから一八七〇年の普佛戰爭後まで約廿五年間は自由主義的資本主義の上昇期であつて、世界もまた英國を工業的尖端とせる國際分業・自由通商・産業發展を享有したのである。

もし歴史が繰返すものとせば、一九二〇年を起點とした最初の二〇—三〇年はベルサイユ條約及び國際聯盟の崩壊と共に國内的並びに國際的全體主義が完成し、その後の二〇—三〇年間はその新秩序による世界歴史の進行時であらねばならぬ。斯く考へると、「戰爭を終止する歐洲大戰」はその實そこから戰爭狀態に這入つたのは當然であつて、かやうな混亂は戰爭が大きいほど其の後片づけに時日のかかるのは恰も大震後の搖り返しと同じである。地震が大きくて凸凹がひどくなつただけ、之が平

衡を得るまでには可なりその地ならし運動が頻々とある筈だ。

大戰のために本來は鞏固な地盤の國が勢ひに押されて或は甚しく凹まされたり、逆に實際は弱い脆い地盤の民族が突然一獨立國として浮び出たりするのは已むを得ない。前者は獨逸、後者はポーランド、チェコその他が顯著な適例だ。即ち獨逸は實力以下にへこまされ、反對に曾て世界史には一度も出た事もないチェック・スラバキア等や幾度も分割されて獨立能力の怪しげなポーランドなんて云ふ國が一夜造りでポッカリと浮び出たりした。

獨逸をその當然あるべき實力以下に叩きつけたのは、聯合國が勝に乘じてやつた事であるが、それも眞情を考へると無理もない所もある。それは獨逸が強いから、いつ起き上がつて自分達に復讐するかも知れぬ。そこで今後再び復讐しないやうに叩けるだけ叩き倒しておけとあつて、之を實力以下に踏みつけたのだ。同時にチェコとか何とか今までは世界にその存在すら知られなかつた民族にわざわざ一國を與へたのも、矢張り獨逸の再起を恐れ、或はその力を殺ぎ或はその發展を防止せん爲の板塀の役を宛てがつたものだ。

だが、それは同時に十九世紀以來の民族自決權といふ民族國家主義・國際自由主義の最後の仕上げでもあつた。だから、時日の經過と共に實力者がその戰傷の痛手から回復するにつれ、必ずその實力相應の平衡運動が起るのは當然であつて、獨逸の第三帝國建設運動がそれだ。イタリーだつてさうである。大戰には聯合國に加擔して共に勝利を得たが、その獲る所は何か。殆ど云ふに足りない。全

くパンを求めて石を得たに過ぎぬ。

日本に至りては尙更である。大戰中わが艦隊は印度洋から地中海まで警備し、英・佛船を掩護して或は印度兵や濠洲兵を印度・濠洲から遠くマルセーユに送り屆け、或はその棉花や羊毛・小麥其他の原料品・食料品を無事に輸送してやつたのだ。實に聯合軍の勝利はこの見えざる日本の協力があつたればこそである。

然るにその結果はどうだ。僅に彈丸黑子或は兎糞と大差なき南洋諸島をそれも委任統治で一時お前に預けておく、その代り靑島は支那に返還せよと云つて取上げてしまつた。これは當時のわが政府當局の無能にもよるが、英・佛も恩知らずの徒と云ふべく、いつかは其の咎を受けねばならぬ。

諺に三年たてば三つになると云ふ。三つになれば赤兒も獨り立ちもすれば、固い御飯も喰べる事ができる。況んや發達盛りの靑年をやである。初め歐洲戰爭の勃發に遭ふや、わが產業界は獨逸の染料や化學品、英の綿織物や紡績機械の輸入難に弱つたが、それも資本主義の靑年期にあつた我が產業界には却てその生成發展を促進する契機となつて、五年後に大戰の終つた頃は、また舊の日本ではなかつた。卽ちわが工業は啻に我國の需要を自給しうるのみならず、その製品は遠く支那・印度にまで進出し、之につれて資本の集中・集積も加速度的に實現して、わが資本主義も既に自由資本主義から獨占資本主義の段階に突入したのである。

これは獨り日本だけではない。米國は固よりであるが、その他の歐洲中立國や英植民地すらも五箇

年の大戰中にすつかりその自給力を强め、物によりては英佛伊への供給餘力すら具備するに至つた。

そこで又知らぬ間に世界は大戰前とは別の國際的のアンバランスを見た。シュペングラーの謂ゆる「歐洲の沒落」が是であつて、歐洲はまた戰前の歐洲にあらず、他面において米國の躍進、アジアの勃興により、世界はすでに戰前の姿でなくなつたのである。歐洲は今や大戰のためにその物的資源を消耗したのみならず、また百年或は二三百年に亙りて蓄積したその黃金も、その海外投資をもすべて費消した。否、單に費消したのみならず、逆に米國に數百億弗の援助を仰ぐに至つた。加ふるに死者八百五十萬人・傷者二千萬人のために歐洲は貴重なる人的資源を失つた。

この人的資源に就いてなかんづく考ふべき事は、それが啻に數量的に多大なるのみならず質的に更に測る可からざる損失を與へた點である。肉體勞働においては最も頑健にして能率的なる强者と靑壯者、その腦力においても優秀なる大學生や中堅技術家・サラリーマン・學者等の喪失。殊に志願兵制度の英國にありて、この傾向が一層著しく、今や英國には政治界を始め各方面とも人材空しである。

世界は昇り歐洲は降る。そこにどうしても均衡運動は起らざるを得ない。日本の躍進は必然の數と云はねばならぬ。況んや、日本は毫もその功に酬いられず、膨脹日本は一度びその移民に對して門戶を閉鎖せられ、再びその商品に對して高關稅でせき止められて仕舞つた。日本は如何にして、何處にその實力を伸ばすべきであるか。苟くも世界に空地なければ已む。だが、見よ、世界には徒に繩張りのみして一向に捨てて顧みざる靑山、黑土は尙ほ到る所に橫はつてゐるではないか。

彼等は資力の不足や、人的能力不足のために、その埋藏し包藏せる無限の寶庫を開發しようともせず、漫に天物を暴殄(ぼうてん)して毫も全世界の發展に寄與しないのである。そして他國の移民も投資も「此の中に入るべからず」と高く禁札を掲げてゐるのだ。

二　現狀維持的な正義觀

伊太利がエチオピアを征服する事は、單にイタリー擴大の爲だけではない。併せてエチオピア人の爲でもある。同時に之に由つてエチオピアの埋れた富源が世界市場に出現するならば、世界經濟の發展と文化增進にも貢獻するのだ。

三千年間、エチオピアがエチオピア・モンロー主義をとつて閉鎖してゐた爲に、エチオピア人も世界もどれだけ損をしたか分らない。それは單に物質的文明の停滯に止まらず、之につれて精神的文化もやはり實を結ばないのである。

この伊・エ戰の意義は移して以て或る程度に日本の滿洲進出・中國進出論をも是認する根據たるべく、またスペイン・和蘭・フランス・英國等の過去における世界支配をも承認すべき所以でもある。むろん時代と共に戰爭の內容も意義も變はつてゐるが、彼等無かりせば、恐らく今日の世界はいま現に見るやうに開發された世界とならなかつたであらう。

だから、この點では彼等の功も認めてやらねばならぬ。勿論それと共に幾多の殘虐行爲と掠奪搾取

もあるが、同時に彼等も可なりの犧牲は拂つてゐるのだ。問題は功罪の差引勘定如何である。

その彼等が今や廣大なる土地と無限の資源を抱いたきりで、之を開發せんともせず、繩張りをして遊ばしておくのだ。これは銀座の四つ角や心齋橋通りに廣い空地を遊ばしてペンペン草を生やしておくのと同じである。俺の地面だから、之を空地にして置かうと畑にしようと俺の勝手だと云つても、之は自由主義時代の昔話に過ぎない。當時こそ權利は權利を主張して通(とほ)つたが今はさうは行かぬ。土地の私有は之を國家社會の爲に最も合理的に利用する義務があり、この義務を果す能力なき者は又私有の權利もないのである。今や太平洋は世界の銀座であり心齋橋通りであるのに、それをペンペン草にも似たるボルネオ蠻人やニューギニア土人に任して置くのでは正しく之を獨占所有する權利のないものと見なければならぬ。曾ては勇敢に世界開拓に當つた彼等も今や家富んでその意氣を缺き、或は力足らずして之を捨てておかざるを得ないとあれば、何人かが彼等に代りてその任を果すべきではないか。然らずんば世界は進行しないのである。

或る學者は「國家の理想」と云ふ論文で、「國家の理想は社會に組織を附與する事であつて、その根本原理は正義である。正義とは他者の威嚴を害せざる限度に於て自己の威嚴を主張する事である。具體的に云へば弱者の權利をば强者の侵略壓迫から防衞する事であつて、國內的には國家構成員たる各個人・各團體・各階級相互間の關係の規律であり、國際間では國家間の權利と利益とを尊重する事である。」

正義と云ふ事が、若しこの學者の說のやうであれば、現狀維持卽ち正義であつて、世界は一歩も進歩しない。個人でも國家でも、古來の盛衰興亡は大觀して弱者と無能者が退却するか擊退せられ、之に代りて時の强者が登場する所に社會の進歩、歷史の發展がある。もし正義を以て既得權の尊重と解せば、今の米國人は元來の土人アメリカ・インディアンに現在の所有地を明け渡して凡て歐洲に引上げねばならぬ。だが、之は世界進歩の爲にも決して好ましくない。やはり實力あり能力ある現米國人が居てこそ、米國現在の文化と世界的貢獻が行はれるのだ。

三　持たぬ國と正義

正義とは各人・各國家がその實力に應じて、その所を得、その權義を分擔する事である。義は宜である。各人各部分が全體組織の內でその宜しきを得るのが正義である。一會社において社長の能力なき者が社長となり、或は大學に於てその實力なき者が教授となる事が不正である如く、全社會においても全世界においても、その實力なき者が實力以上の物を持つたり、實力以上の領土を持つて之を持てあましたり濫用するのは正義に合しない。かかる部分的不正のために全體の進歩發展が阻害されるからである。

謂ゆる「持つ國」と「持たぬ國」の世界對立も、その世界文化的意義は決して單なる或る一國の利己的物質問題からのみ見るべきでない。更に進んで如上の國際正義の立場から考へなければならぬ。

「持たぬ國」とて凡てを持たぬのでない。勞力と能力は充分にあるが、之に對してその能力を活用すべき舞臺を持たないのだ。「持つ國」とて凡てを持つてゐるのでない。立派な檜舞臺だけは持つてゐるがそこに働く肝腎かなめの名スターがないのだ。知るべし、立場を換へると「持つ國」は實の所「持たぬ國」となり、「持たぬ國」は「持つ國」となるのだ。

だからがらあきの檜舞臺に名優の乘込む事は、世界經濟の發展と世界文化の向上に宜しきを得る事であつて、之こそ國際正義なのだ。

現代が國際秩序の是正時代であるとは斯る意味にほかならぬ。

四　戰爭の歷史的意義

戰爭とは自己の意志を實現せん爲に對手を制壓する强力行動である。だから戰爭は（1）實力の均衡を失せる事（2）實力相應の機能を發揮せんとする事（3）然もその要求が單に理性力によりて貫徹されず、その持つ一切の全體力——體力・智力・勇氣・武力・其他の科學的技術力——を必要とする場合に發生する。從つて戰爭は外交手段で貫徹できないから外交の延長或は寧ろ外交の飛躍である。

戰爭は元來が全體的のものである。最近は戰爭を以て全體戰爭と稱し、それが全國民の一切力の總動員で爲されるやうに氣づかれたが、昔から凡ての戰爭は何等かの意味に於て、之を構成する全員の負擔で爲された。ただ、戰爭が短期間で終れば國力の凡てを動員するに及ばないから、全體戰でない

やうに見え、或は時代により全員に要求する犠牲・貢獻の方法内容が違つてゐるから全體戰たる特質が目立たなかつたに過ぎぬ。

直接の武器では石と棒から弓矢、或は進んで鐵器時代の刀劍や化學工業的な火砲となり、間接武器では軍艦・戰車・飛行機等となつて、次第に戰爭當事者の組成員全體の能力が問題となつて來た。從つて現代が特に全體戰爭と見られる理由はあるが、古代は古代なりで同じくその集團人の技術的・經濟的能力がその第一線の戰鬪能力を支配してゐたのだ。

だから戰爭に勝たんとする努力は、必然的に各部屬・各集團の文化を發達せしめ、戰爭に勝つた者は何等かの意味において負けた者よりも此世の生存に値ひし、意識的無意識的に世界の進歩的役割を果してゐたのだ。丁度、生物の進化がその不斷の生存競爭による如く、人間の文化發達も戰爭に負ふ所頗る多い。少し位は體力が落ちても石器人よりも鐵器人が戰爭に勝ち、刀槍使用者の社會よりも銃砲文明の社會が戰爭に勝つた。わが維新の武士と大衆から成つた官軍、その持つ刀槍と銃砲の大きな開きを見よ。

戰爭は斯く各集團・各社會國家の文化發達に直接貢獻するのみならず、また同時にその文化を傳達流布する効果がある。アレキサンダー大王のアジアの遠征が東西文化の媒介に偉大な役目を勤めたのを始め、十字軍其他大小さまざまの戰爭が、それ相應の文明媒介役を發揮せるは周知の通りである。

戰爭の當事者が各々その自己的立場から戰つても、戰爭は上述の如く全體的な優强者の團體を殘し

て弱者的社會を淘汰する。換言すればその心身やその知勇やその犠牲的道義力や科學力など凡てを綜合して此の世界の文化發展に最も適する種屬を生き榮えしむる大いなる宇宙淘汰律を發揮するのである。戰爭は世界歷史の法廷において或る民族が果して世界歷史を擔ひうるや否や、之を判決する第一審なのである。

だが、世界の進みと共に戰爭目的がいつ迄も斯やうな原始的第一審の判決目的にのみ止まる事は許されぬ。それはより高き普遍的目的にまで止揚されねばならぬ。即ち戰爭の自然發生的動機はよし自己保存或は自己膨脹であつても、それが世界的正義或は歷史の理性に昂められねばならぬ事である。

戰爭が道義的と云はれるのは斯る場合を指すが、それは當然國際秩序の現狀打破と新世界秩序の創建を意味する。蓋し舊秩序の中では能力ある民族や國民も不當の彈壓に虐げられ、價値ある資源も埋沒されたきりで捨てて顧みられず、世界歷史はその進歩を阻止されてゐるからである。

だから、斯やうな場合に社會進歩のために、民族と國家發展のために、進んで世界歷史進行のためには必ず戰爭がなければならぬ。むろん、戰爭ばかりして平和のない所には破壞と死滅のみ殘るが、反對に平和のみありて戰爭のない所にも腐敗と墮落のみが發生する。

戰爭と平和はメダルの表と裏である。一日の晝と夜とである。その一を缺いて他は成立しない。平和の極は戰爭とならざるを得ない。然らずんばその社會は腐朽せん。戰爭の極は平和とならざるを得ない。然らずんばその社會は破滅せん。地球は廻り舞臺は變はる。そして今は正しく戰爭の世代なの

である。

第二　全體主義の將來

一　「自我」の發見と個人主義の効果

個人主義か全體主義か。個人主義が十九世紀初の佛革命以後、廿世紀の歐洲大戰までおよそ百年間に亙りて資本主義發展の基底たり、之によりてその偉大なる物質文明を花咲かせし事は何人もその功績を認むるに吝かでないだらう。

云ふ迄もなく、個人主義は、中世神學の獨斷や法王のドグマの壓制からのいき苦しさに堪へず、恰も十五、六世紀における新世界發見の客觀狀勢に伴うて開かれたる「我」の自覺に基く。神學から科學及び哲學へ、獨斷的信仰から理性的批判への「自我」の發見である。

この「自我」の發見は考ふる事の自由としての宗教改革、語る事の自由としての言論の自由、働く事の自由としての資本主義を要求し、遂に政治革命としては議會政治の確立、法律的には私有財產の保護と契約の自由にまで發展して、現に見る華麗な文明を築き上げたのである。

社會的客觀狀勢が「個我」の覺醒を喚起したか、或は個我の覺醒が社會的客觀狀勢を展開したか、

まことに微妙なる相互聯關作用ではあるが、何れにしても斯く目醒めたる個我は當然にさまざまの自由を要求し、その充たされたる自由が又個我の生長發達を助け、個人主義と自由主義とは兩々相俟ちてその完成を遂げるに至つた。

殊に當時發生した資本主義は唯だ個人的イニシアティーブで世界の資源が開發せられ、その資本も蓄積せられたのだから、個人主義と自由主義は實に資本主義發展の左右に仕ふる侍女であつて、議會は又その保障者であつた。蓋し當時の產業は尙ほ幼稚であつて高度化してゐなかつたから、その開發に現在の如く巨額の資本を要せず、少しの勤勉努力を以て蓄積した資本で能く社會の一角に雄飛し得たのに加へ、開發さるべき資源も豐富であつたから、優勝劣敗の自由競爭こそ社會的公正に適合し、その優者が資本を蓄積して、ますます資源を開發する事は全社會の爲でもあり又國家發達の源泉でもあつたのである。

アダム・スミスが「見えざる手」の導きを說きて、各人は自己の利害を知るに最も賢明であると云ひ、この賢明さに任して各人が自由にその利益を追求する結果は社會の利益も自然に調和して最も幸福であるとの樂觀論を吐いたのも、或は十九世紀後半にダーキンが生存競爭と優勝劣敗、適者生存則による自然界の調和を見たのも、凡てこの個人主義・自由主義の時代的背景による。そして國際的には英國が資本主義の先頭に立ち、他の諸國は半製品國或は原料品や食料品生產國として、世界は國際分業の下に平和なる相互交換を必要とした。自由通商が世界的生活原理であつたのも故なしとしない。

だが、十九世紀後半から世界産業は輕工業から機械工業・重工業へと高度化し、その建設に巨大資本を必要とするに至りて、獨占的巨大資本體のみ能くその存在に堪へるに過ぎぬ。之につれて人的能力は第二義に落ち、もはや自由競爭は社會の推進力たる重要さを失つた。そこで自由主義も亦次第にその影が薄らがざるを得なくなつた。

他方、國際的にも世界はいつ迄も英の尖端的・獨占的の地位をゆるさず、獨・米・佛などの競爭者が出現するに至り、自由通商も危機を告げた。でも、なほ國内に多大の開發資源を包藏する英・米にとりては、自由主義と個人主義が社會發展の生活原理でもあり、國際的既得地盤を擁護する世界秩序でもある。

二　偽りの自由主義

自由主義とは何ぞや。フランス革命に際し、「おお！　自由よ、自由の名によつて何んと多くの罪惡が行はれたる？」と叫ばしめたる自由。かかる自由とは元來、自由それ自身の爲に存在するのか、或は他の目的の爲に存在するのであるか。

個人主義者は自由が個人の人格發達の基本條件であるとなし、之を神の如く尊ぶ。彼等は自由に十一の種類ありと云ふ。曰く身體上の自由、信仰・思想及び社會上の自由、さらに團結の自由、其他經濟や家庭上の自由から地方的自由、國民的自由、政治上の自由等。むろん吾々も社會の進歩が自由主

義に負ふところ多く、專制壓迫が決して社會國家の發達を促すものとは思はない。凡ての歴史は或る意味に於て自由主義發達の歴史と見られよう。

さりながら、同じ意味において歴史はまた平等の實現、博愛普及化の行程でもあり、これと相並んで統一と統制强化の確立史でもあるのだ。眞の自由と眞の統制は決して矛盾しない。それを矛盾するが如く考ふるのは十九世紀的自由主義であり、專制壓迫を打倒するに急なる所の寧ろ一方的・反動的自由主義なのである。

故に斯る自由主義を今もなほ金科玉條とし、生活の唯一の指導原理とする事がいかに時代錯誤であるかは、その由つて立つ自由主義の意義を檢討すれば直ちに分るであらう。

自由主義者は自由を以て「强制なき狀態」と解する。もし自由が强制なき狀態ならば社會も國家も成立しないのみならず、個人の人格完成もあり得ない。飲みたい時に飲み、寢たい時に寢る。自然的衝動と本能のまにまに行動し、之を强制抑止するのはその自由を踏みにじるものとして、人間のもつ諸々の欲望を自儘に認めたらどうなるか。その人間は啻に社會に迷惑をかけるのみならず、また本人自身も早晩背德、不健康な生活からくる報いを受けるであらう。

かやうな自然主義、自然に生起する一切の衝動や煩惱に何等の價値批判も加へず、何等の强制もせず、そのあるがままに是認肯定することが自由主義とせば、それは動物的存在と同じであつて、獅子や鷲の如き孤立生活を營むのほかはない。然もこの猛者どもがその種屬の繁榮を來さずして滅亡に瀕

し、寧ろ弱くても統制的集團生活をなす草食動物が、その群生活と自己保存を完うせるを知らば、いかに强制なき世界が呪はるべき生活なるかが分るであらう。

三　眞の自由主義と統制

偉大なる人々は云ふまでもないが、普通人でも苟くも一個の人間である限り、必ず或る一定の理想の下に生活を規律し之に背反する恣意・欲望を統制してゐるのである。守錢奴すらも貨幣價値を增殖する爲には並み大抵ならぬ克己節制の生活をしてゐるのは周知の通りだ。その目的こそ低位ではあるがその生活には一種の質實な嚴肅さがある。

自由主義を徹底すると全く始末のつかぬ自然主義の動物生活に墮する。そこで自由主義者も人生の目的を理想に置かざるを得ないが、もし人生の目的を或る一つの理想實現に置けば、その爲に必ず諸種言行の自由を或は抑壓し或は强制しなければならぬ。カントが如何にその偉大なる理想實現のためにさまざまの雜念と言行を抑壓忌避せしかを見よ。そこでは自由が自由主義者の云ふ如く決して强制なき狀態ではなく、實は非常な强制狀態なのだ。偉大なる理想を指導原理として凡てを抑壓强制してゐるのだ。本當の意味で自由とは斯く理想に導かれたる內的必然の發展行動を指す。從つて自由とは强制なき狀態ではなく、反對に大いに强制ある狀態である。ただ、その强制が一つの指導精神による所に特性があるのだ。

自由主義は初め專制主義に反抗して起つたもので、資本主義の生誕期に當りては各個人の活動をその中世的束縛から解放する事が何よりも經濟開發、延いては國富增進の基本要件であつた。そこで放任政策或は各個人の强制なき活動狀態こそ自由主義の理想と思惟されたのであつて、之は當時の社會進步のためにも望ましい事であつた。ここに自由主義者の謂ふ「强制なき狀態」の時代的自由の役割と限界とがある。

歐洲大戰におけるロイド・ヂョージやウイルソンの自由主義の强調、現在のデモクラシー國家群もその眞相は偶〻それが今の彼等の國內的・國際的生活原理として有利なために外ならず、特に永遠の眞理でもなく、古今の鐵則でもないのだ。

四　階級主義・共產主義の自壞運動

自由主義を基盤とせる自由資本主義は、自由競爭の必然的結果として弱者併呑、巨大資本制覇の獨占資本主義を現出したが、斯くなりては個人の能力も勞力もその力を發揮する由もなく、一意資本の至上命令に默從するほかはない。自由は死んだのと同樣である。勢ひ巨大獨占體に叛旗を揭げざるを得ない。その理論づけこそ社會主義である。資本による勞力搾取說であつて、歸結は資本公有論となる。

資本の公有を歷史的發展の線に沿うて議會的立法的に實現せんとするのが社會民主主義であるが、

その歴史的發展段階を無視し、一擧に暴力的に社會主義の社會を作り出さうとするのが共産主義でもある。その爲に過渡形態としてプロレタリヤ本位の獨裁政治を必要とし、「能力に應じて働き、欲望に應じて取り得る所の」、生産能力と消費欲望の間とに聯關性のない經濟制を布かんとした。

だが、斯やうな共産主義は現在の人間性にとりては餘りにも現實、離れした眞空的抽象論でしかあり得ない。國家なき社會とか、その働きと報酬との間に何の關聯もない生産組織は、現實の史的段階を全く無視した一つの空想を眼前に展開せんとするものであつて、徒に混亂と不正を出現するに過ぎぬ。何よりもソヴェートの現狀が之を世界に實證した。

大戰後ソヴェートの共産主義のこの地上に現はれるや、赫々として一世を照し日月ために暗しの勢であつた。ソ聯自身は固より、世界の到る處に、そして我國にも是こそ新時代革新の眞理として如何に一代の識者や學者や若き學徒を吸引したかは、何人も記憶に存する所、これこそ社會革新の科學的神殿と仰ぎ見られ、沒落資本主義の第三期と、新社會の出現は眼のあたり光り輝く彼等の希望であり信念でもあつた。焉んぞ知らん、その共産黨の大本山が逆に一朝にして血の肅清による自壞・自滅作用を起さんとは。

何故に共産黨自らが、しかく轉落變革しつつあるか。理由は次の如し。

(A) 歴史的段階から見ると、社會主義社會の成立には尠くともその歴史的發展段階として資本主義の充分なる成熟と工業の高度化を前提とするはマルクスの說く如くである。然るに大戰前のソ聯は

封建的農業國であつて、資本主義初期の自由主義的産業革命もデモクラシー制の樹立すらも認められなかつた。それがいま、一足飛びに社會主義社會に跳躍せんとしても歴史的必然性を缺く。その脆弱なのは當然でなければならぬ。

(B) 民族的素質から見るも、本來ソ聯を構成せる重心民族はスラブであるが、このスラブ民族なるものが世界歴史に現はれたのはそんなに古い事ではない。そしてこの支配者階級こそ英人・獨人等と同じアリアン系であるが、被征服者たるスラブ大衆は元來が半歐半亞の混血種である。ロシアの建國は西紀八六二年ノルマンの一酋長ルーリツクに由つて初めて歴史に現はれたが一二四一年にはたわいもなく蒙古に征服せられ、一四六二年ルーリツクの遠裔イワン三世の時漸く蒙古の羈絆を脱したが國勢は振はない。一六一三年ロマーノフ家が帝位に登り、一六八二年ピーター大帝の卽位で漸く歐洲の仲間入りをするのである。初めから半歐半亞の雜種が、二百年間蒙古人に支配されて愈〻アジア化が强く、元來の農民的素質に加へて蒙古的の牧畜的漂泊的素質さへ加味した。玆にトルストイのカチユシヤの如く夢を追うてシベリアの寒土をさ迷ふ民族となつたのである。

その文化は上層中層階級の一部を代表せる北歐人とユダヤ人によりて歐化したものの、スラブの大衆は本來果して高度文明を吸收する能力ありや否や、頗る素質疑問の民族なのである。それが大戰後の共産革命以來は、殊に技術家・資本家・軍人其他の知識階級・中産階級など北歐系に屬する社會中堅層を、或は追放し或は慘殺し、最近の血の肅清で批判能力ある硬骨漢を一掃したのであるから、殘

るはスターリンを取卷くユダヤ人一族あるのみ。他にそれらしい頭腦はどこにもないのだ。

だから、ソ聯なんて如何なる社會制度を取らうと、大衆は默々として命これ從ふ都合の好い連中であるが、それだけに如何なる高度機械を英・米・獨から求めようと、その生産力もその軍隊力も大して恐れるに足りない。筆者は昭和六年著『世界景氣は日本から』(二〇〇頁)でこの立場からソ聯の五箇年計畫力なんてさう恐れるに及ばぬと述べたのである。

(C) スターリン共産制には更に大きな弱點がある。同じ獨裁でもデモクラシーの段階を經た獨・伊では民意を無視して獨裁されない。一見いかにも强制・壓迫的に見えても、その實それぞれの機關を通じて全體的總意の下意上達を果たし、且つそれぞれ指導者・代表者の名において何人もそれ相應の社會的名譽もその功勞に應じて得られる。のみならず、資本家は統制の中にも適正利潤の獲得とその企業的イニシアティーブの發揮が奬勵されるし、勞働者もまた獨占資本時代よりは寧ろ資本家との生活懸隔も縮小し、それ相應の名譽が比較的公平に表彰せられ享樂も味へる。

然るにソ聯の共産主義はどうであるか。そのスローガンは「生産は能力に應じ、消費は欲望に從ひ」であつて全く個人の努力や能率や功績を無視し、しかも權力や名譽はスターリンとその取卷き連の少數者が獨占し、剩へその餘剩生産は擧げて國防强化に振向けて仕舞ふ。偶々のぞく映畫や劇は凡てイデオロギーづくめ、御說敎づくめ、スターリン禮讚づくめである。これではスラブ民族がいかに愚直であり、諦め强く忍耐に富むと云つても、全社會のどこ一つにいき拔きの穴も、光りの入る窓もない

のだ。窒息するか然らずんば閉居して不善な闇取引を樂しむより致しかたがなからう。どうして眞の建設的愛國心が起らう。スターリンは、元來がお人善しで消極的受容力の强いスラブの默從を餘りにも利用して滅私奉公を强要してゐるのである。揚句の果てが萎縮と反スターリン熱の內訌となつたのも自然の道行である。そこで民心を外に向けざるを得ない。その時を待つこと玆に久し。

もともと社會主義若くはプロレタリア黨は、資本主義或はブルジョア黨の階級獨占に對し、反措定(そてい)として出現したものであつて、その資本主義の弊を剔抉しその橫暴を戒告した點に於て社會進步に貢獻した所はある。だが、資本主義も初めから弊のあつたものではなく、寧ろ當初は社會進步の主役者として登場したのは云ふ迄もない。ただ、發達の極、巨大なる獨占的形態をとるに及んで玆に社會全體の進步と漸次對立してきたのに過ぎない。

だから、資本主義體制も社會主義者の云ふが如く、之を一擧に廢棄すべきでなく寧ろ如何にして之を全體社會の發達に貢獻せしむべきかを考ふべく、その存在がどうしても全體社會の發展と合致しない場合に立ち至らば格別、然らざれば現資本主義社會の弊を矯め、その生ける所を善用しながら之を全體的立場で裁斷する事が最も現實的であり、且つ歷史發展の必然であらねばならぬ。卽ち資本主義は正Thesis、無產主義は反Antithesisの役割を勤めたものであつて、落行く所はその合Synthesisたり、止揚としての全體主義であらねばならぬ。

五　現代と全體主義の哲學

個人主義者は社會も國家も個人の爲に存在し、個人が社會や國家の爲に生存するのではないと云ふ。果してさうであらうか。

個人の生命は短く、國家は永し。この永い生命の國家が果して短い生命の個人の爲に存在するのであらうか。

先づ生物を見よ。いかなる生物も個體の爲でなく、種の保存の爲に存在するのは一々例證する迄もない。多くの昆蟲は子供を生むだけで、生んだ後はその種の發展のために子供を殘し、親は潔く死んでゆくのである。多くの生物は實際この世に、種の繁殖の爲に生れてきたと見るほかはない。從つて雄は概して雌よりも短命である。雌は子を孕み、その子を自立せしめるだけの哺乳育成期間を必要とするからである。

然るに高等動物殊に人間になると、男とてその種を殘しただけで彼自身が直ちに死滅しない。これは餘剰精力の多い爲でもあるが、同時に男女分業の結果として男もその妻子を養ふために長生の義務と權利をもつに至るからだ。そして同じ人間でも社會の發達するほど子供の自活能力の訓練に長時日を要するから、その兩親の生存權も延長せざるを得ず、之につれて人間はその種と離れて各々の個がその獨自的存在權を有する如く思惟するに至る。心理學上で謂ふ「手段の自律化若くは目的化」が之

であつて、初めは種の保存養育のために認められた長命が、後には自分自身のために端初からさうであつたやうに考へる。之が個人主義の發生原因である。

個人主義者はその存在意義を個人におき、或はその快樂の充足を或は進んで個人能力の最高度なる圓滿發達を終局目的とする。だが、何人もその個性は萬能ではないから、その人格能力の最高度の圓滿發達と云ふも、實は社會の一要素・一機能としての人格にほかならない。故にそれは社會とか國家の發展に如何なる役割を占めるか、どれ位重要であるか、それによりて各々の人格や能力も意義づけられる。社會を離れて人格は成長せず又その存在理由もあり得ない。

物質でも最後の原子は陰電氣と陽粒子の集團から成立し、一單子として存在してゐない。だから、宇宙現象は凡て個が先きか全が先きか、その前後が決せられない如く、集團社會でも個人が目的か反對に社會國家が目的か、それは、時代と社會情勢の如何により或は個が目的で全が手段的に見える場合があり、或は全が表に出て個が裏に隱れてゐる場合もあるが、何れも有機的全一體の顯現に過ぎぬ。

ヘーゲル哲學は正反の辯證法であるが、その部分的正反はすべて全體者の實現の爲である。歷史における偉大なる人間が自己の目的を追求するとき、その目的の裡には世界精神の意志が潛められてゐる。個人が自己の爲だと思つてやつてゐる事も實は世界理性が背後で之を操つてゐるのだ。だから世界精神・世界理性がその大きな目的の爲にその個人を使用し竭すと、玆に個人は或は肉體的に死し或は時代から捨てられる。それが謂ゆる「理性の狡智」であつて、個人の否定に於て普遍意志は自己實

現を爲す。個はかかる普遍意志の實現手段である。シーザーもナポレオンも皆然らざるなしだ。

ただ、歴史的・時代的に見ると、「全」が或る發達を遂げると之を内包的に充實するために、その組成分子たる「個」の發達を必要とし、反對に個が充實せる極はどうしても全の外延的發展を必要とする。その循環的客觀狀勢に應じて、「個」の哲學と「全」の哲學、個人主義と全體主義が交互に時代の指導精神となる。戰爭の世代はまさに「全」の主流時代である。これも個の充實と發展の極にもたらされたる歴史的段階であつて、戰爭自身が「個」の充實によりて、更に擴大せる「全」の要請に外ならない。何れは歴史の理性に淵源する。

この全體主義が外に發して或はブロック經濟となり更に協同體論となり、内にありては統制經濟となり、進んで計畫經濟となる。猶ほ個人主義が内にありて自由資本主義となり、外にありてナショナリズムとなつた夫の十九世紀初頭ナポレオン戰後に見たのと同じ發展過程である。

第三　東亞ブロックから協同體へ

一　資本主義の三轉とブロック經濟の必然性

かうして戰爭の世代は全體性を要求し、全體性はまた對外的には世界經濟の生存單位を强化擴大す

る事を要求する。然らずんば新時代においてその國は世界政治に力量を缺き、世界經濟に對しても、世界戰爭に際しても、他國より劣るところが多く、その全體戰に到底戰ひぬき勝ちぬく事ができないからである。

だから、ブロック經濟の目的はそのブロックにありて可能的にその自給自足力を確立するにある。むろん自給自足と云つても時代により環境により、その内容や程度は異るも、ここでは現代的自給自足を指すや云ふまでもない。換言すれば現代にありて他國との經濟戰に對等互角の立場で交渉し競爭しうる經濟力と、高度の國防國家建設に必要な自給力をもつ事である。

ブロック經濟は斯くの如く時代の必要から當然組成されねばならぬ世界經濟單位であるが、それは又歴史的發展の一段階でもある。資本主義經濟の高度化と共に、その世界經濟化と共に自然に擴大せざるべからざる先進國の生存單位擴大運動である。ドイツの謂ふ「生活圏」Lebensraum 進んで「大勢力圏」Grossraumと同じである。

元來、資本主義とは何ぞや。かのリンコルンが民主主義に下した定義 Government of peoples, by peoples, for peoples の文句を拜借すると、又 Economy of capital, economy by capital, economy for capital と云へよう。即ち資本主義經濟の支配者は資本であり、それは資本に依つて運轉せられ、その目的もまた資本の蓄積にある。從てこの世界をすべて資本化する。商品は資本蓄積の手段であり、教育すらも投資の變形と見られる位だ。

これは全く十八世紀の産業革命で、生産の指導力に自然や勞力よりも遙に資本の力が加重し、其後ますます加重した結果である。ところが周知の如く辯證法で分量の增加が或る一點に達すると質の變化に急轉止揚されるが如く、資本主義もその蓄積の增大につれて三變し、之につれて啻に國家の生存單位も擴大を要請されるのみならず、國內的政治形態もおのづから變轉を餘儀なくされるのである。

いま之を表示すると次の如し。

(1) 初期資本主義時代。約五十年（一八二〇—一八七〇年）

(A) 起點——英國は一七八〇年の產業革命、歐洲はナポレオン戰爭後の一八二〇年頃から。

(B) 國家の特質——同一民族を一ブロックとする民族國家＝ナショナリズム。維新後の日本。十九世紀における歐洲各國殊に獨・伊の統一國建設など。

(C) 經濟の特質——自由主義經濟卽ち中・小企業の並立とその自由競爭。國際分業の成立と自由通商。

(D) 政治の特質——議會政治。

要するに現在の支那が要求せる民族・民生・民權の三民主義の確立時代である。

(2) 中期資本主義時代。約五十年（一八七〇—一九二〇年）

(A) 起點——一八七〇年。獨・伊など民族國家の完成。英國先頭の國際分業が、獨・米等の進出による國際分業の相剋狀態現出。

(B) 國家の特質——一民族國家たる本國と異民族たる植民地、卽ち內地と外地とのブロック＝帝國主義國。

(C) 經濟の特質——大企業の獨占資本體の發展と金融資本主義。之に伴ふ保護貿易及び輕工業から重工業へ。

(D) 政治の特質——政黨首領の寡頭支配。

(3) 高度資本主義時代——約五十年（一九二〇—一九七〇年？）

(A) 起點——歐洲大戰後の一九二〇年。

(B) 國家の特質——帝國に加へて隣邊獨立國・半獨立國との一大合成單位＝現在のブロック經濟。協同體或は大勢力圈の確立。

(C) 經濟の特質——自給自足力の擴大を目標とする統制的計畫化經濟。

(D) 政治の特質——獨裁的政治。

右の如く現在の大ブロックも、各國產業の高度化、世界交通の發達と精銳なる長距離武器の出現に基き、古代から次第にその生存單位を擴大した小ブロック、中ブロックの大ブロックへの歷史的發展にめぐり合はした結果である。だから現代においてかやうな大ブロックを完成する力なき者は世界歷史の敗者たる運命を免かれない。（淺香末起氏『世界經濟の展開過程』昭和七年拙著『東亞モンロー主義への驀進』同八年『生の經濟哲學』四四三頁以下參照。）

英國はアメリカ發見後その有利な地的環境を善用して歐大陸の係爭から逸早く脫し、獨り世界に進

出して世界の富と植民地を獲得して他の條件と相俟ち、他國より一歩さきに中央集權と産業革命を完成した。之に對して佛獨其他の大陸諸國は、ナポレオン戰爭で漸く封建制度の土崩瓦壞と、一國一民族主義の自覺運動となり、玆に資本主義社會に進んだのである。

封建制度が資本主義制度に昂揚するのは、政治的・社會的原因の混淆ではあるが、之を經濟的に見ると生産力の增大である。日本でも德川時代に各藩で諸種の産業を各自で奬勵したが　結果は（A）その産業の技術的一分業的發展等のために、縱へ生産者の數を制限してもその生産分量は增加し、勢ひ購買力ある他藩市場を開拓しなければならぬ。（B）製品の生産增大はその原料獲得の增大をも必要とし、これも亦他藩に仰がざるを得ない。（C）況んや城下と農村との分化につれ、貨幣の流通が賣買の常態となり、この貨幣の流通はまた分業の發達を促進して購買力の增加せる町人階級の消費向上を招き、各藩の低度な自給自足力を衰へしめて、玆に全日本は一大ブロックとならざるを得なかつた。即ち生産力の增大は必然的にブロック單位の擴大强化運動とならざるを得ないのだ。

資本主義の三變轉もまた封建經濟が資本主義に移つたと同じ原因、同じ過程を辿り、第一期に於ては一國家を生産と消費の單位として、その内で自由に競爭せしめる事によりて、一國内の資源が最も効率的に開發せられ、資本の蓄積もぐんぐん殖えて行く。その中に生産力の增大から生産過剩となりて幾度か經濟的恐慌を起し、結果は中・小企業家の沒落、資本の集中となりて大企業家のみが殘存肥大し、以て獨占資本時代に入る。獨占的大企業は、一面において企業經營の合理化によりますます生

産力を增大するも、他面において中、小企業家の沒落と、機械化による失業增大で大衆の購買力は相對的に減少し、已むなくその製品の海外投賣に出でざるを得なくなる。

かやうにして國内の獨占資本は對外的には帝國主義時代と對應し、各國の植民地獲得運動が一八七〇年前後における獨逸帝國の勃興や民族國家の完成を轉換點として次第に熾烈を加へてきた事は、ホブソンやレニンの帝國主義論が詳かに說いてゐる。一九一四年の歐洲大戰は實にその極頂に達する帝國主義角逐の爆發せるものであつて、英獨は各々その兩陣營のトップに立つものと云へよう。即ち普佛戰爭後その五十億フランの償金とアルザス・ローレンの鐵鑛を得て、最もモダンの新生産裝置で世界經濟に乘出せる獨逸生産力の英國市場攻略戰であり、之に對する英の獨逸經濟力壓倒戰である。

同じ歐洲大戰の過程が現に展開されつつある。異なる所は攻むるは戰前の獨・墺に對して獨・伊であり、ソ聯であり、構築せんとする經濟單位は本國植民地を一ブロックとせる帝國に比して、更に緣邊の他國植民地若くは獨立國をも網羅せんとする大ブロックたる事である。即ち東亞の日滿支の如きは模範的であつて、本國と植民地の從屬關係ではない。獨立國關係である。

二　東亞協同體と民族問題

ブロックから協同體へ！　この聲は昭和十三年の秋頃から我國の論壇を賑はしてきた。だが、その區別もまだ分明でなく且つ協同體の根據も一定してゐない。一般にブロックと云へば（A）その範圍

が經濟的部面に限局されるに對し協同體は政治的・文化的範圍にも及ばんとせる事、（B）ブロックは其中の一國家若くは一民族が指導的立場を取り、一歩誤れば帝國主義的搾取關係に陷り易きに反し、協同體はその參加國、參加民族が對等的互助連環の關係にある事を意味するやうである。

本來の協同體（ゲマインシャフト）Gemeinschaft は地又は血に基く一體感の意識をもつ共同社會を指し、利害とか共通目的の達成を目指して結合する利益社會（ゲゼルシャフト）Gesellschaft と對立する社會構成の二大定型と云はれる。

筆者は兩者を程度の差と思惟し、異質の差あるものとは認めない者である。利害の交りも久しければ感情的親和の結合となり、同類・同族意識の社會もその奥底には生活若くは其他の相互依存性を含んでゐるからである。理想的協同體は兩者の結合性と、依存性の强大によりてのみ期待せられる。

いま日支が東亞協同體を構成する爲には、（A）感情において血の一體的・同族的意識卽ち同一人種、進んで同一民族意識、（B）地の共同的運命意識卽ち日本が滅びる時は支那も亦必ず滅び、支那の滅びる時は日本も亦滅びると云ふが如き運命一體觀、（C）或は日本の强力化が卽ち支那の强力化となる信念、（D）或は日支は政治的・經濟的に双方とも不可離の依存關係にある事、（E）更に文化的の依存關係、若くは日支共通の東亞文化の存在と發揚の必要等の互助連環性がなければならぬ。

然るに筆者は現實の日支關係では、日本はよし支那を必要とするも、支那は未だ日本を必要としないし、日支民族や日支文化においても兩者の共通性が稀薄としか思へぬ。兩者が經濟的依存性の緊密を感じないのは、その經濟的發展段階が日本は既に高度資本主義國であつて他國へ發展の要あるも、

支那は現在漸く地方的自給自足の封建經濟を脱し、これから初期資本主義に進入せんとしてゐて、提携者よりも、寧ろ自國經濟の技術的指導と資本的後援者を必要とする爲である。かの三民主義の要求は恰も日本の維新前後に似たその社會的客觀狀勢に對應するものと考へなければならぬ。ゆゑに日本の維新當時に日本は英・獨・佛に對して何を要求したかを反省すると、いま發展段階に開きのある支那に對し、對等的互助連環を日本が求めても支那に通じないのは、猶ほ壯年男子が年若き者に結婚を求むるのと同じでなからうか。

筆者も固より理想として東亞協同體を將來に期待するものであるが、その前提として（A）蔣政權の抗日意識を完全に支那大衆から拂拭する事（B）日本が資本的・技術的に支那の資本主義發展を指導して兩者の國民生活竝びに國家繁榮の依存性が一層緊密化する事（C）日支の共榮擴大化が兩者衝突のモメントたらずして、第三目的の實現に役立つ事。實例で云へば獨・佛はアルザス・ローレンの爭奪戰で一方の强大化は常に雙方衝突の契機となるに過ぎないから之を避けるには一方が完全に他方を屈服するか、或は雙方が第三國方面へ互に進むの外はない。ちやうど獨・伊協定が獨の東向又は西進政策と伊の南下地中海政策と毫も衝突せず、兩ブロックの强大化が反て相互の依存關係を一層有利にするならば、ここに獨・伊樞軸のゲゼルシャフト的鞏固さがあり、延いて精神的ゲマインシャフト的一體感すらも釀成せんとするのと似てゐる。

だから、日支の東亞協同體成立には、まづ日本が指導者として之等の前提條件を創造し、その環境

を作り出すと共に一方の强大が他方の强化を招來し、雙方の强大化が毫も鬪爭原因たらずして、却て兩者の發展を齎らすやうな超越的目的を發見しなければならぬ。例へば支那をその植民地的狀態から脫却するため香港或は西北又は西南地方の失地回復を手傳つてやると共に、日本も日支共同の力によりて南方への發展を期するやうに身構へてこそ、日支は互ひにその强化を助けあへるのである。

ブロックと云つても、その內容關係に千差萬別あるは恰も本國と植民地關係にも種々の段階差別のあると同じだ。從つて之を一律に搾取關係と斷ずるのは誤りであり、また美しき名に囚はれて協同體とさへ云へば相手が喜んで來ると思ひ、その發展段階に隔差ある者を强ひて對等視するのも徒に雙方の誤解と混亂と不幸を招くに過ぎない事もある。

殊に支那民族は四千年間、艱苦の歷史にもまれ練られ、國家としては弱きも民族としては强き生活力を持つてゐる。この民族に對して、いま近代的國家體制の枠をはめんとするのである。單に觀念的・理想的構想よりも寧ろ現實の大地に立てる支那民族の厚生を計るべきであらう。彼等に先づパンを與へよ。徒に石を得たりと叫ばしむる勿れ。

日本人は曾て本當の意味において異民族と直面したことがない。この結果として日本人の異民族觀は頗るあまい所もある。換言すれば民族性なるものが口だけでいかに融和し難いものであるかを知らない。民族とは種族的に血を同じくせる者が歷史的に鍛造された生活協同體であつて、斯る民族が更にその特色を發揮しながら大同團結して一大生活單位・世界歷史における發展單位・文化單位の全一

體を構成しようとするのが新なる東亞協同體論である。

之には先づ民族一般の研究、日支民族性の再吟味、東亞共同の史的使命等が今後取上げらるべき新課題でなければならぬ。同時に日本民族と日本國家も一層强力になるやう再鍛錬・再編成されなければならぬ。

第四　統制經濟から計畫經濟へ

一　統制經濟の變質

統制經濟の發端は（A）戰後各國の世界市場奪還若くは進出のための合理化運動、（B）その結果としての生產過剩とその調整の必要に基いてゐる。

一體、歐洲大戰後の世界は次の諸原因から各企業の合理化を必要としてきた。

（イ）大戰中の物價高・賃銀高に對し、戰後の一九二〇年（大正九年）はその第一恐慌に襲はれ、物價は漸減傾向を辿りしも、賃銀はデモクラシー思想と勞働組合の發達、更にマルクシズム運動の世界化によりその引下げが困難であつた。この物價安・賃銀高を乘切るには米國はムダ省きと能率增進運動から合理化運動に赴かざるを得なかつた。

（ロ）獨逸はベルサイユ條約により一三二〇億マルク、年々少なくとも二〇億マルク以上の金貨償金に惱まされたが、一九二四年八月ドウズ案の成立により、年々の償金負擔額も激減して頗る希望化せられたと同時に英・米の投資も加はり、その國際貸借の好轉によりて償金支拂ひへと起ちあがつた。その爲には獨逸經濟の合理化を必要としたが、これは當然他國にも響いて謂ゆる世界的合理化運動を捲きおこすに至つた。

（八）歐洲の政界並びに財界はドウズ案の成立と、これに續く一九二五年のロカルノ條約によりて安定傾向の見られるや、英國も戰後すでに徐々にデフレ政策をとつて金本位復活を企圖してゐたから、一九二五年五月、いよいよ舊平價解禁を實行して財界合理化の一歩を踏出すに至つた。

之より先き瑞典は一九二四年舊平價解禁をしたが、英の金本位復活によりベルギーは一九二六年、佛は二八年に何れも平價切下げと金本位復活を斷行した。

戰後の合理化運動は右の如く內にありては物價安・賃銀高による利潤低減を克服し、外に對しては戰時中に失へる國際市場の奪還若くはその對抗を目的としたものであつた。殊にソ聯の國際市場からの離脫と、中歐新興諸國の國際的購買力の減少は、世界市場の狹隘化と工業國の進出鬪爭を一層激化し、之が爲には各國ともすべて自國の低物價政策、その爲の合理化運動に乘出さざるを得なかつた。

日本の合理化運動も實にこの世界狀勢に伴つたものであつて、昭和四年濱口內閣の金解禁と合理化提唱が是である。當時わが物價は大正二年を一〇〇として英・米に比し弗價換算で左の如く割高であ

つた。（東洋經濟新報社調査——「經濟年鑑」による）

	日	英	米
大正九年	二五四	二〇九	一九八
同 十四年	一七六	一六三	一四七
昭和四年	一五八	一三六	一三二
同 五年	一三九	一一四	一一一
同 八年	八一	八〇	八四

上表の示す如く、大戰前同じ一〇〇基準のものが大正九年（一九二〇年）に日本は二五四、英は二〇九、米は一九八を示し、それからの米國は逸早く能率增進と機械化に成功したから大正十四年（一九二五年）には一四七となつた。當時英國はなほ一六三であつたが、英國も昭和四年（一九二九年）には米國並みに一三〇臺に下がつた。然るに日本のみは獨り一五八を保ち、米國よりも實に二〇%も高い有樣だ。どうしても低物價政策に出でざるを得ない。然らずんば輸入超過、國際貸借の不利、財界不況、即ち當時の三大國難と呼ばれた經濟國難と之に乘ずる赤化思想難はその外交孤立難と共に阻止すべくもなかつた。濱口內閣が田中內閣に代つて立つた使命は實にここに在つたのだ。金解禁も合理化運動も已むを得ざる當然の措置であつた。

だが、結果はどうか。世界は既に一九二五年以來マルクシストの謂ゆる戰後資本主義の第二期たる

相對的安定時代を經て、合理化とその當然の結果である生産力增大及び機械化による構造的失業者の出現とで彼等の購買力は減少し、兩者相俟つてそこに急激な生産過剩を示し、世界恐慌はまさしく鮫の淵に陷らんとしてゐたのだ。濱口內閣の折角の低物價策も我れ一〇%を下ぐれば彼れ二〇%を下げてゐて全く徒勞の涯しなき進軍に終つた。

合理化運動は或は新式機械化のために、或は經營單位の擴大化のために、或は優秀企業の集中化のために、結局は大企業の制覇・企業のカルテル及びトラスト化の獨占を將來せずには措かなかつた。反對に企業の獨占化は更に生産力の增大を齎らす他面において大衆購買力の減少を惹起し生産過剩とならざるを得なかつた。斯くして恐慌は永劫の回歸を辿らんとする。

昭和四年ころ初めて現はれた統制經濟は低物價のために經營の合理化と企業集中の促進を企圖したものであつて、昭和六年の重要産業の統制に關する法律や工業組合法の改正等は之に屬する。次で現はれた統制經濟は生産過剩を如何にすべきかの對策から農工産業間の鋏狀價格の是正や、大企業と中小企業間の所得均衡問題に移つて行つたのである。

故に統制の主體も、當初は民間の自治的統制を眼目とし、主としてカルテルや組合の强化とで彼等の統制に委してゐたが、後には國家自身が乘出すやうになつた。即ち統制經濟第一期における自治的統制の指導原理は經營の合理化であつたが、第二期における國家的統制時代の指導原理は國民經濟の均衡と國民の生活安定とにあり、米國のニウ・デイールも亦その段階に屬するものである。換言すれ

ば低物價政策から國民所得の均衡と消費の大衆化政策に推移したのである。厚生經濟がこれである。

二　全體主義と計畫經濟

統制經濟は右の如く、初めは世界經濟への進出、ついで世界恐慌の克服にあつたが、世界恐慌の深化は一面において世界經濟への進出を大いに緊要ならしめ、他面において之を刺戟・促進もした。蓋し各國とも恐慌克服のために自國産業の振興から自然に關稅政策其他の通商關係のみならず、延いて政治・外交關係にまで排他的とならざるを得ず、また多少の排他行爲があつても、各國はそれぞれ國內恐慌對策に忙殺されてこれを一々取上げる餘裕もない狀勢であつた。滿洲における張政權の排日行爲もまたかかる大勢を看取した現はれと見るべく、滿洲事變は實にその形勢の昂じて爆發したものにほかならない。

斯やうにして、ナポレオン戰後と同じ歷史的コースを辿つたベルサイユ條約に對する反抗と國際聯盟の瓦壞は、日本の滿洲進出を契機として切つて落され、世界は急轉して準戰狀態即ち國防國家の再建へと進んだのである。

昭和七年の齋藤內閣から十二年初の廣田內閣辭職までは、恐慌の克服から準戰狀態への徐行轉換期と見るべく、國策の中軸も國民生活の安定と産業貿易の振興發展及び國防充實の三者が、次第にその地位を換へてたうとう首尾顚倒の狀勢を示してきた。

果然、廣田內閣が退却して林內閣の出現するや、國策のヘッドは國防充實に置かれ、產業貿易の發展が之に追從して時の大藏大臣は軍と產業の抱合政策を聲明するに至り、國民生活の安定は表面的に見て國策線上から振りおとされた。

次いで近衞內閣の登場するや支那事變の勃發となり、第一次歐洲大戰後一度びは必ず斯くあるべき國防國家の建設が唯一つの指導國策となつた。だが事變の進行は、支那事變が單なる支那事變ではなく、東亞新秩序の建設から進んで世界史的意義あるを認識せしめて、速戰速決主義はここに變じて長期態勢を取らねばならぬやうになつた。統制經濟が計畫經濟にまで昂揚するのも當然でなければならぬ。

計畫經濟とは全體的立場から各部分の活動を組織化し、國力の剩餘を大ならしめ、擧げて以て國家發展に奉仕せしめる事である。從つて全體主義時代に對應する必然的經濟段階であり經濟樣式である。

計畫經濟の目的は二つに大別されよう。一は國民大衆の厚生であり、他は國家の强化發展である。兩者は終局においては合致するはずだが、具體的には先後表裏の關係をなし、或る場合には必ずしも並進できない事がある。現在は云ふまでもなく國家自身の强化發展を指導國策とする計畫經濟時代である。

マルクシストは、資本主義經濟の生產は社會的であるのに所有は個人的であるから、生產や分配其他の場面に資本主義社會は部分間の對立矛盾と鬪爭があり、そのために全體的立場の計畫經濟は實行

されないと云ふ。だが私的企業を單位とせる資本主義經濟とて全體的計畫經濟が直ちに實施できないとは決まらぬ。いな、反對に私的營利心と個的イニシアティーブの力を適宜に刺激奬勵してその生產力を組織化することこそ、より大いなる經濟的エネルギーが湧出するのである。

之を事實に見よ。曾て誇らしげにその五箇年計畫を世界に吹聽したソ聯の生產力は今はた何の狀ぞ。第一次計畫こそ五年が四年で出來あがつたと自慢したが、第二次、第三次となつてからはどうであるか。恰も平素勉强もせず訓練もしてない學生が試驗に際して俄に徹夜しだしたやうなもので、二日や三日は戰車のやうな勢ひで進んでも、四日・五日・十日ともなれば身體もきかなくなり、頭腦に至りてはまるでコンニャクの如く何を讀んでも這入らない。試驗場では無我夢中何を書いてゐるか自分も分らぬ參りかたと同じだ。何事も初めの一、二回がうまく行つたとて、それで直ちに永久にうまく行くと斷定するのが誤りだ。まして元來が資本主義的工業訓練のないソ聯、頭ののろいスラブ民族に高度產業や緻密な重工業なんて仕遂げられないのは分りきつた事だ。本當の全體的な現代の計畫經濟は資本主義經濟の高度化せる國家、かかる素養の充分な民族のみが可能なのである。

計畫經濟と云つても時代により國情により必ずしも同じでない。ただ或る一つの國策を指導概念として、その實現のために全體の經濟的細胞の生產力を集中化する點で一致するに過ぎぬ。獨・伊にそれぞれの特殊型がある如く、日本はまた日本に最適の特殊性を構想しなければならぬが、何れにしても全體主義時代は「全は個に先だつ」。之を經濟的に云へば「公益は私益に先だつ」のだ。と言つて、

徒に滅私奉公と云ふよりも、むしろ個々を最大に活かして、その能力と成果を國家發展に向向せしむる「活私奉公」の組織こそ計畫經濟時代の課題でなければならぬ。

第五　强力日本の再建

一　武裝國家の建造

日本はこの事變によりてその歷史的使命を發見し自覺した。國際秩序の是正、大東亞新秩序の建設が是である。だが、之が爲には日本自身がまづ强くならなければならぬ。何となれば「理想なき力は兇暴である。だが力なき理想は空想である」からだ。その大使命を果たす爲に、日本はどうしても東亞の指導的地位を確保しなければならぬし、それには日本自身がまづ優强者たる事を要請せられるのである。

それは單に防禦的に金城鐵壁なるのみならず、進んで東亞全體の安危を一身に擔ひ、北は外蒙から南は南洋まで、東はカムチャッカから西は新疆・西藏(チベット)までの大東亞共榮圈を保障する身構へが なければならぬ。然らずんば滿支とて協同體の有難味を體感しないからである。それは日本にとりて重荷過ぎると躊躇する人もあらう。だが今はもう輕重を論ずべき時は過ぎた。どうしてかかる重荷を

擔つて進むべきかが唯一つの殘された問題となつた。ではどうしたら宜いか、云ふまでもなく國家が恰も我軍艦の如く、一つの無駄もないやう能率化され武裝化されねばならぬ。即ち戰爭の世代にある國家として、東亞勢力圈の構築者として、全體主義の立場から計畫經濟の實現しやすいやうに日本國家を改裝し再建しなければならぬ。即ち强力日本の建造である。新體制はここから出發するのだ。

二　日本の歷史的使命如何

世界新秩序の再組織は、日本もその歷史的使命を一役負はねばならぬが、それは主として大東亞勢力圈の建設によりて爲されるものである。この內容に就ては未だ必ずしも具體的に明かでないが、恐らく次の行程を踐むべきであらう。

(A)　半植民地、半封建的支那を完全なる民族國家とする事。

(B)　之が爲に日滿支の經濟的・政治的連環性を緊密化する事。

(C)　その生成はおのづから大東亞勢力圈の結成に導き、その資源開發と史的使命を發揮する事。

(D)　大東亞の史的使命の遂行はまた當然に世界文化・世界歷史の進步に貢獻する事。

大東亞の世界史的役割は右のやうに想像せられるが、そもそも東亞の史的使命は何であるか。その使命に參加する日本は如何なる內容、いかなる場面を擔當するのか。これ亦今後に殘された大きな課題の一つである。

そこで問題は改めて西歐文明と東洋及び東亞文明との本質的差異、さらに日支文明の各〻の特長とその民族精神を、本質的にも發生的にも研究されねばならぬが、それには各國民族の再吟味、その民族の由つて來りし環境や歴史の再認識がますます問題の星座として登らねばならぬ。

第二章　人生觀の轉向

第一　人生觀の大別

一　人生觀の大別

經濟は人生現象の一つである。從つて、人生觀を無視して經濟は說けない。が、人生は刻々として變轉すると共に、これを考へる人も環境や時代によりてその人生觀が變はるのであるから經濟もまた變らざるを得ない。

一般に人生の目的は何であるか。古來、哲學者が考へた人生觀は、やはりその哲學者の人格や境遇或ひは時代、或ひはその哲學者の屬する民族や國家が背景を爲してゐる。

人生の目的を快樂にありとするのは最も素朴な人生觀であるが、これもその哲學者が奮鬪的精神を缺くか、或ひはその哲學者の屬する民族並びに國家が希望を失なひ、他の國家・他の民族との生存競

爭に堪へられない所の、約言すれば生きんとする力を失つた連中の人生觀に過ぎぬ。

快樂論に一歩進んだものが、幸福論であつて、人生の目的を幸福にありとし、これを達することが文明や國家の存在理由としてゐる。故に、また幸福論は必然的に個人主義と自由主義の人生觀でもある。快樂とか・幸福といふ觀念は個人の感情であつて、民族全體として國家自身において、左樣な感じを味はふ力はないからである。

快樂論と幸福論のほかに、人生觀の代表的なものは意志說や理想實現說などであつて、これは人生にありて意志の發展を目的とするか、又は或る神聖な、より高き價値あるものを前提とし、この價値實現のために人生が存在するものとなすのである。

二　快樂論の批判

快樂論は吾々の感覺的愉快さを味はふことが目的である。この感覺的愉快さはすべての動物にあるものではない。動物も或る程度の愉快さは持つてゐるが、愉快な感じは過去の努力で得た結果、その感覺が發達すると、これを刺戟して愉快に感じるのである。初めはその感覺を刺戟することは寧ろ苦痛であつたが、生存上その刺戟をしばしば繰返してゐると軈て快感を覺えるやうになる。例へば食慾にしても現在の我々には或る物を食べると美味いし、また或る物は美味くないが、美味いといふ感じは子供の時から同じ物を食べてゐて、度び重なると自然に習慣づけられて享樂出來るやうになつたの

である。決してそれが直ちに滋養分であるといふ證據にはならぬ。日本人にとつては米や漬物が美味いし、歐米人にとつてはパンやバターやチーズが、さらに支那人にとりては高粱その他の物が矢張り美味く感ぜられるのである。同じ日本人でも大概お國自慢といつて自分の鄕土で出來た物は美味いといつてゐる。鯛や鮎でも鄕土の川や海に取れたものが、日本で一番美味いと自慢する。これは子供の時から野菜物で育つた人は野菜を好み、干物で育つた山國の人は餘り生魚を好まないのと同じで、もともと同一刺戟に對する慣れである。

生物全體として人間まで進化するためにはその間にいろいろの食物を喰べ、或るものはそのために胃を傷めたり榮養不良で衰弱したり、或ひは毒物を食べて死んだりしてゐる。その結果として現在の生物は概ね自分自身で、その食物が、果して毒であるかどうか、或ひは榮養的であるかどうか、これを取捨選擇する力を感覺的にほぼ知つてゐる。人間はなほさらであつて人間が美味いと感ずるものは過去何千年・何萬年間、喰べなれたものであるから、それは大體として人間の體に適した榮養的食物であるが、さればといつて現在美味いと感じる物が直ちに理想的な榮養物であるとはいへない。我々がより理想的な榮養物を科學的に發見する場合、これを始めて口にすると寧ろ美味くない場合にも少なからずぶつかるのである。現に白米食と七分搗とか玄米食の如きもさうであつて、美味いことを標準とすれば何人も白米食を選ぶが、それが最大滋養分であるとは斷定できない。いな寧ろ反對なので

右は一例を味覺に取つたのであるが、すべての感覺に對して氣持がいいといふ快感は、或る程度まで人間の生存發達と合致する部面があると同時に、逆にそれに反する部面も存在する。吾々が現に氣持好しと感ずる香や音であつても、これが必ずしも人間の生存にぴつたり合つたものとはいへぬ。同じ音でも敏感なる猫には人間以上に色々の音として聞えたり、或ひは調子高く不愉快に聞えるかも知れない如く、現在の人間に氣持好く聞える音は、現在の日本人の聞き慣れから、氣持が好いのであつて、將來その生活氣分が異れば不愉快に感じるかも知れない。支那の音樂が、必ずしも日本人に愉快でなく、古代の笛が必ずしも現代人に適しないやうに。合理的な生活は絶えず理性的には正當であるが、感覺的にはむしろ不愉快な思ひをすることによつて實現出來るともいへる。

斯う考へると人生の意義を快樂と見る說は、結局、現狀維持的になるのであつて、現在以上に苦しくても合理的に正當である生活を戰ひ取らうとしない結果になる。だから快樂論をとる人々並びに國家・國民は既に理性的判斷を失つてゐるか、或ひは獨創的能力が足りないか、或ひは又さういふ能力はあつてもこれを實現する意志の力がないか。約言すれば生活力を喪失した人々である。例へばフランス民族の如きはそれであつて、彼等は非常に合理的の民族であり獨創的能力を持つてゐるが、それにも拘はらずその發見した新しい理論を實現する意志の力を缺き、結果はみんなドイツ民族に取られてしまふ。彼等は感覺的享樂に一日の苟安をぬすんで現狀維持的に終るのである。その生活態度があらゆる方面に現はれて、或ひは產兒制限となり、或ひは守勢的のマヂノ線となつて現在見るが如き敗

退を來したのである。

三　幸福論の批判

快樂論者に對して幸福論者は、人生の目的を以て單に感覺的の享樂とは云はない。それ以上の精神的滿足をも含めようとするのである。この點で幸福論者は、快樂論者よりも一應は高尙なやうであるが、その實五十步百步である。

一體、幸福とは何であるか。その定義は人によつて違ふが、一般に考へられるところでは、精神の滿足狀態を指してゐるやうである。若し幸福の意味を斯く解するならば、次のやうな結果となる。

(1)　精神的滿足は人によつて違つて來る。從つて何人も他人に對して斯くせよとか、ああしてはいけないとか、命令も出來なければ教訓も出來ない。自分はそれで滿足してるといへばもはや人生の意義が達せられてゐるから、萬事はそれきりである。何人も知る逸話であるが、ギリシヤの哲學者ディオゲネスはアレキサンダー大王からお前は何を望むか、何でも好きなものを整へてやらうといはれた。ディオゲネスは桶の內に坐して日光浴しながらポカンと空想してることに何よりも幸福を感じてゐたから、彼はアレキサンダー大王に對し、王樣よ、どうぞそこを去つて下さい。太陽の光線が陰になつて當らないで困るからと答へただけである。幸福を以て人世の目的とすれば人さまざまでその滿足狀態が違ふから、國家でも親でも先生でも、國民や子供や弟子に對して、斯うしなくてはならぬ、

斯うすべしと云ふ規範が立たなくなる。

（2）幸福を人生の目的とすれば、右のやうに人々によつて人生の目的が違つて來るのみならず、結局は足るを知ることが最も幸福なことになる。文明とか文化とかいつて見たところで、その揚句の果ては戰爭となり、それが益ゝ激化するのだ。むしろ原始人が椰子の葉の下で涼風に吹かれながらバナナやパンの木の實を食べて、晝寢したりダンスしてゐる方が、よほど幸福ではないか。

或ひは人間よりも動物の方が遙にのん氣で幸福かも知れぬ。動物よりも一層下つた植物の方が神經も使はないからさらに幸福であらう。動物は幸福さうに見えても、絶えず生存におびやかされ、或ひは獲物を捜すことに日夜奔命に疲れきつてゐる。植物ならば生存競爭はあつても、動物のやうに脅威を感じないだらう。

否、幸福とか滿足狀態からいへば植物よりも更に鑛物、鑛物よりも更に無機物、それよりも實はこの宇宙が存在もないことが更に幸福であらう。存在する限り、よし石であらうと空氣であらうと水であらうと、他物との摩擦があつて、動きたくもないのに、時速何十キロとかの颱風にもならざるを得ないし、折角綺麗な池の水もドブ川へ厭やでも流されざるを得ないのだ。だから幸福論者の絶對境は死滅することである。

釋迦が涅槃を理想としショーペンハウエルが厭世哲學を說いたのも彼等が人生の目的を幸福に置いたからであらう。

即ち、試にショーペンハウエルの言を聞け。曰く人生は目的を達した時こそ非常に幸福であるが、暫くすると次ぎの欲望が起つて、これを滿たさないと苦痛になる。これを達した瞬間の滿足感或ひは幸福感は、一時的のことであつて、これを滿さうとするもがきあがきの時代は非常に永い。だから人生は好い事よりも苦しいことが多く、人生は永劫に斯樣な煩惱の追求である。一つの煩惱が滿されると直ちに次の煩惱が現はれるのであるから、この人生は一日もゆつたりした氣分になれない。と、斯くして彼は厭世哲學を唱へたのである。

幸福論を人生の目的とすれば、斯かる矛盾に陷り、求めても求めても、精神的滿足は永久に得られなくなる。人生が進化し、人間が向上すればするほど、欲望の種類は多く、その內容も豐富となるから、煩惱はいよいよ募らざるを得ない。從つて文明とか文化は實は呪ふべき現象となる。人がもし幸福を求めて文明や文化に努力するならば、そのことが却つて幸福に逆行するであらう。心の滿足は成る可く文明・文化を止めて、與へられたる環境で、足るを知る者のみが受けられるのである。一言でこれを蔽へば佛教的諦め觀を持つか、或ひは來世觀を抱いて、現世で苦しむことが來世では樂しみの因になるといふ多くの宗教的信仰によりて、この人生を滿足して行く人が最も幸福であらう。マホメット教とか、現在の支那人が信じてゐるやうな人生觀、佛教の一部の人生觀などがこれである。これらは總べて如何にして現狀に滿足せしむべきかを考へて出來た宗教であつて、科學的思想とは全く對蹠的な思想であり、人類の進步發展とも對立する思想である。

四　英國人と幸福的人生觀

幸福は右のやうな心理狀態であるから、勢ひ現狀維持論となる。個人でも國家でも、幸福主義を人生原理とし、これを徹底すると勢ひ現狀維持論者たらざるを得ない。英國人は元來が功利主義の國民であり、故にまた幸福主義の國民でもある。ベンサムの最大多數の最大幸福なる言葉が英人にアッピールしたのもこれであり、同時にそれは自由主義及び個人主義の人生觀でもある。英國が過去の資本主義上昇期に於て、この偉大をなしたのも、ちやうど資本主義の發展が、個人主義の發揮した自由主義と私有財產並びに營利主義による資本の蓄積を必要とした時代に合致したからである。

これと共に、その個人主義と自由主義とは、議會政治を生む原因でもあり、議會政治の發達はさらに資本主義の發展を來し、自由主義と資本主義と議會政治とは何れも個人主義を根幹とした三位一體の枝葉であり花實である。約言すれば、個人の幸福を以て人生の目的とする人生觀から生れてゐるのである。

個人主義時代・資本主義時代には、かやうな現狀維持を建前とする幸福主義もまた意味があつた。幸福の感じは人によつて違ふから、幸福を人生の目的とする限り、各個人の活動が自由になるからである。各自各個人がてんでんばらばらに、したいことをすれば、それで俺は幸福であるといふことも出來る。その人が幸福であるといへば、さきに書いたディオゲネスの桶の中の生活のやうに、それが

社會國家にどんな不都合があつても、法律に觸れない限り何人も彼れ是れ干涉できないのである。乃ち知るべし、個人主義と自由主義、資本主義と功利主義は、この快樂的幸福的人生觀と一聯の圓環をなすものであつて、何れも中世の封建的或ひはローマ法王の敎權的壓迫から個人我が目醒め、その個人的自覺、個人的活動を要求した歷史的必要から發生したものである。だが、今や時代は個人主義から全體主義に、現狀維持から世界秩序の革新に轉換して來たのである。いつまでも現狀維持的な幸福主義的功利觀に醉つてゐるものは、やがて時代の敗北者たらざるを得ない。英國やフランスはこれを現前に證明してゐるではないか。元來、英國は歐洲大陸と離れて大陸の激烈なる生存競爭から離脫し、それを冷靜に高見の見物をしながら、常に歐洲大陸に二大勢力を嚙みあはせて他を顧みるの餘地なからしめ、その間に自分一人が世界に活躍したのである。

スペインの强い時にはオランダを或ひは海上的に或ひは資本的に援けて兩者を戰はしめ、オランダが强くなれば同じ手をフランスに用ひてオランダを叩き、フランスが强くなれば又同じ手をオランダやプロシヤに用ひてフランスを叩き落した。一九一四年の第一次歐洲大戰も亦然りで今度の戰爭でも矢張り同じ手を使つたのであるが、飛行機といふ新武器の前に過去の手が役立たなくなつた譯である。

英國の自由主義的・個人主義的考へ方は、この島國といふ環境から出てゐるほかに、更に英人が元來ドイツ人と異なり、よほど商業的・外交的國民であることにもその一因がある。それは英民族の成分に、古代の商業國民であつたフェニキア人の血液を多量に持つてゐる爲であるが、周知の如くフェ

ニキア人はユダヤ人と同じセムチック人種である。アルファベットその他の古代文化の創造者として偉大なる貢獻を歴史に殘したが、彼等は地中海を航行して、ギリシヤやローマやその對岸のアフリカで現在のチュニスに當る處にカルタゴその他の植民地をつくつた。のみならず、進んでジブラルタルを越えて英國に錫を求めに行つた商業國民であり航海國民でもあつた。

このフェニキア的・ユダヤ的な功利主義と商業主義とは、英國民の血液に相當量が含まれてゐるのであつて、同じアリアン系ではあるがドイツ人と考へ方も肌合ひも違ふのである。だから、英人は本質的に自由主義的資本主義に最も成功する素質を持つてゐるのだ。その自由主義的資本主義の世界がいま崩壞しようとするのであるから、これは宛かも古代に於て最も繁殖したマンモスが偶々或る時代に氣候の變化その他でその偉大な體軀が却つて彼を不適者とした如く、いま英國もこの世界の新秩序再建時代には不適者たらんとし、亡び去つたマンモスの如く英國もまた瀕死の舞踏を示しつつある。

快樂や幸福を人生の目的とすると、上述のやうに矛盾を生じるが、と云つて、それが人生に於て無意義だといふのではない。何人も朝から晩まで活動をし續けるわけに行かず、一年中緊張しつづけるわけに行かぬ。だから、睡眠と活動との中間領域に快樂地帶で時々休息する必要はある。その休息は單に休息として消えないで後の活動を元氣づける源泉となるのである。

この意味で快樂を享受し、幸福感にひたる事は、人生において潤ひのある一面ではあるが、原則として幸福も快樂も、努力健鬪の結果として得られるものである。これを初めから人生の目的としては、

頗る不健康なものとなるのみならず、反つて眞の快樂も幸福も味へない結果に陷る。

仕事のあとの一服や一杯こそ無量のあぢがあり、目的を達成し理想を實現した後の滿足こそ無限の悦びがあるもので、苦鬪なき快、善戰なき滿足なんて、凡そ人生に見出されない。天は公平であつて、その苦が大なれば快もまた大であり、その理想が崇高であればあるほど、その實現によりて獲得せられる滿足感も深く且つ大きいのである。現に吾々がもつ快感も生物以來の大なる苦鬪によりて贏ち得たものであるから、之を適當に享樂することを全面的に非とするストイック的態度は必ずしも人生の眞なる生きかたとは云へない。だが、同時に結果である快樂とか幸福を人生の第一義目的とし、進めども進めども竭きせぬ味ひと深みのある理想實現を忘れた人生を以て、人生の凡てと思惟するが如きは、折角この人生に參加權をもちながら、その皮を喰つてこれで全部とし、その中實の滋味を知らざる素氣ない人生に生きた人と云はねばならぬ。

第二　價値創造的人生觀

一　價値の意味

快樂的・幸福的・功利的人生觀が、現狀維持的な立場の人生觀であるやうに、現狀打破の立場に

る人々は必然的に理想實現の人生觀となる。人類の歴史は或る意味において理想實現の健鬪史であるが、かやうな人生觀を持つ者のみが人生の歴史を創造して來たのである。またその創造力ありてのみ人生は進化し、その創造者が優勝者になることこそ、人類が他の動物以上に偉大なる進歩を遂げた所以でもある。人間の行爲は他の動物と違つて、行爲の結果を豫想してその實現に邁進するものであるが、豫想されたる結果を指して目的といふ。自然現象では原因があつて結果が發現するが、人間の行爲はまづ結果を立てておいて原因を導き出すのである。手段とは人間行爲の原因である。

だがあらゆる目的が必ずしも善いとはいへない。吾々が行爲する時にさまざまの目的を對象として描き、これを實現しようとするが、その目的には本能的なものから理想的なものまで、肉體的快樂から眞善美の如き崇高な價値に至るまで、約言すれば人により又その時により、天國から地獄の府までの淸い目的と汚い目的とが入り混ざつてゐるのである。

二　理想とは何ぞ

理想とはこんな人間活動の目的のうちで人間を高め、社會を進歩せしめ、國家の生命體を强大にする目的である。これ等の生を創造する力を裏からいふと眞善美その他過去の人類が常に實現せんとし努力健鬪したが、しかも永久に實現できず高く天の一方に輝く種々の價値體系である。この價値が現實と結びついて吾々に目標化したものが理想である。理想卽ち英語のアイデアルなる言葉はアイデア

とリアールの二つの言葉が結び付いたのであるが、これはプラトーのイデア又は今のドイツ語でいふイデー卽ち理念なるものが地上の現實と結びついて出來たものにほかならぬ。

一體價値なるものは、從つて絶えず實現されながらも、しかもそれ自身永へに實現されないところに人生の不可思議があり、吾々はこのヒマラヤの峰々よりも高く且つ奥深き、永劫への懸け橋といふべき神祕的な眞善美とか正義とかを實現しようと努力するところに人生の意義があり、その實現過程において同時に吾々個人や國家の生命そのものが高められるのである。

國家は、實にかやうなもろもろの價値やその他の社會的文化價値を實現する唯一の場所であつて、これは個人の生命體がこれらの價値を實現する唯一の場所であるのと同じである。優秀なる個人と强大にして莊嚴なる國家なくして、これ等の價値は實現できないし、これ等の價値を理念せずして偉大な國家も個人の生命も出現しない。價値を豫想せざる生命は一の肉塊に過ぎず、生命を豫想せざる價値は死せる空ろの觀念に過ぎない。げに價値と國家並びに個人の生命は有機的つながりを持つ不可離の生成體であつて、その一を無視して他を考へられぬ。ただ當時の社會狀勢と歴史の段階により、或る時は價値實現が最尖端に現はれ、或る時は國家の生存發展が歴史の指導精神となり、或る時は個人の人格實現が比較的重要性を帶びるまでである。

現代のやうに、時代が世界歴史の轉回點であり、世界秩序の是正時代である時には、どうしても先づ、國家生命體の强化發展が歴史を動かす樞軸となり、他の活動はこれに追隨しなければならぬので

ある。

三　ドイツ哲學の勝利と發生原因

ドイツの哲學は、由來、英米の如き功利主義とか快樂主義或ひは幸福的人生觀が尠く、その殆んどが價値實現の哲學又は國家至上主義の哲學である。カント哲學やヘーゲル哲學が修正されながらも今に至るも、絶えずその生ける部分が再編成されて行くのは、このためであつて、最近の新カント派哲學の如きもその現はれにほかならぬ。

これはドイツが元來四面敵のうちに包圍せられ、ゲルマン民族はその生ひ立ちからして、寒嚴なる森林の生活苦に鍛へられながら、さらにローマその他の強國を敵に廻して、絶えず喰ふか喰はれるか、生きるか死ぬかの歷史をなめて來たからである。中世はむろん、近代に入つてからでも三十年戰爭や七年戰爭或ひはナポレオン戰爭において最も苦しんだのは歐洲の中央に位置するところのドイツ、特にプロシヤであつた。ドイツのかやうな環境は、その民族國家の成立に四面から絶えず邪魔せられ、そのために國內は永らく封建的割據主義の持續を餘儀なくされ、民族國家が成立したのは漸く普佛戰爭で勝つた一八七〇年である。

これは又同じドイツでも南獨の方がプロシヤと異なり、その人種からいつても純然たる金髮青目玉のアリアン人種ではなく、むしろ茶褐色か黑髮、眼も茶玉の南歐的色彩を持つた民族差のためでもあ

る。人種學上この系統はアルプス山脈を中心として繁殖したからアルペン人といはれる。剩へ東部にはスラブ系の者がゐたり、西にはフランス系の者がゐたりして、人種的・民族的にもその統一が困難であつた。これはドイツが歐洲の眞中に住んでゐる必然の結果である。

勢ひドイツ民族は、この人種的不統一と相俟つて他民族から不斷の攻擊を受けたが、この結果は次第にその民族精神の昂揚と團結を固め、ここに今日の强さと、その旺盛なる全體主義的精神が養はれたのである。

四　ドイツは歷史的に全體主義國

ドイツの全體主義的傾向は、かやうな永い歷史的苦難から育て上げられたものであつて、その環境は又常に現狀打破を必要とするから、ここに彼等の人生觀はどうしても反個人主義的であり、反現狀維持的ならざるを得ない。價値創造の哲學がこの民族から生まれる所以はここにある。そしてこの哲學と人生觀こそ、今の世界歷史の轉換期にぴつたり合致するものであつて、ドイツ民族が時代の勝者たる所以もここにある。

五　何故の世界歷史の轉換ぞ

世界歷史の轉換は、云ふまでもなく十五世紀、かの新大陸發見以來發達して來た資本主義經濟體制

の行詰つたことであつて、今や世界はかやうな個人主義的、自由主義的な利潤獲得本位の經濟活動では、最早あらゆる經濟者を刺戟活躍せしめる力がなくなつたのである。何となれば資本主義の發展は大企業中心となつたが、大企業はその獨占的利潤の獲得に滿足してまた冒險的な新資源の開發も新技術の採用すらも敢て爲さうとしない。と云つて中小企業家の實力を以てしては、固より不可能である。

この點で日本人の多くが抱ける過去の人生觀、即ち自由資本主義と共に明治維新このかた入つて來た快樂的・幸福主義の人生觀は、理想實現主義の人生觀、偉大なる文化國の建設的人生觀に轉向しなければならぬ。

現代の如き新秩序の轉換期にありては、過去の原理が役に立たない。しかも平和である限り過去の原理で成功したその偉大者が頑張つてゐるのであるから、この舊秩序を打開するためには何うしても武力に訴へざるを得ない。謂ゆる戰の世代であるが、戰の世代にはドイツ的人生觀と社會觀を必要とするのみならず、既に個人主義と自由主義によりて立つ、古い資本主義が世界歷史の進步に役立たず、どうしても新しい原理によつて社會國家も再組織されなければ歷史が進步しないのだから、ドイツの價値創造的人生觀と、全體主義の社會觀は今後の數百年間に亙る歷史を推進する基本的原理でなければならぬ。

第三章　經濟の意味と目的

第一　經濟と生活との密接性

一　最小費用則

經濟の意味については學者によりて種々異なるが、最も一般的に考へられるのは、經濟と生活とを結びつける說であり、それはまた經濟と物質或ひは物質文明を關係づけんとする說である。

マルクスの如きも經濟を以て人間が生產行爲を始めた時から起こると云ひ、その生產行爲とは主として物質殊に生活と關聯せしめたやうである。

だが、何事もその物の起因と、その進化した後の結果とは同じでないやうに、經濟行爲もまた生存を中心として發生したことであるが、それだといつて現在の經濟活動のすべてが依然として生存或ひは生活を目的とし營まれてゐるとはいへない。恰も政治なる現象が日本において祖先を祭ることであ

つたからこれを祭り事といふが、これは古代の政治形體が簡單であつた場合或ひは年の豐凶が祖先を祭ることによりて定まると信ぜられた時代の政治である。今日では祭事と政治とは可なり分離してゐる。むろん日本の政治の一つには祖先を祭ることが重要なことではあるが、といつて政治の一切が祖先を祭ることで盡きてはゐない。非常に複雜化し分業化してゐるのであつて、それだけで政治と思つては大いなる認識錯誤に陷る。祭政一致をそのまま今もなほ心から信じて唱へる政治家がありとせば、それは餘りに現代離れのした國家政治の內容的發展を知らない盲目者と云はねばならぬ。全體主義の今日における政治は、科學や經濟やその他あらゆる社會現象と文化活動とを統制・調和して國家の生存發展に利導歸一せしめる作用なのだ。

政治が右のやうに時代と共にその內容を複雜化するやうに經濟も亦同じである。經濟のそもそもの起源が生活又は生存であつたことはいふまでもなく、今もなほ基盤的ではある。だが、經濟活動はひとり人間のみならず、生物の生存競爭からも考へられるのである。例へば動物が朝から晩まで餌を求めて走りつくした場合に、恰度その消費しただけのカロリーを回收できるだけの獲物がつかまれば、彼は亦翌日も再び活動できよう。これに反して彼が一日何時間か飛び廻はり、走り廻はつても、その爲に消耗したカロリーだけの榮養量を、捕へた獲物から補充できなければ、その生物は次第に衰弱し、遂には死滅するであらう。

吾々の目には鳥が木々に囀づり獸が廣々と山野を驅け走つてゐるのを見て、動物の世界はいかにも

氣樂さうに見えるが、その實、彼等はその食物を求めるために四六時中どれくらゐ苦勞してゐるか、或は又敵から自分が捕へられない爲にどれだけ苦心してゐるか、測り知るべからざるものがある。吾吾の目に見る鳥や獸こそ、かやうな生存競爭をとに角くぐりぬけて生き殘つた連中であるから、一見何の生存苦もないやうに見える。だが實際は食物不足のために、どんなに多くの鳥獸が死滅してゐるかわからない。すでに榮養が不足して飛ぶ力や走る力のないものは、直ちに他のものの餌食になつてしまふから、自然界には鳥獸の餓死體が大して吾々の眼に止まらないだけである。

こんな次第だから鳥獸でもその種屬の生存の最も繁榮したもの或は進化したものは、その體の構造も自然に最小費用で最大効用をあげるやうに出來てゐる。例へば同一の場所に二匹の猫がゐて、一匹の鼠を或る地點に見出だすとせよ。甲猫は眼のつき所か或は足の歩みかたが曲つてゐるために、その獲物たるべき鼠の居所(ゐどころ)へ直線に走れない。然るに乙猫は目も足の工合ひも眞直ぐに走るやうに出來てゐるとせば、その鼠は二點間を結びつけた最短距離たる直線を走ることのできる乙猫に一番早く捕へられるであらう。そこで乙猫は榮養も足り、子孫繁殖力も强く、生存の適者殘存者として、その乙猫と同じ目のつき所や足の恰好の子供が殘り、何代何十代後ほどその猫の子孫はますます目も直線を睨み、足も直線的に走るやうに構造されたものとなるだらう。卽ち彼等の身體がその運動には最もカロリーが小量で足る一直線を走るやうに構造せられたもの、換言すれば最小費用の原則を實現したものが勝利を博するのである。

二　最大効用則

同じ意味において最大効用の原則も實現せられる。例へば猫の食物も鰹節やら鼠やら種々の物が對象となるのだらうが、同じ運動カロリーを消耗して取るかぎり、最も榮養的なものを好み取る猫のみがより多く肉體も發達し、子孫の繁殖力も強大となるから、その猫の子孫もまたその親猫に似た趣味を遺傳し、自然に最も運動少くして而も最もカロリーの多いものを發見捕獲する能力をもつ。即ち繁榮する生物は常に最大効果をあげてゐる結果と云へよう。

だから、經濟なるものは生存の必要から發生したものであつて、生存又は生活と密接な關係があるが、と云つて今はそれは單に生存とか生活のためではない。そのうちで最小費用で最大効果の擧がる生存のしかたをしたものが、その適者として殘るのであるから、現在の生物殊にその生物の尖端にゐて最高動物ともいふべき人間が生れ乍らにして只生きるだけではなく、本能的に最小費用で最大効果のあがるやうな生きかたをするのは何萬年何百萬年の生存苦に淘汰された結果なのである。ここに經濟現象の端初がある。

人間の活動はその生存を基盤として、それ以上のさまざまの活動並びに文化現象の創造にあるも、それ等もすべてまづ最もよく生きる者のみが爲し得るのである。あらゆる人間活動の基底となるものは最もよき生き人であるが、最もよき生き人とは最小費用で最大効果を擧げるやうな生きかたを自然

本能的に或ひは意識的・理性的にとる人であつて、この生き方に成功した人のみがエネルギーの餘裕を生じ、その過剩エネルギーが經濟活動以上のより高き文化活動や遊戯や藝術などにもなるのである。戯愛すらも同じ過剩エネルギーの産物であつて、自己保存を最も巧みに經濟的に行つて、綽々たる餘裕が肉體的エネルギー及び時間的に發生した場合にのみ可能なのである。だから、一切の人間活動はこの經濟的生存を前提とする。逆にまた最も進化した動物である人間とか或ひは最も進歩した文明や文化を作つた國民は、その生存を最も經濟的に營んだ證據だとも云へよう。

古代のギリシヤ文明は奴隷を使つて征服者は生存の餘裕を作り、現代文明は機械を使つてその生存の餘裕を作りつつあり、その餘裕こそさまざまの人生活動の高き文化現象や立派な國家建設と經濟以上の偉大な活動を實現できるのである。

第二　人間心身の經濟的構造

經濟と生活の關係は右の如く生活から經濟が出るのであるが、生活自身が直ちに經濟ではない。最も經濟的な生活をしたあらゆる生物のうちで、最高の進化をしたのが人類である。だから、人間の體自身が最も經濟的に出來てゐる。生きることを中心として、頭から足まで何一つの無駄がなく體系化されてゐると同時に、頭腦の發達により、創造と合理的判斷の力で、一層その行動が經濟的となつて

ゐるのである。

現在の人間の身體中で、生存に役立たないものは盲腸と男の乳位のものであつて、これも過去の或る生物段階には大いに必要であつたその遺物であるが、それにしても殆んど無用のカロリーがその存在のために消耗されるから次第に退化しつつある。退化しない大きな盲腸など持つてゐる人は盲腸炎にかかり易く死滅してその子孫も殘りにくい。足にしても動物は四本であるが人間は直立したために二本で足り、前足二本は手に變つたことが非常に人間の活動を能率化した。のみならず、それが現在の經濟的活動とも大いに關係してゐる。手であるから棒が持てるから一々木によぢ登らなくても、木の實を叩き落して食べることができる。また棒が持てるから、爪とか牙が發達しなくても武器として棒を利用することができる。この棒こそ後に道具となり機械となりて、現在の經濟的發達を來たす原因となつたと共に他面武器となつて石から銅・鐵に、弓や鐵砲からタンク・飛行機の操縦にまで發展したのである。

人間が動物と違つて直立したことは、經濟的にかやうな重要さがあり、生理的にも足の代りに手が生じたのみならず、直立したことが頭腦をして又直立せしむることになり、頭腦の直立はその充血を防いで、冷靜なる判斷力を發達せしめるのに大いに役立つた。動物は常に四ツ這ひとなつて頭を下に垂れてゐるから、目も腦も充血して頭腦の血液の循環ぶりも頗るよくない。それは吾々が逆立ちした場合の頭腦の働きぶりを考へると能くわかる。これでは動物の判斷力が發達しやうもないのだ。

故に人間の特長は、生理的に直立する動物であることから今日のすべての文化發達が來たされたのであつて、その經濟活動も經濟的判斷力も、またこの直立の姿勢から來てゐる。肉體も頭腦もこのやうに經濟的に裝置せられ、この經濟的裝置こそ經濟行動をなす前提となつてゐるのである。即ち人類は生れながらにして最小費用で最大効果を擧げるやうに、心身ともに體系化されてゐるのである。

カントはその哲學において、我々の認識は經驗から來たのではない、經驗と共に發生するのであるといつたが、吾々の經濟意識もまた同じであつて、經濟意識そのものは、生物の數十・數百萬年の生存競爭の間に織り込まれ身讀・體得してゐるのである。ただ、これを意識するためには經驗が必要となる。換言すると人間の經濟意識は經驗によつて始めて發生したのではなく、個人の經驗以前に全生物の生存を通じて獲得されたものである。個人的には先天的のものであり、經驗に先んじて具有せる先驗的のものである。それが現實に接觸すると、ちやうど人間のもつ飲食衝動が何か飲食物を見てそこで直ちに食慾が湧起するやうに、經濟意識も同じく社會生活において社會現象の經濟的部面に觸れると、直ちに經濟の先驗性が意識されるのである。即ち經濟的意識は吾々が學んで始めて知るやうな後天的のものに對し、その源は且つ遠く且つ深いことを思はねばならぬ。

第三　經濟行爲とその目的

或る目的を達せんとする場合に之に効用ある手段は一つでなく種々ある。同じくその効用を創造するための費用となる手段も一つでなく數多くある。そこで數多き費用と効用の中から最小費用と最大効用を選擇し、これによりて最大の餘剰價値を獲得して、個人の生活力を體力的・時間的に餘裕あらしめ、その餘剰力を或は價値創造のために、或は巨大なる國家建造のために、其他さまざまの人生的第一義の目的實現のために集中使用するのが經濟活動であり、經濟目的である。

人生において斯く最小費用で最大効用を擧げんとし、これを規範・目標として活動する部面或は活動する場合が經濟現象であり、この規範を經濟則といふ。

これに對して、そんな事は經濟に限らぬ。すべて人間の行爲はこの原則によるから、之を經濟則といふのは誤りだとの反對論もある。だが、この反對論は人生行爲の目的・手段の系列に區別のあることを知らない論である。同じ目的・手段であつても次の關係によりて行爲の合理則も必らずしも同一ではない事を知らねばならぬ。

	手段	目的	
(A)	多數（最小費用）	一定	合理則
(B)	一定	多數（最大効用則）	能率則
(C)	多數（最小費用）	多數（最大効用則）	經濟則

(A) その目的が其れ自らが目的若くは一應の終局目的と見られるものであつて、左右田博士の謂ゆる愛着價値 Affektionswert を持つてゐるのである。例へば大臣たらんとする最終目的とか其れ自らが目的の發明行爲とか或ひは其物自體の藝術的價値を愛翫するが如きは是である。

この場合にありては何人も固よりその目的の實現若くは獲得の爲に出來るだけの勞費を節約せんと欲するも、節約が思ふやうに行かないとて其目的若くは對象を放棄してまでも他目的へ轉換し、ほかの對象と交換する事を敢てしないのである。大臣にならうとして一切の犧牲を拂ひ、その爲に中途で倒れた人は古今東西に頗る多かるべく、山陽の書軸・正宗の名刀を藝術品とし其れ自らが目的として欲する人は之を成るべく廉價に集蒐せんと苦心はするが高いからとて之を諦めて他の書軸・名刀で濟まさうとはしない。退いて大いに資金を貯へるか或は安値を待つてその蒐集に再出動するであらう。

(B) は (A) とは逆に手段は一定するも目的は多々益々辯ずるといふ場合である。例へば、出來高拂ひの報酬制で一日の勞働時間は一定するが賃銀額はその仕事の出來高に應じて增減する場合に、何人も最大効果を目標とし能率主義で働くであらう。

(C) は上述の (A) (B) に對して目的も手段も多數あり、雙方ともに選擇餘地の存する場合であつて何人も最小手段を以て最大目的を擧げんとするのである。

如上の三者は何れも合理則の發現ではあるが既に態樣の異なるかぎり凡てを同視する譯にはゆかぬ。そして經濟則とはこの最後の（C）の場合を指す。この場合は、行爲者が勝手にその目的を變じうるが、それは目的がそれ自體目的ではなく、單に手段的の過渡的目的若くは差し當りの目的であつてそれ自身には愛着價値が認められないからである。單に終局目的を達する手段としての機能價値・作用價値 Funktionswert, Wirkungswert があると認められるに過ぎないから、もし終局目的を達するために他により善き機能を持つ對象が發見されるならば、行爲者は何時にても古きものを捨てて新なる對象と取換へるに躊躇しないであらう。事情が許せばさッさと牛を馬に乘換へるのである。正宗の名刀でも之を藝術品と見ず、單に物を切る機能手段として作用本位に見る場合は、目的物を切りうる限り何人も正宗を捨てて他のより安價な刀を選ぶに躊躇しない。

經濟的合理則と他の合理則との別は右の如くであるが、なほ次の如き反對が豫期せられる。

凡そ人間の行爲は終局目的とそれに達する手段の一集團は考へられるも、その手段を達せんが爲には更に第二次・第三次手段の案出を必要とし、殊に終局目的が遠大なるほど斯る手段の系列は數多く發見されなければならぬ。前例大臣になる場合にありても、その手段として官吏や代議士や實業家がある。さらに代議士たる手段も資本家・辯護士・新聞記者など種々雜多の途が考へられ、その行爲者から云へば凡てが手段であるから、その取捨に拘泥する必要は少しもない。問題は勞少くして功多きを但ふのである。故にその人にとりては官吏となり、代議士となり、資本家となり、新聞記者となる

事も一種の經濟行爲ではないかと。

「經濟則は人生行爲一般の合理則に他ならずして、特に經濟現象にのみ限らずとの論は、思ふに上例の如きを以て經濟則の恰好の適用と認める爲であらう。けれども之は同じ手段であつても効用即ち役立つといふ意味の手段と、目的實現の一階梯としての手段とを同視する事からくる手段觀念の混淆である。シュパンの經濟概念が人生現象一般に敷衍された原因も實に斯る混淆に胚胎する。例へば戰爭に就て見よ。戰爭も當初若くは餘裕のある場合は、少ない彈丸を以て多數の敵軍を惱ますといふ經濟則が行はれるであらうが、その切羽詰るや彈の數や費用は問題ではない。全軍の持つ一切の戰鬪力と凡ての生命を抛つて勝利の爲に突進しなければならぬから、もはや經濟則を顧みる暇がないのである。即ち最後の勝敗が決する迄の凡ての行爲は手段系列であるが、その系列は途中で効果の大や費用の小を測ることは不可能となり、最後の土壇場に至りて初めて手段總體の効果如何が問はれるに過ぎぬ。然るに効用と費用との一聯はそれ自身で自足完了の一環をなし、その損益得失の決濟勘定が明らかであつて必らずしも終局目的まで達するを要しない。即ちその終局目的を實現する前に、豫め手段系列間に於て費用と効用との差引・剩餘價値が評價できて、そこで價値計算が自足完了する所に經濟行爲が存在する、敢て最終目的を實現して初めて知るのではない。

經濟價値ある小刀とは、安くて能く切れる小刀を指す。その果して能く切れるや否やは切つて見るまでは分らないが、一度び實證されれば其後は如何なる材料・如何なる技術で生産した小刀がどれ位

切れるか、客觀的に略ぼ見當がつき、費用と効用との組合はせで種々の差引剩餘價値が生じる。この組合せによりて生產者も購買者も最も有利なる一組の効用と費用の手段を擇取する所に經濟行爲の特殊性がある。之に對して上例の大臣になる場合は、最終目的の大臣になるまでは官吏と代議士と果して何れが大臣たる手段としてより多くの價値があるか。何人もその見極めがつかぬ。或ひは個性の如何による適・不適もあれば或ひは時勢的・社會的客觀狀勢の變化もあり、最終目的に達するまでは先例によりて豫め手段系列間における費用・効用の差引勘定の大小が評價できない。手段が明確に評價できないこの場合には同じ手段行爲であつても、普通にそれを名づけて効用とは言はない。手段がその目的を達するに果して役立つか否か不明なためである。但し經濟と然らざる行爲との區別は絕對的でない。曾ては非經濟行爲と認められしものもその選擇しうる手段系列の比較評價が明確性を加ふればその範圍に於て經濟行爲化する傾向を持つてくる。人生のあらゆる行爲に亙りてしばしば準經濟的現象の見られる所以もここにある。

第四　費用と効用との差引計算

經濟主義とは上述の意味であるが、しかしこの費用も効用も內容が複雜であり、異質でもあり、相互にその差引勘定が困難である。例へば衣服と食物とを比べて、何れに効用が多いか。空腹の時はむ

ろん食物をとるが滿腹の時は着物をとる。同じ着物でも一枚より買へぬときは、無論保溫の役に立つ方を買ふが二枚目ならばその他の目的卽ち裝飾の爲に買ふ。かやうな譯で効用の比較も目的が異り、その目的がその人、その狀態で違ふから、すべての効用の大小を比較することは困難である。費用もまた、苦痛とエネルギーの消耗力との大小を比較することも困難である。だから、費用と効用との差引は更に難事だ。ただ、現代の如く凡てが貨幣價値で計られる時のみ費用の方は計算しやすい。卽ち十錢のものならば、どちらのものが榮養が多いか、又うまいかと云ふ効用は容易に比較できる。

効用と費用との差引は斯く困難であるが、併し之等も根本に於ては、人間が生きんとすることによりて、生命力をなるべく減損せずして、而も生命力をなるべく增す。消極的には保生、積極的には厚生を標準とし、費用に於いては出來る丈け保生を、効用に於いては出來る丈け厚生を全くせんとする。この差引により生命力を豐富にすることが經濟の剩餘差額を多く得た基準となる。卽ち生命の充實擴大は小費用大効用の差額の大に由つて求められる。故に經濟は生に於いて費用効用を比較する共通分母が得られるのである。そして保生厚生によりて經濟的生存を豐富にしたならばそれだけ人生の第一義的活動卽ち其自身を目的とする活動が一層强められる。その第一義的活動を快樂追求に消費せば醉生夢死であるが高き理想の實現卽ち國家的發展や文化價値の實現に努力せば生を高めて意義ある人生が創造できる。保生・厚生による豐生はまた高生を將來する前提であるが、高生によりて今度は逆に經濟價値と生の內容も亦高まる。ここに生と價値との互助連環性を見る。そして現代のやうな全體主

義時代には個人的厚生を迂廻せず、經濟の剩餘エネルギーは直ちに强力國家の再建に參するのであるが、經濟主義それ自身は、その主體又は目標こそ、個人や企業的利潤ではないといふが、全體的立場の下に依然遵守されなければならぬ。その際の費用・効用の比較基準は國家の生存發展とその强力化の度合ひで測られる。

第四章　世界五大ブロックから三大ブロックへ

第一　內村鑑三氏の三大ブロック論

ドイツの電擊的勝利によつて世界の四大ブロック化が實現するであらうと見られてきた。このブロック論は元來第一次歐洲戰後、クーデンホーフ Coudenhove-Kalergi によつて世界五大ブロック論が唱へられたのに基き、筆者も亦これをドイツ留學中に聞いて非常に感服し、滿洲事變勃發後、昭和七年初「東亞モンロー主義への驀進」を書いたのも全く、クーデンホーフからヒントを得たものである。

だが、この思想も、更に溯れば、我が國で內村鑑三氏が旣に明治二十七年に、「地人論」（內村鑑三全集）を著はして、世界三大ブロック論を說いてゐる。その本の傍註には「地理學考」と書いてあり、參考書として英・獨其他の多くの地理・地文學や、地人論・文明起源論、或はヘーゲルの歷史哲學など十餘冊を擧げてゐるのである。

氏の說によると、神は萬有の上に執行する先見と配意を持つてゐるのであつて、これは神の意匠で

あり、また攝理 Providence であるが、これによると五大陸は三つの塊りから成つてゐる。

その一はアジア—濠洲の一塊りであつて、スマトラ、ジャワ、バンダ諸島は兩大陸を繋ぐ連鎖である。この邊の海は淺くして水底百ヒロを超えない。これはもと陸續きであつた證據である。

その二は歐羅巴—アフリカの陸塊であつて地中海はこの凹みである。

その三は云ふまでもなく南北アメリカを連ねたものであつて最もハッキリした塊りである。

これらの三つの陸塊を比較すると、次のやうな不思議の符合を發見する。

(A) 各陸塊は南方に尖りて北方に擴がつてゐる。濠洲、アフリカ、南米のホーン岬も皆さうである。

(B) 各陸塊は南北が鮮明に二分してゐる。

(C) 各陸塊は東南隅に大きな島がある。濠洲にはニュージーランド。アフリカにマダガスカル。南米にフォルクランドがある。

(D) 又その東南にもアジアには日本。北米にはニューフアウンドランドがある。歐洲はアジアと地續きの爲に島はないが、ウラル山脈はこれに似た狀態を持つてゐる。

(E) 各陸塊は南北中間の東方に當つて多島海がある。アジア濠洲にはフイリッピンや蘭領印度。歐洲・アフリカには地中海の東部に於ける多島海。南北米の間には西印度諸島がある。

(F) 北大陸は南方に向つて各々三つの半島を持つて居る、アジアには印度支那とデカン並びにア

ラビヤ半島。歐洲にはバルカン半島、イタリー並びにスペイン。北米にはフロリダ、メキシコ、カルフオルニヤなどがこれである。

由來、地理の目的は人類發達のための歷史にあるので、歷史を離れて地理は考へられないと述べ、ついで內村鑑三氏はアジア論から歐洲及びアメリカ論に移り、結局は東西の文明のさまざまの區別も最後は統一されるが、その統一の使命は日本の天職である。東洋文明は東漸して日本に來り、西洋文明は西漸して日本に來る。同時に南半球の各大陸は北半球の大陸が開發された後に、その文明の力を南半球で發揚せんが爲に神樣が殘しておくのである。人類は北半球に於て文化創造の爲に鍛錬せられ、その鍛錬した力で南半球に及ぶ。歐洲はアフリカを同化してその文明をここに發揮し、北米は南米を同化してその文明をここに發揮して、南洋・濠洲は日本並びに支那の文明を發揮して、それからここに及ぶべきである。世界の文明が西漸の極に達する時は、やがて南漸する時である。今やその時が近づいた。かやうにして全地球は、神がこの世界を創造した文化普及の目的が達せられるが、これを完成するのが吾々の義務であるとし、わが內村鑑三は世界三大ブロック論を夙に唱へてゐるのである。

第二　ブロック成立の可能性と條件

この三大ブロック論は、今のところ歐洲と東亞ブロックとの間にソ聯が介在するから、ここで急に

實現するとは思へないが、最近まで大英ブロックを立てて五大ブロックと思はれたものが、今は英米が一つのアングロ・アメリカンブロックとならうとし、四大ブロックが實現しようとしてゐるのだから、やがて何十年かの後に內村鑑三氏のいふ三大ブロックが成立するのも夢ではなからう。

かやうな大勢力圈の成立は、むろん歷史の必然的趨勢ではあるが、それが果して成立するかどうかは全くブロック內における各國家の覺悟と努力による。或るブロックの指導國家が、ブロックを建設する實力がなければ、そのブロックは永久に完成しない。從つて他の完成したブロックから未熟のブロック體は戰ひ破られるであらう。大英帝國ブロックが崩壞しようとしてゐるのも、そのブロックに內村鑑三氏のいふが如く、神の御心に背いた世界地理的或は地政學的缺陷がある爲だが、同時にそのブロック强化の方法が誤つてゐるか、或は指導力を缺いたためでもある。

現在、歐洲・アフリカの大經濟圈は、ドイツの實力によつて次第に完成されるやうであるが、これとて、將來ドイツとイタリーとの對立や將又たソ聯との對立によつてどうなるか、必ずしも豫斷はできぬ。

ソ聯ブロックは、その大部分がスラブ民族であつて、その地域もまた連續した陸地つづきの一塊である。加ふるに資源も質量もともに豐富な點で强味を持つてゐるが、元來スラブ民族は高度工業に適應する能力が疑問である。ドイツ人か米國人か或はユダヤ人の能力を借りなければ、とても一本立ちのできない弱味を持つてゐる。

スラブ民族は、もともと農民育ちであつて、この機械化時代に、果してその一大ブロックを維持し永久にその守りを固くすることができるかどうか。よし大英帝國の弱味に乘じて、一時はペルシヤ灣かインドまで出ても將來は頗る問題とならう。或は內村說の通り三大ブロックともなれば、工業力の伴はないソ聯ブロックはまつ先きに押しつぶされる危險性があると見なければならぬ。

英米ブロックは、英本國の問題は別として、大體アングロサクソン民族を中心として出來るものである。米國人にはドイツ人その他の血統があり、カナダにも英國人の他にフランス人の血統がある。又メキシコ並びに南米は、主としてスペイン人やポルトガル人とその土人との混血兒を中心としてゐて、南北アメリカのブロックは民族的に統一してないが、然しアングロサクソンを中心とし、米國と英國とが合すれば、その資源もその工業力も充分一大ブロックたる强さはもつてゐる。

轉じて東亞ブロックにありては、何よりも先づ日本民族と支那の漢民族との提携・諒解が必要であつて、これさへ成れば、南洋諸島にしてもその經濟的實力は漢民族が握つてゐるのであるから、東亞大共榮圈を創建するのは左ほど困難でない。卽ち軍事的政治的には日本、社會的細胞には漢民族が當れば、濠洲まで突進することすらも空想ではなからう。

この日支協同體の成立には旣に述べた如く、日本はその强力なる戰鬪力をもつて、支那の半植民地狀態を奪回してやり、彼等の經濟的發展を容易にするために、日本が東洋と歐米との軍事的・外交的摩擦を除去・淸算する役目を勤めなければならぬ。ここに東亞協同體の共通の利害關係と互助聯關の

一體的繋りが發生するのである。

なほこのブロックに於ても、一つの弱點はその高度工業力がドイツ又は米國に今のところ及ばない事である。一日も早くこの缺陷を克服しなければ、どんなに資源があつてもその資源を一〇〇%に活用されない。從つて經濟的にも、軍事的・文化的にも一大ブロックとして、完全なる自給力と特異性が發揮されぬ。この點で何といつても科學の力をもつと發揮するやう、殊にその指導的役割を果たす日本民族に課せられた大きな責務である。ドイツや米國の高度工業も、それは國民全體の科學的精神のレベルの高さにあるから、單にその結果だけを見、その一部だけを目標に努力しても附け燒き刃に終はる。小學教育の根本から科學的精神を充溢せしめなければならぬ。

まことに科學的發明發見の豐富さと高さこそ、今後のブロック完成を決する試金石でなければならぬ。

第三　ブロックの生成と戰爭・平和の世代交替

世界は五大ブロックから三大ブロックに止揚せられ、やがては大東洋と大西洋の二大ブロックに迫進するかも知れぬ。これが世界歷史の進行ではあるが、このブロック完成のためには絕えず戰ひの時代と平和の時代が交互に入れ代はるのである。ブロック完成に戰ひが必要なことは現に日支間又は歐

洲戰で示すところで、ブロックが異民族の國家群から成立する必然の結果である。今から見ると誠に無意義な對抗をしたポーランドやノルウエー、オランダやベルギーすらも、武力で屈伏するまではドイツにも英國にも援助を請はうとせず、中立を主張して守り通せるかの如き自惚れと妄想をもつてゐたのである。況んやフランスをやである。だから十八世紀末から十九世紀半まで、民族國家が成立するために、戰の時代があり、又その後の帝國主義の完成時代にも同じ過程があつたやうにブロック生成時代は戰ひの世代である。

取り敢へず四大ブロックが完成するまでの數年・數十年は、戰ひの時代が續き、成立した後は各ブロック體の間に、再び自由通商貿易時代が現はれよう。これは各ブロックが經濟的に完成し、その生產力が發達すると、同時にその土地と民族による特異性が發揮されるから、勢ひ必ず新しい發明品や工業品が出現して、これらブロック間の交換對象品となり、新文明と新文化が又生誕するのである。

人類は絕えず生產力の發展と共に新しい物を造り、又それによつて新しい慾望を起すのであるからブロックが完成したとて、世界の貿易が止むわけではない。ただ或る時代において殊に完成過程の戰ひの時代には、食糧と兵器重點で自給自足の經濟圈を目論むから、ブロックが出來ると世界貿易は止まるやうに見える。が、ブロックが出來ると實はそこから新たなる世界經濟がスタートを切り、やがて何十年間か自由通商と平和の時代が來るのである。その結果は生產力の增進した高度工業の先進國が、最低度のブロック體を自己ブロックに入れようとして再び戰ひの時代が展開される。

世界歴史はこんな風な戰爭と平和との循環であり、同時にブロックの單位が擴大强化される發展史でもある。そして人類の文明と文化はその擴大强化につれて一層の特異性を發揮して光り輝くのであるから、各ブロックの建設强化こそまた吾々の世界史的使命でなければならぬ。

第四　各ブロックの自給力

十九世紀初のナポレオン戰後から始まつた民族國家主義の生成運動も、世界が一齊にその運動に乘出したわけでもなければ、また同時に乘出したものも一樣に成功したわけでもない。

歐洲諸國は比較的早く成功したが、東洋諸國は大いに遲れ、日本こそドイツ・イタリーと前後して一八七〇年前後に御一新を完成したものの、他は日本よりずつと遲れて、支那の如きは最近漸く民族國家の統一に向いてきたのである。

遲れた原因は、地理的關係や民族の性格或は文化的或は世界政治・經濟關係など種々あるが、何れにしても一民族國家の經濟圈すらも、世界全體がその實現を見るまでには百年或は百年以上もかかつてゐるのだ。だから、それ以上の大經濟圈の完成に可なりの年代を要し、又どの經濟圈も一齊にできあがらないのは云ふまでもない。

ただ、ここでは若し近き將來に如上の四大ブロックが成立したとして、その各ブロックは果して自

給自足ができるかといふに必ずしもさうでない。

（一）獨伊樞軸の歐洲聯合國。もし假に全歐洲大陸と全アフリカを打つて一ブロックとせば、南阿から金・白金・ダイヤモンド・クローム・マンガン・錫・銅・マグネサイト・石綿・水銀・雲母・タングステンの諸鑛物と羊毛、埃及の棉花その他の熱帶產物を生じるから、之と瑞典の鐵鑛、北歐の木材、フランスのアルミ等を加へて强力なものができる。だが石油・錫・ゴム・小麥・棉花は自給できない。（イ）石油は人造共で全歐年產千二百萬噸だが平時消費量の約二分の一に過ぎぬ。（ロ）食料も歐全體としては一九三七年に六十五億マルクの入超である。その中で英本國が四十七億マルクの大入超、ソ聯は一億五千萬マルクの出超であるから、この兩者を差引ける歐大陸の飲食料品の入超は約二十億マルク（平價わが十億圓）の入超である。（ハ）棉花は埃及だけでは分量的に問題でなく（ニ）ゴム・錫は全部その他の非鐵金屬も可なり輸入に俟たねばならぬ。

いま現在歐洲大陸（ソ聯除外）の非鐵金屬と食料輸入量（英本國除外）分は左の如し。（「東洋經濟新報」十五年八月卅一日號參照）

甲表　非鐵金屬に於ける歐洲大陸の不足（一九三六―三八年平均、千瓲）

	生產	消費	不足高	非鐵金屬の主要生產地
ボーキサイト	一、九六〇	二一八	ナシ	米國（三七六）蘭領ギネア（三四〇）
アルミニューム	二三八			米國（一二二）
銅	× 一七三	四二八	二五五	米國（六〇九）チリ（三四〇）カナダ（一三二）ローデシア（一九一）

鉛	× 二五九	五六四	三〇五	米國(三六四)メキシコ(二三九)カナダ(一八三)
亞鉛	× 四六六	五九〇	一二四	米國(五一四)カナダ(一六四)メキシコ(一五九)
錫	× 一	四七	四六	英領マレイ(六四)蘭印(三一)ボリビア(二五・九)

註。×印は採取されたる鑛石の金屬含有量、Metallgesellscfafr による、不足高は輸入により、またスクップから補塡された。

乙表　重要農産物の世界輸出及び歐洲大陸の輸入(一九三六—三八年平均、單位千瓲)

	世界輸出 (歐洲大陸の輸出分を除く)	歐洲大陸の純輸入 (ソ聯・英國・愛蘭を除く)	世界貿易に占める歐洲大陸の輸入割合	歐洲以外の主要輸出國
小麦	一一、一一三	三、五八九	三二・五	カナダ(四、〇五六)アルゼンチン(二、一七三)オーストリア
ライ麦	四三三	三九三	九〇・七	アルゼンチン(一一三)カナダ(六二)
大麦	一、六七五	五五一	三二・九	カナダ(三四三)イラク(二三四)アルゼンチン(二五一)
燕麦	五六五	四二四	七五・〇	アルゼンチン(二八九)米國(七五)
玉蜀黍	九、五八四	四、三七七	四五・六	アルゼンチン(八、七三五)印度支那(五九二)滿洲國(一五一)
米	六、九五五	一、一六三	一六・七	印度・ビルマ(二、〇三二)印度支那(一、三二九)タイ(一、二九八)

砂糖	一〇、一四二	一、一八三	一一・二	キューバ(二、六二六)蘭印(一、〇三二)比律賓(八七九)
ココア	七〇〇	二七二	三八・九	ゴールド・コースト(二七五)ブラジル(一一八)
茶	四〇五	二六	六・四	印度(一五五)セイロン(一〇一)蘭印(六九)
コーヒー	一、六五八	六九三	四一・八	ブラヂル(八六八)コロンビア(二四六)
煙草	三八六	一六七	四三・三	米國(一七二)蘭印(四七・四)土耳古(三五)ブラヂル(三一)
棉花	二、七九五	一、三〇八	四六・八	米國(一、一八七)印度(五一八)埃及(三六九)
麻	七七五	四二三	五四・六	印度(七六四)
ゴム	九八五	二四八	二五・一	英領馬來(四〇三)蘭印(三六六)
羊毛	八八九	四八〇	五四・〇	濠洲(三三七)ニュージランド(一三一)アルゼンチン(一一五)

International Year-book of Agricultural Statistics and Statistical Year-book of the League of Nations による。

だが、この歐洲ブロックの强味は、高度工業の發達、機械と化學製品が質量ともに群を抜ける點である。

(二) ソ聯。基本的原料はほぼ充分である。ただ、ゴム・錫は全く不足し、鉛、アルミ・ニッケル・

アンチモニー・タングステン・ヴアナヂウム・モリブデン・麻は大部分、銅・亞鉛・黒鉛・硫黄及び羊毛は或る程度まで國外に仰いでゐるが、これ等の中には新發見もあり、衣食料の自給とともにその自給力は大である。

弱點は既述のごとく工業能力の缺乏である。化學品・鐵製品・機械は、どうしても米國かドイツに仰がねばならぬ。恐らくスラブ民族はその折角の資源も之を完全に利用する力はなからう。

（三）英米ブロック。英本國と南北アメリカだけでも自給力は大であるが、之に印度とマレー並びに濠洲を加ふれば、殆んど自給できない物はない。生糸だけであらう。生糸も人絹とナイロンの發達でやがては之を他に求める必要はなくなるだらう。

（A）米國。

このブロック中では米國一國でも自給自足が大である。不足せるものはゴム・錫を最とし、次いでニッケル・アンチモニー・クローム・マンガン・タングステンは自給率が消費の三〇％以下、ヴアナヂウム・白金・アスベスト・黒鉛・麻類で、ボーキサイト・マグネサイト・水銀・加里及び羊毛等も充分とはいへないが、これも一面には消費の贅澤なためにもよる。

（B）英帝國。

米國の最も缺乏せるゴムはブラジルに一部は求められる、他は殆んどマレー及び南洋であり、錫も亦然り。この他に米國はアンチモニーは支那、クロームはアフリカ、ニッケルはカナダに仰いで

ゐるから、もし現在の英帝國の大部分が殘存して米國と一體化せば、その鞏固さは世界一となる。

英帝國としては、アフリカを手離すと南阿の金・ダイヤ・クローム・銅・ヴアナヂウムを失ふがカナダにおいて金・銀・銅・ニッケル・鉛・石綿・マンガンがあり、アルミ・パルプもある。

印度にはマンガン・クローム・鐵鑛・銅・亞鉛。ビルマ、マレイにも鑛物とゴム・錫があり、さらに濠洲には鉛・亞鉛・金・カドミウム・マグネサイト・タングステンもある。不足するのは石油であるが、資本關係でイラン及びイラクを保有せば充分であらう。

これに米國とメキシコ等の石油を一ブロックとせば固より問題でない。

結局、中・南米を包含しないでも、このアングロ・アメリカン・ブロックは農・鑛・工において完全なる自給力をもつてゐる。

（四）大東亞經濟圏。この範圍を日滿支に限らば、その自給力はなほ可なり薄弱である。

鐵・石油・ゴム・錫・棉花・羊毛・麻・パルプを始め銅・アルミ・鉛・亞鉛・クローム・ニッケル・燐鑛石・鹽などの不足が是である。

タングステン・マンガン・アンチモニーは南支にあるから、蔣政權なき後は、日滿支のブロック中に求められるが、その他のものは佛印、タイ、マレイ及び南洋、濠洲に尋ねなければならぬ。故に大東亞經濟圏は、理想として少くとも佛印と南洋を包含し、それに外廓として機會均等の自由通商を爲しうるタイ・マレイ・ビルマ・印度及び濠洲諸國をも包含すべきである。

第五　ブロックの形態

立憲政治といつても、國情や民族性によりて實體が異なるごとく、大經濟圏或は廣域經濟と云つても、之を組成する國家群や民族性又は地理的關係によりて同じでない。

一、ドイツ型

歐洲は元來が鬪爭的國民であるから、その成立には鬪爭による征服のみが、ブロック成立の可能方法である。

幸ひ（A）ドイツが他の國家群よりも國民的意氣や人口數及び工業力において圖抜けて優勢强大である事（B）他が小國である事（C）陸續きである事からして歐大陸に關するかぎり、ソ聯を除けば全くドイツの實力で獨裁的・指導的歐洲聯合が成立できるであらう。

むろん、之がすぐに出來あがるか或ひは幾度か再出發・再編成を必要とするかは豫言のかぎりでないが、世界のブロック化が歴史的必然であるとせば、歐洲聯合も早晩完成するであらう。同時にそれは强力なる武力國ドイツが中心的指導者の役目を果さねばならぬ。

二、ソ聯型

ソ聯はその組成細胞の大部分が同じスラブ民族であるから、ブロック形成には一番容易である。

三、米國型

南アメリカは民族的に可なり複雜である。メキシコ及び南米諸國はスペイン又はポルトガル人と土人との混血人を中樞とし、さらにイタリー系、ドイツ系が加はつてゐるから、米國は武力か或は金力で之を支配するのほかはない。現に米國の企圖せる所はドル外交卽ち投資と貿易關係で彼等を米國と堅く結びつける事である。卽ち左の如し。（單位百萬弗）

甲表　米國の海外投資（一九三九年末）

總計	一一、三六五
內	
ラテン・アメリカ	四、〇三〇
カナダ及ニウフアウンドランド	三、七八〇
アジア	七九〇
歐洲	二、二八〇
內	
ドイツ	四五〇
佛	一六〇
伊	一五〇

乙表　米國洲別貿易額（一九三七年）

	輸入	輸出
北米	六九一	八四〇
南米	四二二	三一八
歐洲	八、四五四	一、三五六
アジア	九六七	五八〇
大洋洲	六八	九八
アフリカ	九二	一五一
合計	三、〇八四	三、三四五

上表により米國投資は南米と北米に最も多く、合して七十八億ドルに上ぼり全世界投資の約七〇％を占む。

貿易も南米だけではアジア・歐洲及び北米に劣るも、北米を加へると輸入は第一位、輸出は歐洲につぎ第二位となる。

且つ南米貿易も第一次歐戰時代に英を凌駕し、今次の歐戰で漸く獨占的地位を占めんとする形勢あり、その投資への增加と相俟ち、アメリカ・ブロックは金力を以て着々實現されつつある。が、異民族群であるから背後に大砲を忘れてはならぬ。

四、東亞型

東亞ブロックは如上のブロックと比較し、何を以て之を結成し指導せんとするのか。ソ聯のごとき民族的共通分子の壓倒力か或はドイツのごとく武力によるか。或は米國のごとく金力によるか將また之らの指導力を缺くが故に互助連環の對等的な且つ東洋的協同體を以てするのであるか。

既に現はれたる主潮は協同體であるが、もし協同體とせば、「與へて取る」の互惠關係でなければならぬ。と、云つて米國的經濟力によるか或は經濟外の軍事・外交によりて支那の獨立と發展を與へ、その代りに支那經濟力の協同を得るか、その可能力或は具體的可能策については未だ確定的でない。今後の問題は實にこの可能策の檢討にあらねばならぬ。

（註）本論に就ては拙著「東亞モンロー主義への驀進」（昭和七年）「生の經濟哲學」（四四三頁以下）や芳賀雄氏「世界經濟ブロック」森武夫氏「ブロック經濟地理」阿部源一氏「人口・資源・植民地や「昭和研究會編「ブロック經濟に關する研究」淺香末起氏「世界經濟の展開過程」參照。

第五章　貨幣價値のコペルニクス轉向時代

第一　フンクの宣言と金の價値

一　歐新秩序と金貨

去る七月二十五日（一九四〇年）ドイツ經濟大臣フンク博士は內外記者團を引見して歐洲經濟體制の「新秩序」の內容を初めて正確に表明した。曰く「歐洲新秩序」は歐洲において全體主義的經濟體制に基く經濟的歐洲圈を結成し「金」を基礎とする經濟組織を驅逐すること、この新歐洲圈は北米、南米、東亞等各經濟圈と有無相通ずるもので要旨は左のごとくである。

一、戰爭終了後は全歐洲に對し、ドイツが戰前及び戰爭中大成功を獲ち得た經濟政策と同一の政策を適用する。

一、ライヒスマルクは歐洲における支配的通貨となるであらう。しかしこのことは吾々が今後完全に自由な通貨制度或は爲替制度を樹立したり、或は通貨同盟乃至關稅同盟を結成することを意味してはゐない。而して今後金は歐洲通貨の基礎たることを止めるであらう。我々は如何なる意味においても金に依存する通貨政策をとることはない。

一、新歐洲經濟秩序は歐洲諸國民經濟の自然的要件を基礎とし、獨・伊兩國の樞軸を中心として結成される筈である。

一、右「歐洲經濟圈」は自給自足的なものでなく世界の他の經濟圈に對し有無相通の關係に立つものである。

一、北米と歐洲經濟圈との貿易關係が如何程緊密の關係に立ち到るかは、全くアメリカ側の出方如何にかかつてゐる。卽ちアメリカが世界經濟に寄與せんとすれば世界最大の債權國たると同時に最大の輸出國たらんとする誤れる方策を放棄すべきである。

一、アメリカは南米から歐洲が買付けるだけの生產品を買ふことは出來ない。從つて米洲を世界經濟から切り離さんとするアメリカの企圖は失敗すること間違ひない。

一、ドイツは南米との貿易において北米の仲介を排擊する。南米諸國の獨立した主權と協定を結ぶのでなければドイツは對南米貿易を斷念するであらう。

一、東亞においてもイギリスの海賊行爲が終熄し次第、新貿易關係に有利な條件が展開するであら

う。

一、かくて新歐洲經濟聯合は、國際經濟場裡における他の經濟圈との關係について、歐洲の利益をよりよく代表することになるであらう。

一、今吾々が準備しつつある來るべき經濟體制において、ドイツは最大の經濟的保障を確保しなければならず、ドイツ國民は消費物資の最大量を供給され、より高い生活水準を保障されるであらう。

フンク博士の如上の言は必ずしも金貨の存在と價値を否定するものではないが、

(A) 少なくとも歐大陸内ではマルクが支配的通貨となるから、金貨の受授が從來のやうに必要がなくなる。

(B) 歐洲と他の經濟圈たるアメリカ・東亞等との貿易は依然として行はれる。從つて、その最後の決濟には金貨も必要だが、各經濟圈の自給力も强まるから、その貿易數量も從來ほどでないかも知れず、また貿易數量は增えても、交換額がほぼ等しきやうに調節すると、差引額が少なくなるから金の必要量も減じる。

二　ブロック完成と世界貿易の變化

もし歐洲のブロックが實現せば、その貿易はどうなるか。米誌アナリスト（十五年八月廿九日號）

は一九三七年の數字を基礎として、世界貿易に占むる各國の勢力圈比率を計算して左の數字を得た。

	輸出	輸入
△歐洲（蘇聯を除く）	五一%	六一%
内獨伊圈	三七	四一
イギリス（英領アフリカを含む）	一四	二〇
△東亞	一一	一〇
内日本	五	五
滿支、佛印、蘭印、泰	四	三
マレー、英領ボルネオ	二	二
△米洲	二三	一八
内アメリカ	一三	一一
ラテン・アメリカ	一〇	七
△蘇聯	一	一
△其他	一四	一〇
△世界	一〇〇	一〇〇

右表によると、獨伊圈は英・米が歐大陸から手を引くかぎり、世界輸入貿易の四〇%、もし英國が敗北して英本土分も獨伊圈に入ると六〇%まで支配することになる。從つて今まで他國扱ひしてその

貿易決濟に必要とした金貨の受授も不用になる。

その上、歐ブロック强化で、他ブロックからの輸入もほぼ歐ブロックの輸出でバーター的に相殺できれば、金貨の世界流通額はますます減少するであらう。

三　銀の低落歴史と金貨

この結果として、將來の世界は金の價値が低減するのは、ちやうど銀が銀貨として使用されなくなつてから、次第にその價値を落してきたのと同じである。

これを歴史で見ると、金銀の比價は日本で德川時代に一對四、歐洲で一對一五卽ち一瓦の金は一五瓦銀と匹敵してゐた。それが一八七〇年後ドイツが金本位國となつて銀貨の使用量が減じ、他のラテン諸國も之に倣ふやうになつて、金の方はその需要增で騰貴し、銀の方はその需要減で低落し、かくて一八八〇年には金一對銀一八となり、一九〇二年には金一對銀四〇となつた。

進んで第一次歐戰後は戰時中における金鑛勞働者の賃銀高で金一匁（四瓦）の生産費が昂騰せるに拘らず、金價格は依然として一匁五圓であつた爲に、その生産が減少した。他面において佛印の如きも銀本位を廢したから、銀の需要はますます減ぜるに、その生産は銅鑛の副産物として供給が減じなかつたから、ここに銀は現在のごとく金一對銀一〇〇前後卽ち金一匁は十五圓、銀一匁は約十五錢内外となり、銀は貴金屬から卑金屬に轉落した。

四　金銀も貨幣に用ひられずば價値なし

金銀が貨幣に使用されるに至つたのは、金銀に貨幣たる資格を最もよく具備してゐる爲である。だが同時にまた金銀は貨幣として用ひられ、その需要が殖えたから、その値打ちが一層昂まり、値打ちが昂まつたから、何人も之を裝飾品とするに至りて、その需要もますます增加し、愈々その價値を高めたとも見られる。

えらいから總理大臣になつたのであらうが、總理大臣になつたからえらくなる人もある。馬子にも衣裳であつて、富者だから美衣をつけるが、美衣をつけると富者になる事もある。金銀と貨幣との關係もさうであつて、金銀は値打ちがあるから貨幣に選ばれた所もあるが、値打ちある物は金銀に限らない。また同じ金銀とてその鑛山によりて生産費はバラバラであつて、どの金も一樣に一匁が十五圓ではないのである。甲の金山は今もなほ五圓の生産費であり、乙の金山は六圓、丙は八圓、以下九圓十圓、十五圓、さらに二十圓、三十圓の惡金鑛もある。ただ、そんなのは採掘しても採算に合はぬから何人も敢て生産しないだけである。

金の値打ちも右のやうに一定したものでなく、需給關係と生産費關係とが互ひに牽聯してゐる。だから將來もし貨幣として金の需要が減ずれば、金の價値は當然今の一匁十五圓より低減し、その生産費が五圓又は三圓、二圓の金山さへ採掘せば、その採掘量で充分世界の必要とする金の分量に應じら

れるだらう。

すると金四瓦の價値も五圓、三圓、一圓或は五十錢と低下して、金も卑金屬となり、何人も裝飾用に使はないからその需要はいよいよ減少して、その價値もますます低減するであらう。

第二　貨幣價値の意味

貨幣の價値とは一體何を意味するか、貨幣そのものは交換現象に於て常に他財の相手方として立ち、以て交換を圓滿にすることがその使命であり、從つて之が貨幣の使用價値でもあり効用でもあつて、他財のごとく其自體の消費使用を目的としないから貨幣の價値とは貨幣の購買力にほかならない。山崎博士は曰く、貨幣の價値とは貨幣を以て取得しうべき財貨並びに勞務等を指し、貨幣と他財との交換比例である。約言すれば貨幣の購買力である、と。

貨幣の此の如き特質は、貨幣が分業と交換の發達せる社會に於て財貨交換の必要上發達せる當然の結果であつて、分業に基づく各種財貨の交換の複雜さが無ければ貨幣の發生原因もなく又その存在理由もなくなる。スミスは、貨幣に關する限り何人も商人である、何人も再び之を賣らんが爲に買ひ、最終消費者としての買手がないと云つてゐる。

貨幣價値の意義にして上述の如しとせば、普通に價格 Preis 若くは貨幣價格 Geld Preis と云は

れるものを即ち貨幣價値と看做すべく、金十錢の貨幣價値は十錢ストーアにある諸々の商品によりて表示せらる。嚴密に云へば價格は一財と他財との交換比率であつて、牛乳一合とパン一斤とが交換される場合に、牛乳一合の價格はパン一斤でありパン一斤の價格は牛乳一合であると言ふべく、貨幣價格は一部分的の財と貨幣との交換比率を指すのであるが、現在では財と財との交換が殆んど凡て貨幣を通じて行はれるから、事實は貨幣價格即ち價格と同視するも大過はなからう。

價格は貨幣と個々財との交換比率であるが、貨幣と多數財との交換比率は物價 Prices, prices of commodities である。この點に關しても山崎博士の說は明確である。曰く、物價は貨幣の一般的價値即ち一般的購買力であるから個々價格の如く現實的のものではなく一の抽象的觀念である。從つて物價指數による測定は正確なる貨幣價値の反映ではないが、個別價値の綜合にほかならず、その高低は多數個別價値の變動の結果として貨幣價値の上騰若くは低落を示すものである。

第三　貨幣價値と金屬說

貨幣價値の意味が他の財貨と少しく異る結果は、貨幣價値の成立原因についても他財と同視しえざる節もあり、それが特に貨幣價値論の主張せられる所以である。

けれども若し貨幣の素材が金銀や其他の普通の諸財貨から成る時は、よし貨幣の使命職務が他財と

異なつてゐてもその價値は結局他財と同じ一般價値論に制約せられる。ミルはこの立場から、貨幣價値もまた他財と同じく、その價値の最終基底を生産費に置き、現實的には需要供給の關係で定まると云つた。故に貨幣價値は之を構成する素材が金若くは銀の生産費に合致する事になる。一般に金銀等の鑛物は農産物と同じく、需要增加につれてその生産費を增加せざれば之を供給し得ざるものであるから、金の價値もその産金中で生産の最も不利なる條件の最高生産費によりて決せられると。ミル說は貨幣價値の起源をその構成素材たる金屬の價値に求めるものであるから、周知の如く、之を金屬派 Metallist と呼ばれ、貨幣價値の舊說を代表するものと認められる。

之に對してレキシスは金の他財に異なる點を貨幣との關聯にありとなし、その特質として金は常に一匁（四瓦）五圓で政府に買上げられるから金には生産過剩が發生せず、從つて金に低落なしとした。だから、金はその生産費が貨幣に價値を與ふるに非ず、需要の關係から貨幣法の規定により金は一匁五圓の價値を受取ることになる。

レキシス需給關係から金價値を說くのは一見解であるが、金も他の物と同じくこれだけで說明できぬ。何となれば一匁五圓で買上げる事によりて金の産額が增加し、之につれて貨幣量も增加すれば物價は騰貴して勢ひ金鑛勞働者の賃銀も騰貴するだらう。故に從來一匁五圓を以つて採掘できた金鑛も五圓以上の生産費を要する事となりて休鑛・廢鑛者の續出となり、金産額も次第に減少するであらう。

元來、財の需要と供給とは相關的のものであり、貨幣價値と他財も同じく相對的のものであるから、

如何に形式的に一匁五圓なりと規定して紙幣と引換に政府が無限に之を買上げんとするも、その買上げ代金としての紙幣流通額が市場に增加すれば物價高を招來して金産額を減少し、ここに金の價値を引上げて物價との調節を圖らざるを得ない。この調節線こそ金並びに各財の生産費にほかならぬから、凡ての貨幣が金を背景とするかぎり、ミル說のごとく金の價値もその基底は生産費によるが正しいと云へよう。現實論としてレキシスの需要說も他の物財の價格と同じく、金の價格決定の一要因ではあろ。

第四　紙幣價値と名目說

金屬を構成素材とする貨幣の價値が他財を決定する價格法則と異ならざるは上述のやうであるが、現實の貨幣制度はその貨幣の全部が金屬を素材とせず、金屬貨幣を準備として發行せられる紙幣である。金の支拂ひ準備を缺けるもの或は實價なき補助貨幣、甚しきは發行紙幣の全部が毫も金屬的背景なく實質價値なき紙片たる不換紙幣ですらある。然も尙且つ一定の貨幣價値を有し、百圓と記載されたる紙幣は一圓紙幣と比して、その生産費は勿論、その大きさすらも百倍あるを要せずして、堂々百倍の價値を有して天下を橫行濶步しつつあるは何ぞや。この現實に接して紙幣が金屬的實質價値の背景なくとも能く貨幣價値を發揮しうるとなすのが名目派 Nominalist である。

名目派は貨幣の素材に實價を必要とせずと云ふ一點では共通するもその流通價値の根據については區々としてゐる。或はクナップ Kunaph の國家權力說やベンディクゼン Bendixen の指圖債權說やジムメル Simmel が「貨幣の哲學」で說く象徵說、またわが左右田博士の貨幣手段說、山崎博士の歷史的流通信任說などあるがここには略し、筆者の說を少しく紹介しよう。

一　紙幣も費用と効用を兼備する

試みに途上の小童に問へ。汝は何故に貨幣を尊重するかと。彼は答へて言ふであらう。貨幣さへあれば飴でも何でも好きな物が買はれるからであると。貨幣の持つこの一般的購買力こそ、彼れ小童が貨幣を尊重する所以であり、貨幣の効用である。轉じて勤儉貯蓄以て巨萬の富を作つた老翁に問へ。汝は何故に貨幣を尊重するかと。彼は答へて言ふであらう。これ丈けの富を作るには並み大抵の苦勞ではなかつた。凡ては是れ努力と節約との汗あぶらの結晶であると。貨幣の持つこの獲得の困難こそ彼れ老翁が貨幣を尊重する所以であつて、これこそ貨幣の費用性である。而して貨幣の持つ斯かる効用性と費用性とはその貨幣が金銀たると紙幣たるとを毫も問はないのである。

貨幣が斯く一方には効用性を持ち、他方には費用性を持つことから何人も貨幣に經濟價値を感ずることは他の財貨と異ならない。即ち一定時に於て人が五圓に對して一圓よりも五倍の經濟價値を感ずるのは五圓が一圓に比して五倍の効用即ち購買力を持つと同時に、五倍の費用即ち獲得難を伴ふが故

でなければならぬ。若しその人の報酬率に變化があり從來五圓を得るに五時間の勤勞を要せし者が今は二時間半にて事足るに至らば、その人は五圓の貨幣に對して恐らく前の半分の價値しか感ぜぬであらう。

物價の高低により貨幣獲得の難易により、人により時により、貨幣の限界効用に差異があり、貨幣に對する經濟價値の度合は一定しないが、それは恰も他の財の經濟價値の度合が人により時によりて一定しないのと同じであつて貨幣のみに限らない。すでに何人も一定貨幣額に對して或る經濟價値を感ずるならば、その感じを以て他財の價値尺度とするも敢て異とするに足りないではないか。

或は曰はん、不換紙幣は個人にとりてこそその獲得費用を必要とするも、國家にとりては何の生產費も要しないではないかと。然り百圓でも千圓でも紙一枚の原料で以て、極く僅少の勞力でもつて、任意に印刷しうる紙幣はまことに論者の反駁する通りである。けれども國家が紙幣の發行權を獨占し、或ひは之を徵稅して吸上げ、その流通分量を增減しうる事は之を經濟的に見て猶ほ自然がその金鑛や石炭や石油を貯藏し若くは涸渴するのと同じであつて、紙幣の發行も石油の噴出もその發行所が山か野か政府かの差があるに過ぎぬ。石油噴出量の多少は自然現象として地質學の研究對象であり、紙幣發行權は國家現象として、その權力の性質については、政治法律學の研究對象であり、その分量如何は經濟政策の研究問題であるが、貨幣價値の成立問題とは全く區別しなければならぬ。石油が無限に湧出し、紙幣が無限に濫發せられ、その獲得に何の費用も要しないならば、其物に如何なる効用があ

らうとも、それは水や空氣と同じく、その價値が減少して他の物の價値を測る役目が果たせない。謂ゆる石油の惡性インフレや貨幣の惡性インフレ現象を發生し、もはや經濟活動の對象とはならないのである。だから、國家はその濫發を慎まねばならぬ。しかし一方に効用があり他方に費用があり、その調達に際して小費用・大効用の原則が行はれるなら、そのかぎり經濟價値は存在するのである。從つて他の立場に於て實體價値あるものも必ずしも經濟範域に入ると限らないと共に、實體價値なきものも經濟價値を持ち經濟範域に入りうる事は、法律上の人が必らずしも自然科學上の實體を問題としないのと同じである。法律に法律的價値觀と人格觀とがある如く、經濟には經濟的立場と經濟價値がなければならぬ。

二　貨幣の効用性

さて然らば何故に貨幣は効用を持つのか。言ひ換ふれば流通するのであるか。何人も必要の前には叩頭を餘儀なくせられ、事實に直面しては信念も動搖せざるを得ない。貨幣の流通も、よしその紙幣に對する流通の信念が動搖しようとも尙且つ流通する所以のものは、偏へに貨幣流通の經濟的要請があつて存するからである。必至の要求とは何ぞや。分業が即ち是である。

もし現代の複雜多樣化せる分業時代に貨幣にして一度びその姿を流通市場から絶たんか、猶ほ水道の斷水せるが如く空氣の拔けたるが如く經濟現象は立ちどころに窒死するであらう。これを想はば何

人か貨幣の必至的存在とその價値を否認しうる者ぞ。蓋し分業世界では交換の必要から、どうしても價値の尺度たるものが存在し、交換の媒介者たる役目を果さねばならぬからである。通說は貨幣の媒介性や流通性と價値の尺度たる事とを別種の二大職能と見るも、筆者は貨幣の職能は唯一つ即ち媒介手段に之を求め、價値の尺度たる事はこの媒介職能を果たすものの必要性格と認めるものである。ちやうど人間の職業と性能或ひは食物の榮養職能とその含有榮養力との關係に似てゐる。

食物には蛋白・脂肪・澱粉などの榮養成分があるからして榮養が果たし得るのであつて、かかる成分は食物の機能性格であり、榮養物たる事は食物の職分である。性能・性格とその職能・職分とは內外表裏の一體である如く、貨幣の流通性と價値尺度性もメダルの表と裏に過ぎない。

では何故に獨り貨幣のみが價値の尺度たる性格を持つか。蓋し貨幣は何人にも使用價値の對象とならず、從つてその價値は常に効用を無視して獲得費用のみに由つて測定されるからである。この點で使用消費の對象とならず、しかも一樣の品質をもつ紙幣こそ理想的貨幣と云はねばならぬ。貨幣に使用、消費的効用のない結果として貨幣價値の測定は他の一般財よりも頗る簡單であつて、之につれて貨幣と財との交換卽ち賣買行爲は、雙方ともに使用價値を持つ甲乙兩財の交換行爲よりも容易であり、經濟の發展に伴ひ複雜せる分業社會は、期せずしてかかる價値單一性格者——紙幣には獲得の費用價値のみありて、消費的使用價値がない——の存在を要請するに至るのである。

三　貨幣の費用性

貨幣が金銀なる場合は自然界がその獲得費用を要求するも、それが必ずしも同じでなく山によりて異なる事は既に述べた。之に對して紙幣は政府としてその生産費――獲得費――は殆んど要しないが各個人は、その能力によりて獲得に勞力を提供しなければならぬ。

官吏はもちろん、政府に物資を賣る人も、その物資生産の勞力により、その獲得する紙幣の價値を測定する。一時間の勞力で生産した物を一圓で賣るならば、百時間の勞力で生産した物は百圓で賣るであらう。

もし政府が、その物資に打込まれた勞力を無視し、紙幣を濫發して片ッ端から物資を買上げるならば、ここにインフレ現象を生じ、物資の生産量が紙幣の增發量に及ばず、物價が暴騰するか或は物資が不足するであらう。これが惡性インフレーションである。

だから、紙幣だと云つても之を濫發すると必ずその咎を受ける。これは紙幣もまた、獲得費用卽ち正確健全なる勞力に價値づけられなければ存在できない事を意味する。換言すれば、紙幣も金銀と同じく費用性をもつてゐる。この費用性を無視して濫發しては、紙幣も貨幣たる機能を果すことを拒否するのである。

一メーターを測る尺は、それが竹で作られてゐようと、鐵や金銀で作られてゐようと、將又た皮の

捲き尺であらうと毫もその長さを測るのに差異がない如く、物の價値を測る尺たる貨幣も又その素材が銅鐵であらうと金銀であらうと何らの優劣はない。

尺の優劣は正確なる長さの有無にあるごとく、貨幣の優劣もまたそれが正確にして搖がざる經濟價値を帶びてゐるか否か、それを表現するか否かにある。

紙幣はこの點で、ややもすると濫發されて同じ一圓紙幣もその帶びる費用價値が時日の相違によりて變動し易い心配はあるが――人によりて同じ一圓の獲得費用が違ふのは金銀の場合も免れない。これは各人の能力差などに基く――その增減を物資の生産量と自在に調節する賢明さが紙幣發行權をもつ當局にあれば、紙幣ほど理想的な貨幣はないのである。

四　金貨の將來

今や國內的貨幣として金銀貨を使用する所は世界のどこにもなくなつた。

大經濟圈の確立とともにブロック內の金銀貨の使用と受授も消滅し、すべて圓紙幣とかマルク紙幣或はルーブル或は磅や弗がそのブロック各國家の最後の決濟用貨幣となるだらう。

これにつれて、一ブロックの自給自足力の擴大から、他ブロックとの貿易もほぼバーター的淸算的傾向を示し、一ブロックのみの永續的大入超は考へられぬから、その差引決濟に用ひられる金貨も巨額を要しなくなる。斯くして久しく人類を惱ましたキラキラする黃金の光も、アメリカ發見このかた

資本主義の發達に多大な貢獻をして、議會政治や營利主義と同じく、その王座を讓らんとする。時の力である。

金(きん)よりも物資へ、物資よりもその生産力たる人間能力へ。げに眞の財産は、今や財産を生む人の體力と腦力にあり。この生産力の再認識へと、經濟價値はコペルニクス的轉向時代に入らんとしてゐる。

五　米國の貯藏金の運命

一九四〇年八月における米國の金貨現在高は二百億弗近くであつて、世界における貨幣用金の總額二百六十億弗に對し約八〇%に及ばんとしてゐる。

米國では一九三四年一月に弗の切下げが行はれたが、當時の米國保有金は四十億弗であつて、世界總額の三六%であつた。以てその後の米國における保有金の激增ぶりを知るに足る。

保有金の增加原因は

(A)　米國における產金額の買上げ十億弗（一オンス三十五弗）。

(B)　外國からの流入金百二十億弗。その流入年度額は左の如し。（聯邦準備銀行月報單位百萬弗）

一九三四年	一、一三二	一九三七年	一、五八六
一九三五年	一、七三九	一九三八年	一、九七四
一九三六年	一、一一七	一九三九年	三、五七四

一九四〇年（一—四月）	一、一四八	合計	一二、二六八

(C)　評價益、二十八億。これは弗價四〇%切下げにより所有金の値上がり額。

(D)　尙ほ米國には外國のイヤマーク Ear mark 金——特別保護預り金——が別に十三億弗ありといふ。

では、何故に斯くも巨額の金が米國に流入するか。その原因は次の如し。

(A)　一九三三年ドイツがナチス天下になつてから、歐洲危機說が次第に昂まり、その不安から歐洲の資本が米國に逃避した事。

その逃避形式は米國の公・社債或は株式が買はれ、一時的には銀行預金ともなりて形勢觀望、以て何處が最も安定した資本の逃避地であるか、これを求めようとするもの、謂ゆる浮動資金 hot money 等である。

(B)　米國の輸出超過による受取金及び貿易外受取超過である。

(イ)　米國の貿易勘定は毎年出超である。左の如し。（單位百萬弗）

	輸出	輸入	出超
一九三三年	一、六七五	一、四五〇	二二五
一九三四年	二、一三三	一、六五五	四七八
一九三五年	二、二八三	二、〇四七	二三四

一九三六年	二、四五六	二、四二三		三三
一九三七年	三、三四九	三、〇八四		二六五
一九三八年	三、〇九四	一、九五〇		一、一三四
一九三九年	三、一七六	二、三一八		八五八

上表に示すが如く米國の貿易は年々常に輸出超過である。

（ロ）貿易外收支　この勘定では、第一次歐大戰中の對歐貸付金即ち戰債――一九三四年後は歐洲諸國の政府はドイツの償金不拂を理由として返濟しない――の受取金は漸減し消滅したが、一般の海外投資利益が三億弗、手數料等が一億弗、計四億弗見當の受取超過あるも、運賃や旅行者の觀光費及び移民送金、慈善事業（支那等）において、支拂超過が同額の四億弗ほどあり、差引トントンである。

要するに米國の金流入は海外からの米國投資と米國人の海外投資の引上げ並びに米國貿易の輸出超過に基く。

むろん、これ等の背景には、曾て一匁（四瓦）五圓の金が十五圓近くになつた爲に、世界の產金高が一年約四千萬オンス、十四億弗となり、一九三〇年に比し、數量において二倍、價格において三倍になり、それが米國に持ち出されて米國政府の買上げを要求し、その得た弗紙幣で米國證券や米國商品を買ふとか或は預金にするやうになつた事も一因である。

何れにしても、米國に金は流入超過であつて、流出原因は少ないから、今後もなほ米國の保有金は大して減じないであらう。

ただ、歐洲が平和となる反對に米國が歐洲或はその他と戰爭して、米國の證券が暴落の惧れある場合のみその投資が歐洲に引上げられ、ここに金が米國から歐洲に復歸する場合もあるが、この場合にはまた米國の歐洲投資と差引きされるかも知れず、すると米國から流出する正味の金はさう大したものではなからう。

金が斯やうに米國の手もとに集中されるに拘らず、もし世界に四大ブロックが成立して、その自給力の擴大と金による世界貿易額の減少する時、或は世界貿易額は減少しなくても、その貿易がほぼバーター制となりて貿易の差引決濟額が減少すると金貨は全く失職する。この場合に米國はどうするか。

元來、工業國は食料又は原料の輸入國であつて、貿易は入超となるのが過去における國際經濟の原則であつた。英・獨・佛がさうである。貿易は入超でも高度資本主義國は貿易外の受取超過で埋合はし、かくて世界の金貨は工業國と農鑛國とを轉輾し、毎年の金增產額だけが新なる購買力として世界經濟の發展をもたらしたのである。

然るに米國のみ第一次歐大戰までは農鑛國換言すれば食料國・原料國であつたが、大戰中に完全なる工業國となり剩へ資本の被投資國から投資國に一變した。その結果は貿易も常に出超、貿易外收入も順調であつて、金は流入傾向にあるに加へ、世界一の安全投資地として各國から逃避資本が續々集

中してきたのである。

米國のやうに一身で世界の食料と原料と工業品を賄ひ、尙且つ資本まで調達する經濟力ある國は世界歷史で最初の現象である。このレコード破りの現象こそ、米國をして今見るやうに、その保有金の多きに惱む原因を作つたもので、その原因を失はないかぎり、米國は金の惱みから脫せられない。あたかも脂肪を好むから肥える。肥えると益ゝ脂肪を好んで遂に脂肪過多症に惱む人と同じと云へよう。

そこでこの過剩金をどうするかが米國の問題である。現に考へられる所では次のものがある。（東洋經濟新報昭和十五年八月十日號參照）

（A）金買入相場の引下げ。
（B）金買入政策の中止。
（C）外國からの流入金に課稅。
（D）國際協定による金生產の制限。
（E）南米その他への海外投資。

まづ（A）の金買入相場の引上げは、弗相場の昂騰となり、米國貿易をして輸出減少、輸入增加を來たすから、それで以て世界貿易のバランスが取れる。工業國たる米國として當然の行きかたであるが、それでは取敢えず米國の產業界が外國品の侵入にあつて痛手を負ふ。從つてその反對のために實現が困難であらう。

（B）の金買入れ中止もまた事實は金價格の金の値下がりとなり、その値下がり限度が不明なだけに（A）の場合よりも一層その影響は不安であらう。

（C）の流入金課稅も、しばしば問題になりながら未だ實現されない。蓋し流入金の課稅は、輸入品に關稅を課するのと同じく、それだけ國內品を高める結果となりて米國內の產金を奬勵するか或は反對に外國の流入金は課稅額だけその値を引下げられた形となり、米國から物を買つた場合に從來よりもそれだけ多く金貨を拂はねばならぬ。從つて米國品は割高となり、米國の輸出が衰へる。

（D）そこで已むなく、米國はその持つ金を海外に投資し、外國の購買力を煽揚するほかに名案もないが、それでは借りた國は永久に米國にその金を返す途がない。

米國から借りた金を返すためには、米國がその貸した國の生產品を買込んで米國貿易が輸入超過になり、借入國が輸出超過になるほかはない。しかも之では米國の方でその國內產業が衰微するとて好まないのである。結果は歐諸國に貸した戰債その他のやうに貸倒れとなるほかはないのである。

要するに世界は廻り持ちである。貨幣は殊にさうである。それを米國は獨りで食料も原料も工業品も自給して餘りあり、資本まで持ち過ぎて世界の國際分業と廻り持ちを無視した。そこに今日のごとく持たぬ國をして「持つ國」とならねばならぬ要請を痛感せしめ、世界ブロック化運動を捲き起した動因があり、これと同時に折角その山と積まれた寶の金貨も今や無價値化せんとしてきたのである。

第一次歐大戰後において歐洲はもちろん、米國にも戰債棒引論が唱へられた。金が米國へ集中して

は世界の購買力がなくなる。世界の購買力がなくなれば米國の輸出も衰へ、その產業も延いて衰へる。だから、戰債を免除し世界の購買力を刺戟せよといふのであつた。

だが、米國多數の輿論は、これに反對し剩へ關稅を高めて外國品の入超を防止した。何もかも凡て自分の手に握らうとして、握りおうせた結果がこれである。

むかし、マイダス王はあまりに黃金を欲しがつて、その觸れる所すべてが黃金化する魔杖を神さまから授けられた結果は、驚くべし、着る衣服も、喰べる食物も、觸るるところ、萬物これ黃金化して終ひに黃金化の嘆きに面せざるを得なかつた。いま米國はまさにマイダス王と同じ嘆きを見んとする。蓋し獨占者の嘆きであり、勝利者の悲哀である。

物は人間のために存するのであつて、人間が物のために存するのではない。況んや貨幣をや、況んや貨幣の一形式たる黃金をやである。黃金の山積せる米國は今や一塊の黃金を產せず一握の黃金すら有るか無きかのドイツの國力に慄(おのの)いてゐるのである。

物質の力の何ぞ弱くして、人の力の何ぞ强き、それは人が物質を變化、支配することができても、物質から人を作ることができない當然の結論である。米國も今やそのマンモニズムから目醒める時が來た。否、人類の凡てがさうなのだ。

第六章　國力の意味と日本の現實

第一　國力概論

一　世界狀勢と國力

世界は前述のやうにその好むと好まざるを問はず五大ブロック化し、進んで四大ブロック、軈ては三大ブロック化せんとしてゐるのである。東亞でも、どうしても一大ブロックを建設しなければ、他のブロックに威壓せられるのだ。しかも東亞において斯やうなブロック建設の樞軸たるものは日本をおいて他にこれを求められない。

だが、ブロックの形態が指導的たると協同體的たるとを問はず、その樞軸者は他の國家群を纏め、これを互助連環●一大有機的自足體たらしめるには、先づ自らそれ相當の實力を具備しなければならぬ。ここにおいてか國力とは何ぞやを問ひ、その現實と强化策を考究しなければならぬ。

二　國力の意義

國力の強弱はその國の現實目的と環境の變化とによりて異なり、必ずしも一定不變のものでない。恰も演壇の勇者が必ずしも土俵上の強者でなく、同じ體力に就いて見るも、力士としての強大者が學者としては必ずしも研學に粘りの強い身體だと云へないのと同じである。

同じ意味でまた平和時代の國力如何が直ちに戰時の國力に反映するとは云へない。食糧の自給自足力は平和時においては寧ろその國の工業發達段階の低位を示し、經濟的角逐には不利とも考へられるが戰時ではそれが強味となる。だが、これも戰爭の主力が機械化にある場合、或はその不足物資に對して後援者のある場合や、戰爭期間の長短によりまた事情を異にする。即ち個人の強弱も國家の優劣強弱もその目的や事情や、時代により常に一定不變の強さをもつものではない。

三　國力の強化

國力の強弱はその指導目的や環境によりて右の如く異なると共に、その持つ諸要素を綜合的に結合し、之を能率的に使用するや否や、またその能率的使用の前提として、その遂行せんとする國策即ち一國の目的が一事に集中されつつありや、或は多元的に散漫に使用されてゐないか否かによりても非常に違つてくるのは、個人の社會における仕事の成否と同じである。

國策一元化の要　筆者の忌憚なき感じを以てせば、日本の指導目標は餘りに多端化してゐたやうである。

まづ一面征服、一面建設の二面があり、對外政策も擊ソ・倒英の聲があると思ふと、反獨・親英の傾向があつたり、或は親米派と挑米派が對立したりして動ゝもすれば世界を擧げて敵化せしめ、彼等の力を利用せずして、寧ろ彼等と遮斷孤立せんとしてゐる。飜つて建設工作にしても生産力擴充と大衆生活の安定との兩面に向けられ、それも內地のみならず、日滿ブロックから進んで支那再建・支那大衆の安居樂業までも保障配意しなければならぬ。否、單に生活問題のみならず、文化工作にまでも及ばんとするのであるから、如何なる餘力あるも其の力の是れ足らざるかが惧れられる。況んや餘力必ずしも大ならざるに於てをやである。最近それが次第に一元化してきたやうであるが、なほ徹底化を要するだらう。

國力の綜合集中の要　同一能力も目的が單一化せられ且つその方法が集中的ならば、その効果の大なるは云ふ迄もない。故に之を大處より見ると、軍事・外交・經濟は常に綜合統一されて唯一の現實的な國策遂行に集中せらるべく、然らざれば二頭・四頭だての馬車が、その駕御宜しきを得ざるために、反つてその前進を阻み一つ所にきりきり舞ひする結果となるであらう。

右は國家推進力に關してであるが、之を一局部の經濟力だけに就いて見るも、その要素は凡て有機的のつながりを以て按排せられ、その一目的の遂行に集中されなければならぬ。もしその要素間に統

制的聯絡がなければ、その經濟力は個々的にはなかなか能率的でも、全體的にはその事ゆゑに逆に無能率化するであらう。內閣閣員が個々的には如何に大物であつても、之を統御する首相にその綜合力がなければ反つて分裂を早めるのと同じである。

日露戰爭時におけるわが國は、敵を唯一つのロシアに集中し、その他の世界は擧げてわが有力なる同情者たり後援者でもあつた。また國內的には軍事も外交も經濟も一元化されて渾身の力を打倒ロシアに傾注し、餘事はあげて戰勝後の事とした。かくして我が國力は最も効果的に發揮せられ、その戰勝を促進せしめたのである。然るに現在日本には日露戰爭當時の如き國力の一元的な精力的集中が足りないやうに思はれる。これは國に餘裕の存在する爲であるか、或は餘裕ありと主觀的に信じてゐる爲であるか、或は別の原因の存する爲であるかは問はず、何れにしても苟くも一國が偉大なる使命を果たさんが爲には、何よりもまづ渾身の力をしぼりだして一指導國策に奉仕しなければならぬ。

四　一國の經濟力

國力の基底たる經濟力は次の諸要素から成り、その合理的有機的な組織を一目的に集中する場合にその能率は最高度に發揮せられる。

(一)　物的資源
- A　食料
- B　原料及び助成財（生產財用・衣住等消費財用、原料及び動力・燃料等）

(二)　資本
- A　資本財卽ち生產裝置と資材（機械・器具・工場・杭木・地下足袋類）
- B　資本金（貨幣資本）
  - イ　國內用紙幣
  - ロ　國際用金貨
    - 1　國內產金
    - 2　國際收支の受取超過

(四)　人的能力
- A　勞働者（一般的及び熟練工）
- B　技術家及び事業員
- C　經營指導者（企業家）

一國の經濟力はこれ等要素の多少とその能率的組織によるも、その能率的組織は國策の如何或はその遂行期の長短により必ずしも同じでない。例へば戰爭でも比較的短期だと食料と兵器彈藥の製造能力さへあれば足りるが、長期となるに從つて原料獲得問題或は勞力問題が發生し、また食料や原料に自給力があつても之を採取する技術力が不足ではその自給力も何の効果もなくなる。

この場合には、第三國からの購買力と融通力を必要とし、ここに貿易或は外交の重要性が浮び出てくる。

五　日淸・日露戰と現在との經濟比較

紙幣で示された國民所得や一國の生產額或は公債發行額などは必ずしもその國力を正確に反映した

いが、今試に日清・日露戰と今次支那事變とにつき是等を比較するに次のやうである。（單位百萬圓）

	日清	日露	支那事變
期間	十箇月	十六箇月	滿三年以上
戰費	二〇〇	一、五〇〇	一二、〇〇〇（十五年三月迄）
公債發行	一一〇	（外債 七八〇 / 內債 四八〇）十二年七月 十五年六月	（一〇、五七四（內債） / 三四、三〇一（內債））
增稅	ナシ	一四〇	一、〇一六
兌換發行	初 一四一 / 終 一三五	初 二三二 / 終 二八七	初 一、四七二 / 終 三、三一六
銀行預金	一一一	七五一	一四、六四六 / 二七、四九一
內地貿易總額	初年 二三〇（入超 四） / 終年 二六〇（出超 六）	初年 七二六（入超 四二） / 終年 八五四（入超 一五四）	初年 六、九五八（入超 六〇七） / 終年 六、四六四（出超 六五八）
			（圓ブロック貿易） 初年 一、二五〇（出超 三四〇） / 終年 二、三四〇（出超 一、〇六四）

註。（1）支那事變開始は昭和十二年七月。貿易は十二年と十四年分。其他は十二年七月と十五年六月との比較。（2）日清・日露戰の銀行預金は開戰前年末。（3）日露戰の公債發行額は戰後經營分を除き、純經費用のものを示す。同兌換券發行高は三十六、三十七、三十八年の各年末。

前表の比較により、著しき差異は日清・日露戰は公債發行額が全戰費の六〇％以下の點である。尤

も日露戰では內外債合すれば九〇％を占むるも、內債のみを見ると三〇％以下である。即ち戰費の一〇％は增稅、五〇％は外債であつて、この外債で凡て軍需品が購入されたから國內に通貨膨脹の餘地はなく、兌換券發行高も戰爭の前後に亙りて、三十六—七年は二〇％、三十七—八年は一〇％の增加であるが、三十八年末は既に賠償金受入れやら戰勝思惑景氣によるインフレであつて戰費に基くインフレではない。これを現事變の如く戰費の大部分が內債發行により、その結果として通貨膨脹高が一五〇％を超えるものと比較すれば可なりの差が認められる。

從つて物價は、日露戰では日銀指數一年平均で三十六年に一〇三のものが三十七年は一〇八、三十八年は戰勝景氣もあり一一六に昂騰せるも、その昂騰率は一五％を出ない。然るに現在は十二年七月—十三年六月の一年で七％、其後は價格公定次第に實施せられ、一時は昂騰率が鈍れるも、この三年間に亙り日銀小賣指數は一七二から二六二に激騰し、內閣統計局の生計費指數は四五％高である。

次に日清戰爭では、戰費が一年の貿易總額以下なりしも、日露戰爭では十五億圓の戰費は三十七—八年の二年に亙る貿易總額と匹敵する。但しその中で半分は外債に依つたから若し之を考慮せばわが國內で調達撒布せる戰費は當時の一年貿易總額に當る。

本事變の一年戰費を五十億圓とせば、丁度一箇年の戰費と貿易總額とが相當し貿易額が減少の惧れある場合、それだけ國內生產力の擴大を必要とする。然らざれば紙幣戰費を增額するも徒に物價騰貴若くは物資不足を來すかも知れぬ。殊に圓ブロック貿易を除外し、第三國の貿易類を考慮すると一層

その心配がある。戰費と貿易とは直接に關係はないが、一國の經濟活動が貿易に依存する事多き我國では兩者の關係も常に對照的に觀察する必要がある。

六　第一次歐洲戰の國富並びに戰費論

國富と戰費との關係もまた簡單に一律に云へない。元來、國富とは一國の動產・不動產其他の物を調査年時の價格で示したものであるから、（A）同一物でも物價の高い時に調査すると國富は增加する。（B）故にインフレで物價が昂騰すれば當然その國富も增加する。（C）國によりて國富計算の基礎たる財產の組成比率が異る。わが國は英米に比して土地・家屋の國富に占むる比率が大であるが之はまた人口過多の爲でもある。いま戰爭力を中心として見る場合に一坪の地價が高く之が爲に國富が大であつても何の價値もない。故に國富と戰費との比率は一國の戰爭力を知る一應の指標でしかない。

第一次歐洲大戰で、英國の戰費は、國富八百億弗の四六％と云はれるも、聯合國其他へは百十億弗貸付け、他面米國に對しては債務四十六億弗を負うたほかに、戰前米國に所有してゐた有價證券其他の投資物六億二千萬磅卽ち約三十一億弗を賣却し、この合計七十七億弗の在外的資力がマイナスとなつた。さらに他の聯合國は、直接米國に六十億弗も借金して、米國若くは第三國からの軍需品を購入したのである。だから、單純に一國の國富とその戰費を貨幣價値で計算し、その比率を見て直ちに戰

爭の經濟的持久力若くはその影響を、國情と環境の違つてゐる他の場合に類推するが如きは決して當を得たものと云へない。

第二　國民所得と戰費との關係

日露戰爭及び歐洲大戰の戰費と國民所得　國民所得中その幾割を戰費として支辨し得るか。歐洲大戰の各交戰國を見るに左の如し。

（甲）國富と戰費

	國富	總戰費	比率
英	一六〇億磅	七五億磅	四六％
佛	二六五五億法	一四八三億法	五六％
米	二五〇〇億弗	二二九億弗	九％
伊	一〇〇〇億リラ	四一八億リラ	四二％
露	一二〇〇億留	五四〇億留	四五％
獨	四一〇〇億馬克	一三九三億馬克	四五％
墺匈	二二五〇億クローネ	八四四億クローネ	三八％

(乙) 所得と戰費

	國民年所得	一年平均戰費	比率
英	二三億磅	一八億磅	八八%
佛	三七〇億法	三二五億法	九七%
米	四〇〇億弗	一三一億弗	三四%
伊	一一〇億リラ	七五億リラ	九五%
露	一五〇億留	一三五億留	九二%
獨	四〇〇億馬克	三四一億馬克	八五%
墺匈	二五〇億クローネ	一八二億クローネ	七三%

右表によれば、米國を除くほかは、すべての國民所得の八〇—九〇%を戰費に投じて居る。

また日露戰爭當時の國民所得は、內閣統計局調では十二億圓、之に對して戰費年額は十億圓であるからその比率は八〇%である。

現在のわが國民所得と戰費 上例に從へば今次支那事變に於て我國は果して幾何戰費の支出が可能であるか。昭和十二年の國民所得は、その兌換券平均發行高は十五億五千萬圓、この中約一億五千萬圓の鮮灣兩銀行準備充當額を引去るとも內地流通高は十四億圓である。今若し此十四億圓の紙幣が月一回一年に十二廻轉せば百六十八億圓卽ち約百七十億が國民の年所得となる。昭和十四年は約二百五

十億圓であらう。

之を生產額の方面から見ると、農林省作成の十二年度農家收入は農林・水產等三十六億五千萬圓、商工省發表十二年度工業生產額は百六十五億圓、兩者は合して二百一億五千萬圓である。十四年は農が約五十五億圓、工業が二百三十億圓、これに鑛山を入れると三百億圓位だが、工業生產額は輸入原料の支拂、或は農產原料代金も一部は含有して重複部分もあり、これらを考慮せば十二年の內地國民所得は百七十億圓、十四年は二百五十億圓見當であらう。この國民所得に對して八〇%の戰費負擔が可能とせば、十二年は百三十六億圓、十四年は二百億圓の戰費支出力が存するわけである。

所得八〇%の戰費支出可能條件 だが年所得の八〇%が一年戰費に支辨されるとせば、國民は殘餘の二〇%を以て生活せざる可らず、從つて貯蓄も生產擴充の餘裕もあらう筈がない。

日露戰爭や歐洲大戰において各國の戰費支出が、國民所得の八〇%に上ぼつたのは (A) 外債募集によりて、歐洲各國は戰費の三〇%、日露戰爭の我國は六〇—七〇%も、外國から軍需品其他の必需品調達が可能なりし事、(B) これに加へて自己所有の海外投資處分による戰費の調達、(C) 過去貯藏分の軍需振向けなどが役立てる爲であつて、實際はその年所得の八〇%など決して戰費に支出できないのである。

第三　未結實の投資時代

日本經濟の割當てが上述のごとく次第に窮屈化してきたのは、事を裏返していふと、その支出が直ちに結實しない所にある。結實しない使途とは（一）國防費（二）滿洲開發費（三）生產力擴充資金である。

一　國防費は果して不生產的か

國防費は一般に不生產的と思はれるが、これとて永い目で見ると必ずしもさうでない。わが日清日露戰に費されたる國防費と戰費は、その戰勝によりて前述のごとく即時又は漸次それを取返してゐる。もし國防費なるものが永久に不生產的な贅澤品とせば、それだけ早晩他の贅澤品の使用と同じくその國力を消耗して、その國力をより經濟的に使用してゐる國に打負かされるであらう。

第一次歐戰において勝てる英佛は、その勝利によりて戰爭に費した犧牲を回收できなかつた。それが或る意味で第二次歐戰の敗因とも見られる。これに反してドイツは負けてはゐるが、毫も國內の生產力は荒らされてゐない。そして英佛に支拂つた償金すらも、一は舊時代の實物——商船其他——であるに反し、ドイツ自身は米國からの投資借款で產業合理化をやり、その裝置はすべて新鋭化するこ

とができた。この新鋭化の裝置で生產した商品の一部を賣つて償金を拂つたが、それも間もなく不拂ひに終はり、結局のところ米國から借金して最新式の工業設備だけ儲けたことになる。これこそドイツが第二次歐戰に勝利せる所以である。ドイツは表面的には負けたが、經濟的には勝つてゐたのである。

今次の第二次歐戰にはドイツは戰ひながらも、或は征服國の金貨や北歐の鐵鑛や丁抹・オランダの食糧や造船所、或はフランスの武器や貯藏石油などを直ちに利用して、過去の軍事費と戰費を着々回收しつつある。

だから、國防費や戰費とて永久にその國力不相應な不生產的消費は許されない。もし之を強いて繼續せば、その國力は衰弱するほかはない。

國防費が不生產的なりや否やは、猶ほ個人生活において、その衣食住が贅澤なりや否やの問題と同じく、一應その身分との相對關係である。ただ本當に永續的發展を望むかぎり、個人においてその衣食住は健康的能率的でなければならぬやうに、國家としてもその國防費はできるだけ早く生產的回收のあるやうに使用されねばならぬ。

二　滿洲投資は生產的か

滿洲の投資は果して生產的か　日滿ブロック完成のためには、日本はどうしても滿洲資源を開發し

なければならぬ。一般にこの開發は生産的といはれ、國防費とは區別せられる。

だが、これとてその開發の結實期が前途は遼遠で、しかも現在の投資が巨額なる場合は、投資國の國力から見て直ちに是認できない。問題はその投資額とその投資の結實期並びに投資國の餘裕如何との相對關係であつて、一概に國防費は不生産的であり、開發費は生産的であると、觀念的・公式的に決められない。

三　生産力擴充資金

生産力擴充資金とは　昭和十二年から計畫された生産設備の擴張資金である。これも前述の二者とともに多大の金額とそれで買はれる物資を使用するものである。

その物資が工場となり機械となるから消費といつては不都合だが、これも滿洲開發とか國防費と同じであつて、その結實期と結實額が問題である。一年に五億圓の設備を投資して、その翌年から二億五千の生産品ができるならば、その製品價格の純益二〇%と見て五千萬圓の利益金である。それは五億圓の投資額に對して一〇%の利益率であるから、まづ生産的な投資である。

これに反して、設備は折角できあがつたが、資材や動力或は勞力の不足で、その生産品が投資額に比し遙に少ない場合は、之を不生産的投資と云はねばならぬ。

敍上の說によりて知られる如く、何が生産的であるかは、必ずしも一定したものでなく、謂ゆる生

産的と決められたものが必ずしも生産的ならず、逆に不生産的と考へられるものが却て生産的であり得る。要はその國力との釣合ひ、その結實期と結實額との如何である。

いま如上の三者のために昭和十二年以來どれだけの金額が使用されたかを見るに左の如し。（單位百萬圓）

	(1)政府の支拂超過額	(2)對圓ブロック出超	(3)生産力擴充資金認可額
昭和十二年	一、二八五	三五二	一、二九三
同　十三年	四、七五四	六八三	二、八二二
同　十四年	五、三三四	一、二六〇	四、二一五
合　計	一一、三七〇	二、二九〇	八、三三〇

備考。政府の支拂超過額及び對圓ブロック出超は議會で政府の發表したもの。生産力擴充資金認可額（資金調整法による認可額）は大藏省の發表。

(1)の政府の支拂超過金とは、(A)民間から政府が收納する租稅其他と(B)政府が民間に支拂ふ撒布金との差額であつて、支拂金の多いことはそれだけ公債增發による賄ひ金を意味する。同時にそれは軍費其他のために政府の物資需要等の增大によるは云ふまでもない。

(2)の圓ブロックの出超もそれだけ內地の物資需要が多く、反對に、內地は圓ブロックから受取る

物資のそれだけ少なきを意味する。

滿洲への投資は、その翌年から或る程度の生産力增大を將來してゐるから、それだけ生産的なのである。ただ、日本の立場から見ると、日滿貿易が現在の反對を示し、日滿の輸出入貿易分量が增加しながら、而も日本が入超になつた場合に始めて生産的となつたと云へる。

むろん、之も日滿を通じたブロック的立場から云へば、石炭や鐵の增産が內地に直接役立たなくても滿洲國の經濟力發展に役立てば宜いのである。從つてこの觀點に立つと、問題はその投資がいつ幾許量の生産品を出したか否かが批判の標準となる。

(3)の生産力擴充資金は、その翌年から內地經濟力にその生産品だけ貢獻してゐるから、最も直接的な生産的使用であるが、現實は豫定通りの生産的効果を擧げてゐない。他の原料・勞力などの生産要素がそれに伴はないからである。

何事もさうであるが、釣合ひを失すると折角の投資も生きて來ない。ビターミンやホルモンは微量でいいが、それが無いと他の榮養品が榮養化されないのと同じく、設備ばかり如何に立派にできあがつても、之を動かす油一滴が不足しても、その仕上げが成就しない事がある。丁度わづか一錢でも足りぬと目的地まで汽車に乘れず、その爲に大變な行き違ひを生じるのと同じで、重點常に重ならず、輕點常に輕ならず、要は比例の適合である。

第四　轉向期に達したわが經濟

日本經濟が昭和十四年ころから、轉向期にぶつかり再吟味の必要が生じたのは、右の事情からであつて、再編成の聲が聞かれるのも原因はここにある。

次の數字はこの事實を語る。

一　通貨膨脹と財の生産比率

通貨膨脹量　通貨がいかに膨脹しても、若しそれによりて買はれる財の生産も增大すれば問題でない。だが、その比率を失すれば問題となる。いま兩者の關係を見るに左の如し。（單位百萬圓。發行高は一日平均。工業生産は商工省指數。昭和六—八年一〇〇）

昭和	日銀兌換券 發行高	日銀兌換券 指數	工業生産指數 總指數	工業生産指數 製造工業	工業生産指數 鑛業
六年	一、〇四四	八七	九一、一	九〇、二	九六、八
七年	一、〇四一	八六	九七、二	九七、三	九六、三
八年	一、一一四	九三	一一二、五	一一三、三	一〇六、七

九年	一、一七八	九八	一二七、四	一二九、一	一一五、四
十年	一、二四七	一〇四	一四一、〇	一四三、三	一二四、一
十一年	一、三四〇	一一一	一五〇、二	一五一、九	一三八、〇
十二年	一、五三五	一二八	一六九、八	一七二、四	一五〇、六
十三年	一、九一九	一五九	一七二、〇	一七三、六	一六〇、一
十四年	二、三七六	一九七	一八〇、四	一八二、六	一六四、五
十五年一月	三、一三三	二六〇	一六一、四	一六一、四	一六一、二
二月	三、〇五一	二五三	一五八、五	一五七、九	一六三、一
三月	三、〇一三	二五〇	一八四、七	一八五、七	一七七、五
四月	三、二〇六	二六六	一七九、七	一八〇、七	一七二、七
五月	三、一八九	二六五			
六月	三、三一六	二七五			

右表により、紙幣發行高は昭和六年に十億圓、その指數では八七（大正十—十四年が一〇〇。三菱「本邦財界情勢」による。）であつたものが、十四年は二十四億圓で指數は二倍以上の一九七であり、十五年に入るやその發行高は三十億圓を下らず、指數も常に三倍以上を示す。右は日銀紙幣だけであるが、之に政府發行の補助貨幣たる小額紙幣を加へると更に增大する。

財の生産量　通貨の膨脹は斯く三倍乃至三倍半となれるに、轉じて財の生産量を見ると、昭和六年

にその指數九一のものが、十四年に二倍の一八〇、それから十五年の一月二月は激減し、三月漸く十四年の平均一八〇を超えて一八四を示したが四月は顚落、何れにしても財の生産量は通貨の膨脹量に伴はない。物資はどうしても不足せざるを得ないのである。

貿易は大出超　この物資不足に對し、貿易の輸出超過であつて、それだけ海外から不足の補充がつけば又問題もないが、事實は反對に十三年は二千六百萬圓、十四年は驚くなかれ六億五千萬圓の大出超である。のみならず、その出超は圓ブロックに對するものであつて、第三國には寧ろ入超である。左の如し。（單位百萬圓）

	出超額	圓ブロック出超	第三國入超
昭和十三年	二六	六〇一	五七五
同　十四年	六五八	一、〇六四	四〇六

即ち圓ブロックは出超、第三國は入超で差引わが貿易は出超となつてゐるが、この結果は金貨の支拂が多くして、受け取る代金は圓紙幣ばかりである。從つて折角の輸出も內地の物資を減少するだけで、第三國の購買力に轉化できない。內地の物資はいよいよ不足せざるを得ぬ。

二　惡性インフレの意味

謂ゆる惡性インフレとは何を指すか。

その語の使用者によりて必ずしも一致しないが、その徴候は通貨の膨脹率と物價の昂騰率とを比較して、物價昂騰率が通貨膨脹率より、大なるところにあらねばならぬ。

では、現在の日本は果してどうであるか。

いま、兩者の比率を見るに、左の如し。

物價昂騰率

	通貨膨脹指數	三菱調査	日銀調査卸賣	日銀調査小賣
昭和六年	八七	一〇五	一五三	一三六
七年	八六	一一六	一六一	一三七
八年	九三	一三二	一八〇	一四六
九年	九八	一三五	一七八	一四九
十年	一〇四	一四四	一八六	一五二
十一年	一一一	一五〇	一九八	一五九
十二年	一二八	一七五	二三八	一七四
十三年	一五九	一八一	二五一	二〇〇
十四年	一九七	二〇四	二七八	二二四
十五年一月	二六〇	二四二	三一九	二四七
二月	二五三	二三六	三一六	二五〇

三月	二五〇	二三三	三一一	二五四
四月	二六六	二三三	三一三	二五九
五月	二六五	二三三	三一一	二六二
六月	二七五	二二九	三〇八	二六二

右表を見ると、昭和六—十四年の間は、通貨膨脹率が約二倍に對し、物價昂騰率も三菱調査は約二倍日銀調査は二倍以下である。進んで十五年六月までを見ても、通貨膨脹率は八七が二七五となり三倍近くであるが、物價は三菱調査も日銀調査の卸賣・小賣指數とも三倍に達しない。だから現はれた數字の上で見るかぎり、未だ惡性インフレの兆候が認められない。だが之には次の三つを無視できぬ。

(A) 公定價格と闇取引の物價の相違。もし公定價格の實施がなければ、恐らく上述の物價指數も通貨膨脹率に伴ひ、或はそれ以上に暴騰したであらう。

(B) 品不足。公定價格實施の結果として生産費とその生産品價格とのバランスが失はれ、ここに採算難からして生産減少を見るに至つた。これが既述の如く工業生産の通貨膨脹に伴はざる所以である。

(C) 品質低下及び分量減少。加ふるに同一價格のものでもその品質が低下して、衣服は持久力を減じ、食物もまた榮養力を減ぜるか或は大きさや分量を減じた。從つて價格では暴騰しなくても實質的には頗る昂騰してゐるわけである。

三　勞力不足と賃銀高

轉じて生産の原動力たる勞力如何を見るに、これ亦今や手一杯である。

人的資源の不足到來　昭和六年以後の一般勞働者を見るに左の増加狀勢を示してゐる。（單位千人、厚生省勞働局調査）

	合計	男	女
昭和五年末	四、七一二	三、二一八	一、四九四
同　六年六月	四、七二九	三、二一五	一、五一四
同　七年六月	四、六一九	三、一六八	一、四五一
同　八年六月	四、八八一	二、三六三	一、五一八
同　九年六月	五、四四八	三、八六一	一、五八七
同　十年六月	五、八九五	四、一六九	一、七二六
同　十一年六月	五、九二三	四、一四八	一、七七五
同　十二年六月	六、三〇七	四、四二八	一、八七九
同　十三年六月	六、五九三	四、六五七	一、九三六
同　十五年二月	八、九五七		

右表によると五年末から七年六月迄は寧ろ失業者が十萬人もあつたが、その後は就職者が増加し、

躍進日本華やかな八—九年は一年に五十四萬人の就業者を見た。十—十一年には躍進日本の一段落で就業者は僅か三萬人に過ぎざりしも、十一年の準戰體制編成後は再び増加し、十一—十二年は四十萬人、十二—十三年は三十萬人、十三年六月から十五年二月の一年八箇月には二百四十萬人からの新就業者を示した。

尙ほ前數を勞働者の種類別による五年と十五年とを見るに、左の如し。（單位千人）

	工業	鑛山	交通	日傭等	土木瓦斯電氣等
昭和五年末	二、〇七六	二二五	五〇六	一、九〇四	不明
同　九年六月	二、三四九	二四一	五二一	二、三三六	不明
同　十三年六月	三、六二四	三九五	五四七	二、〇二七	不明
同　十五年二月	四、六五〇	五三三	五〇〇	二、八二五	四一〇

之によると日傭勞働者は九年から十三年では三十三萬人を減少し、最近再び増加したが、工場は二百六十萬、鑛山は三十萬人の増加を示してゐる。

昭和五年の國勢調査によると當時の生産年齢男子失業者は五十一萬人である。加ふるに一九三〇—五〇年の間では、我國の生産年齢（十五歳—五十九歳）人口數から見て、毎年の男女求職者はほぼ四十萬人に上る豫想である。（上田貞次郎博士編。協調會發行「日本人口問題研究」三〇九頁）從つて昭和五年後十四年迄に三百六十萬人の新求職者と前述五十一萬人の失業者と合して四百十萬人の就職可能者

があつた。之は單に勞働者のみならず凡ての職業、凡ての階級の求職者の數を含んだものである。

之に對して勞働者だけでも前表昭和五年末から十五年二月迄に四百二十萬人以上は就職してゐる。剩へ昭和六年から現在迄に滿洲・支那への進出者が官吏・鐵道員其他凡てで優に五十萬人見當に上るから、人的資源が最近に至り不足せるは、自然の數である。況んや軍の應召者も尠からざるにおいてをやである。

賃銀昂騰 賃銀昂騰の事實は各方面から立證できる。

(A) 商工省調の工場統計（五人以上の使用工場）によると昭和六年の男女職工百六十六萬人でその賃銀支拂總計は五億五千六百萬圓である。之に對し昭和十二年は二百九十三萬人の職工に十一億五千六百萬圓の賃銀を拂つてゐる。從つて一人當て昭和六年は一年三百三十六圓、十二年は四百圓である。十三年の支拂總計は十四億圓と見られる。

(B) これを賃銀指數から見ると左の如し

	就業者指數	定額賃銀	實收賃銀（日銀調大正十五年一〇〇）
昭和五年	八二	九六	九八
同 六年	七四	九一	九〇
同 七年	七四	九八	八八
同 八年	八一	八五	八九

同 九年	九一	八二	九一
同 十年	一〇〇	八一	九一
同 十一年	一〇五	八〇	九二
同 十二年	一一七	八二	九六
同 十三年	一二九	八五	一〇五
同 十四年	一四二	九三	一一八

註。(1) 日銀調査の工場數は商工省調より更に大工場に限局せる爲、本數字の價値は普遍的ならざるも大勢を知るに足る。(2) 定額賃銀とは一日十時間勞働幾何と決定せる賃銀率。(3) 實收賃銀とは之に夜勤、居殘り等の臨時收入を加へしものを指す。

右の數字によると就業者は六—七年を底として八年から漸增、最近は急增せるも賃銀指數は逆に漸減してゐる。通說は之を見て賃銀の低下せる如く看做すが事實はさうでない。臨時工若くは新參職工の增加により彼等の初任賃銀が少なき爲、斯る新參者の採用が多きほど職工全體の平均賃銀が低下し、その結果として賃銀指數は低減するものである。定額賃銀において殊に然り。それが好況になると先づ實收賃銀指數で增加し進んで勞力拂底の爲に、新參の初任給までが賃銀率を引上ぐるに至り、ここに定額賃銀指數までも一轉上昇趨勢を示すのである。

定額賃銀が十二年まで低下し、十三年に至りて上昇に轉ぜるは、實に斯る勞力不足に基き一般の賃銀率昂騰を現はせるものに外ならず。同時に居殘り或は手當て增加により實收賃銀は九二から十四年

の一一八に飛躍してゐるのは一層よく之を裏書してゐる。むろん十四年九月以來は賃銀引上げ禁止令で一應は停止してゐるのである。

かやうな勞働不足は農家及び商店從業員を工場に吸收して漸く之を補充しつつあり、從つて地方の小都市・町村にては、初めその附近に重工業會社の新設ありしを喜びしも、今や自家勞働が一層高き賃銀の爲に奪取せられるを見るや、新工場の出現を嫌惡するの風すら漸く生じて來たのである。

日本の强味減退　日本が英米ソ聯と比し、その資源において劣りしに拘らず、よく彼等と對抗できたのは實に勞力の豐富にあつた。その豐富に基く賃銀安と、その器用性による能率大にあつた。その强味が今は失せて勞力不足と賃銀高を來たした。物價はいよいよ昂まらざるを得ない。物價が昂まれば勞働者の生活費增をもたらし、生活費增は賃銀引上げを餘儀なくする。しかも賃銀引上げの結果は更に物價高を招來し、兩者はここにはてしなき惡循環 Vicius Circle を繰返すのである。

わが物價が世界物價の水準を超えるとき、躍進日本は同時にストップするのであるが、それは十二年の支那事變以來卽ちわが物價が世界水準を拔いた時に出立する。いま同一貨幣たる米貨ドルに換算せる物價指數を見るに大正二年以來左の如し。（東洋經濟新報調査）

	日	英	米
大正二年	九九	九九	九七
同　八年	二四三	二三二	一九九

大正九年	二五五	二七九	一九二
同　十年	一九三	一七九	一一九
昭和四年	一五九	一三六	一三三
同　五年	一四〇	一一五	一一二
同　六年	一一七	九六	九一
同　七年	七四	九三	七四
同　八年	八一	九三	八五
同　九年	九八	九七	九九
同　十年	一〇一	一〇一	一〇六
同　十一年	一〇八	一〇七	一〇七
同　十二年	一一九	一二四	一一八
同　十三年	一三〇	一〇七	一〇四
同　十四年	一二六	一〇〇	一〇一
同　十五年五月	一二四	九三	一〇二

大正二年の日本物價は英國と同一水準にあつた。それが大正八年は日本物價は激騰し、九年は英物價が奔騰せるも十年以降昭和六年までは日本物價は英米に比し常に二〇％以上の割高であつた。貿易の大逆調も日本財界の不振もここにある。

蓋し大戰後一九二二年頃から米國はいち早く企業經營の能率運動をやり英獨其他も一九二三年頃から合理化運動をやつてゐたのに、日本のみは依然として大戰成金の夢醒めず、醉生夢遊の狀にあつたからである。而も貿易依存率の多き日本財界には貿易の入超增大が早晩その不振を招來せずにおかなかつた。濱口・井上手術の行はれた所以である。

謂ゆる躍進日本は金禁止による爲替低落がその契機となつてゐるが、もしその以前にかの合理化手術なかりせば爲替低落も一時的影響に過ぎなかつたであらう。それが昭和十一年まで持續したのは全く濱口・井上政策の地ならし工作があつたからに外ならぬ。

躍進日本は十二年すでにその頂に近づける折しも支那事變あり、ここに日本物價は最近に至るまで再び英米より二〇—三〇%の割高を呈して、また振はざるに至つた。況んや支那事變と滿洲開發と生產力擴充計畫は、他面において輸入增加に拍車をかけるにおいてをや。それだけ輸出增加は日本にとりて至上命令であるが、それが物價高で行詰まつてきた。物價問題が十四年春このかた經濟政策のキイストーンとなり、論議の中心となつたのも當然ではないか。

第五　第二次歐洲戰と日本財界の再出發

一　歐洲戰わが財界に幸ひせず

一九三九年九月初、英佛對ドイツの歐洲戰の勃發するや、米國財界並びに我財界には、之を以て大景氣や神風來を信じたものが多かつた。だが、事實はこれに反して米・日財界殊に、日本財界は惡化した。いま詳因を述べる事はここに避け（拙著「戰爭・經濟・生活」參照）要約すると、次の如きものであらう。

（A）世界のブロック經濟化による英佛の自給方針。

（B）世界の富は米國に集まり、英佛資金が第一次戰時代ほど豐富ならざる事。

（C）人絹及びナイロンの發達による生絲消費の不增。

（D）日支事變により日本も支那も對外輸出力を減失せる事。そのため正貨受授による日支貿易の不振。

（E）一九四〇年の四月以來はドイツの電擊戰による歐洲と他洲貿易との激減。

（F）ポンド貨漸落につれ、わが英帝國貿易の漸減。

（G）世界船腹難。

この結果はわが輸出入貿易に多大の打撃を與ふるに至つた。

二　日本財界の新體制

この輸出入難を打開する方法如何。曰く外には廣域經濟を擴大强化し、內にはこの擴大强化せる經濟圈の物的・人的資源が洩れなく最高能率を發揮するやう努める事である。

最高能率を發揮するには（A）工業の高度化（B）個人企業及び財政の合理化を前提とする。謂ゆる新體制とは如何なる組織を取ればこの目的に副ふかの問題であつて、外延的な廣域經濟の樹立と對應するのである。

では、この廣域經濟卽ち大經濟圈樹立とその價値は果してどうであるか。

第七章　日滿支ブロックの再吟味

第一　滿支の自給力

一　滿支ブロックと歐洲ブロックの差

初め滿洲がわがブロック圈內に入るや、鐵・石炭はもちろん、棉花も鹽も金も其他の輕金屬もすべて自給自足が可能のやうに唱へられた。だが、現實は必ずしもさうでない。之には二つの理由がある。

主觀的錯誤　その一は主觀的のものであつて、滿洲に資源が存在しても、その開發はさう容易でない事だ。この點はドイツの歐洲ブロックと稍ゝ違つてゐる。ドイツの實現せんとする歐洲ブロックは、既に何千年來いろいろの民族が激烈な生存競爭を演じた所である。從つて現に住む民族は善かれ惡かれ、地球の他の土地に住む民族よりは何らかの意味で强者であり、優者も多い。

その連中が十八世紀後半の產業革命と資本主義の發達でその持つ資源を開發したのである。だから、

その大部分は開發の手順が整つてゐる。之をいまヒトラーは大經濟圏として體系づけようとするのだ。問題はその組合せであつて、素材そのものの心配ではない。換言すれば魚菜そのものは手許に揃つてゐるので、苦勞は如何にせばその素材で最善の料理ができるかにある。

これに對して滿支ブロックは先づその素材から拾ひあげねばならぬ。料理はその上である。だから、可なりの時日を要するが、日本人は之を忘れてゐた。英國がそのシンガポールや香港を築きあげ、印度や濠洲を現在のやうにするには、搾取もしたが同時に長日月と可なりの犠牲も拂つてゐるのを看過できない。だから、滿洲とて、そんなに早く資源が開發されるものではない。

客觀的錯誤　その二は客觀的のものであつて、滿洲が豫期したほどに金も輕金屬もなく、マグネシユームのほかは棉花も適地ではなかつた事である。その中でアルミは礬苦土（バンキサイト）を原料として作られるが、ボーキサイトに比し多大の電力を必要とするから將來電力が豐富になつてからである。

最近、漸く良質の鐵が東邊道に、石炭が北鮮近き密山に發見せられたが、石炭はむしろ距離の關係で朝鮮向きが有利なのだ。石油も湧出するとの說であるが、これは今後の問題に屬する。

二　對滿投資額

これに對し、わが國の滿洲投資は既に三五億圓を突破し、その償還を差引くも純增二七億圓に上ぼつてゐる。左の如し。（單位百萬圓）

日本對滿證券投資

年度	投資	償還	純增
昭和七年	一五七	三六	一二一
同　八年	二八〇	一六八	一一二
同　九年	二七九	一	二七八
同　十年	四八一	一一五	三六六
同十一年	四五三	二二二	二三一
同十二年	三二七	一三	三一四
同十三年	四三九		
同十四年	一、一〇四		

これだけの投資は何を意味するか。それは決して圓紙幣が滿洲に流出したのではない。その圓紙幣で買はれた日本品の流出を意味する。その流出が丁度日本の對滿貿易出超額に當るのである。滿洲から云へばどうしても物資が足りぬが、その足りぬ物資を日本から買ひたい爲に日本の投資を求めたのである。分りやすく云へば滿鐵其他がその株式の拂込を取るが、その拂込金で內地のレールや汽車やその他の必要機械を買つてゐる。それが金の上では日本の投資、滿洲國側の借金となり、物の上では滿洲の入超、日本の對滿貿易出超として現はれるわけである。

こんなわけで、日本の對滿貿易出超は滿洲經濟が日本に依存すること多きを示すが、滿洲の日本品輸入の內譯は衣食等に要する消費財が四〇%で生產的建設財が六〇%ぐらゐと見られる。

將來は、この生產的建設財がものを言うて滿洲の資源が大いに開發され、それがドシドシ日本に入來する時こそ、日本も滿洲に投資甲斐があつたわけである。

三　支那の開發

滿洲と同じく支那もまた開發途中にあり、いま俄にその價値は結論できない。

だが、滿洲と支那さへ開發すれば果して東亞に自給自足の大經濟圈ができるだらうか。吾々はいま此點を吟味すべき時に來たやうだ。そこで石炭から檢討するであらう。

第二　石炭

一　我國の石炭過去需給表

全日本の石炭需給を見るに左の如し。（單位百萬瓲）

	供給		需要	
	出炭	輸入	國內消費	輸出
昭和六年	三一	三・〇	三二	一・八
昭和八年	三六	四・〇	三九	一・七
昭和十年	四三	四・六	四六	一・二
昭和十一年	四六	四・八	五〇	一・二

註。（1）朝鮮、臺灣、樺太を含む。

（2）輸入は昭和十一年度、滿洲から二三〇萬瓲、開平炭六三萬瓲、佛印は八萬瓲、山東三九萬瓲を主とする。

（3）輸出地は香港の四三萬瓲を最とし、マレイ、比島等である。

二　將來の需給豫想

十一年は輸入四八〇萬瓲・輸出一二〇萬瓲、差引三六〇萬瓲の不足であつて滿洲炭・開平炭の輸入によりほぼ足りてゐた。然るに前表にても國內炭の供給額は僅か乍らも需要額に及ばざる傾向にあり、それが今後は更に擴大せんとする。卽ち昭和十六年迄の豫想需要量は左の如し。（單位千瓲）

昭和十二年	四八、四八八（實際需要）
昭和十三年	五四、〇〇〇

昭和十四年	六〇、〇〇〇
昭和十五年	六六、〇〇〇
昭和十六年	七二、〇〇〇

右の需要豫想量は林内閣伍堂商相案・石炭鑛業聯合會案・大阪工業會發表其他により多少異なるも十六年度が七千萬瓲中心なる點は一致してゐる。豫想の根據は銑鋼增產・石炭液化・造船・機械・瓦斯コークス等の重工業に對する原料的使用竝に燃料用としての鐵道・窯業・紡織・化學工業・電氣・內船焚料・官業等の消長見透しに懸り、然もその見透しは過去三年若くは五年の增進率及び五ケ年計畫から推定したものである。從つて最近の如く平和產業が萎縮し或は五ケ年計畫が豫想通り進行せざれば如上の石炭需要量も多少は狂ひを生ずるかも知れぬが、大體この豫想需要量を前提とせば昭和十六年の需要量七千萬瓲に對し、供給量は國內において昭和十一年度四千六百萬瓲を六千八百萬瓲とし、これに滿洲から五百萬瓲を輸入してその需給バランスを取らんとするのが商工省竝に石炭鑛業聯合會の原案であつた。左の如し。（單位千瓲）

供給豫想

	內地出炭	外地移入
昭和十二年	四七、九八〇	一、九七〇
昭和十三年	五三、〇〇〇	二、三〇〇

昭和十四年	五七、六三〇	二、五三〇
昭和十五年	六一、三三〇	二、八三〇
昭和十六年	六四、九五〇	三、三〇〇

輸入（滿洲、支那、佛印、北樺太等）

昭和十二年	四、七五〇
昭和十三年	五、二五〇
昭和十四年	五、七七〇
昭和十五年	六、二八〇
昭和十六年	六、七一〇

もし如上の豫想通り進行せば、十六年の需給も二百萬瓲の餘裕が生じるも、この內地大增產には、（A）技術者及び勞働者の充分なる供給（B）增產用の鑛業機械（C）運輸上の諸施設の完備を條件とし（A）の技術者は五千四百人・事務員三千人・勞働者十一萬人增加（B）の物的要素では新坑開發機械（C）の運送では鐵道配車の圓滑・港灣設備の改善擴大を必要とした。從つて事變前すら既にその實現が危まれたのが、支那事變の勃發により人的にも一層の逼迫を感じてきた。

殊に老境に入れる我が炭坑ではあり炭質も粉炭・粗炭の割合が增加せる上に、勞働者の素質低下・賃銀高による生產費高では、現在の炭價公定を以てして到底多くの增產は望めない。まして北海道・

樺太の新坑開發には機械關係・氣候關係・荷役運輸關係にて急速の實行を困難とし、他には目星き新坑は少ないのである。國內產炭は右の如き狀勢からして精々五千五百萬瓲がその極限に非ざるかと云はれ、その結果は六千五百萬瓲の豫想に對し約一千萬瓲の不足である。この不足を何處に求むべきか。

三　北支炭の價値

事變前の北支炭產出狀況　事變前の北支炭產額は左の如し。（單位千瓲）

	一九三〇—三二年平均	一九三五年
河北	七、一六〇	七、七四〇
山東	三、〇八〇	三、五〇〇
山西	二、五三〇	二、七〇〇
察哈爾	二〇〇	二〇〇
綏遠	六〇	六〇
計	一三、〇三〇	一四、二〇〇
全支合計	一九、五一〇	二〇、五五〇

右表により、北支產炭は全支產炭の六六—六九%を占むるを知る。併し（イ）小規模による資本技術の不足（ロ）交通不便と運賃不廉（ハ）重稅等による經費大等により、僅に千四百萬瓲の產量に過

ぎぬ。年產百萬瓲以上のものは、河北の開灤（開平）、山東の中興及魯大の三山であつて、二〇萬瓲以上のものは河北の井陘、山西の大同、河北の恬立である。

（1）開平炭　卽ち開灤炭は埋藏量七億瓲と稱せられ、年產五百萬瓲、强粘結性にして冶金用コークス配合炭として最適である。その開平公司は鐵道線（北寧線—唐山、秦皇島及び北京間）運河共凡て英人中心に經營され、秦皇島竝に塘沽よりの自家用船開平號及傭船十八隻を以て海路輸送にも當つてゐる。事變前は重稅と經營拙劣の爲に收入七萬五千磅・支出七萬六千磅、赤字一千磅であつて日本に賣却したき意志もあつたやうである。（2）中興炭　次に山東の西南部にある中興炭も粘結性の良質石炭であつて、製鐵に好適のものである。年產百五十萬瓲、大運河を通じ主として中支に賣捌かれるも、我國では日本鋼管はこの石炭を用ゆ。但し生產費は不廉であつた。（3）井陘炭礦　炭質コークスに適する。河北省政府と獨逸商との共同經營である。年產約六十萬瓲。

北支炭の利用の前提條件　上述の北支產炭は先づ北支、次に長江流域、南支に賣捌かれ、我國へは製鐵用コークス向きとして開平炭が六十萬瓲輸入せられたに過ぎぬ。北支五省は支那埋藏炭の五五%を占め、陝西・河南を加ふれば八六%に達し、全支の二千四百四十億瓲中二千百億瓲に上ると推算せられる。然るに年產は僅に千四百萬瓲に過ぎない。これは旣述の如く小經營と輸送難が主因である。

故に今これ等の炭田が我が支配權內に屬するも、之を現實的利用價値あらしめるには、（イ）近代的大資本による技術その他の改裝（ロ）交通網の完成（ハ）その基礎條件たる治安の維持を三大前提

とする。北支炭を日本に持來す爲の鐵路竝に貨車の爲に、新に一五〇萬瓲の鐵が必要とせられ、その港灣が大清河又は塘沽にしてもその完成には八ケ年又は十ケ年を要し、完成の曉とて貨物吞吐能力二千五百瓲・一ケ年百萬瓲に上らず、我國が必要とする昭和十六年度の所要輸入石炭千萬瓲が果して圓滑に積出し得るか疑問である。

四　北支炭よりも滿洲炭開發が有利有効

滿洲炭の需給　滿洲國の石炭需給は左の如し。（滿洲國實業部及滿鐵調査）（單位千瓲）

	昭和六年	昭和十年	昭和十一年
出炭計	九、一二四	一二、七一四	一三、三〇〇
內撫順	六、三五五	七、七二八	八、三〇〇
其他	二、七六九	四、九八六	五、〇〇〇
輸出	四、一一〇	三、一四九	三、〇七一
內日本	二、三三一	二、九一〇	二、八四〇
海外	一、八七九	二三九	二三一
差引滿洲國消費	五、〇一四	九、五五五	一〇、二二九

滿洲產炭量は昭和六年の九百萬瓲から十一年は千三百萬瓲に增加せるも、滿洲國內の消費增加の爲

に輸出力は反つて漸減の狀である。

滿洲五ケ年計畫　で、昭和十六年度を目標として、初めは現在の千三百萬瓲を二千五百五十萬瓲に約倍增計畫を樹立したが、十六年に於ける滿洲國消費は現在の一千萬瓲が一千六百萬瓲に上ると推算せられ（滿洲炭礦會社調査）、之から海外輸出を最小限に見積るも日本向は差引剩餘八百萬瓲が困難である。斯くて最近修正案を樹て十六年出炭量を更に千二百五十萬瓲增加して出炭量を三千八百萬瓲となす事に改めた、之により我國の不足量を充たして餘りある。この所要資金は三億圓と豫定されてゐる。

滿洲の出炭能力　元來滿洲の石炭埋藏量は七十二億瓲と推定せられ、中、滿鐵關係十五億瓲・滿炭會社關係五十四億瓲、その他が四億瓲であるが、最近は東邊道其他にも續々發見されつつある。故に出炭可能力は問題でない。のみならず、

（イ）既掘の炭田も我國の炭田に比し、凡て若く且つ新しきため、炭質、能率共に比較にならぬ程良好である。

（ロ）運輸竝に港灣關係も北支に比し遙に設備が整ひ、北鮮諸港・大連其他に出口あり、且つ大連港等の擴張も北支より容易である。

故に北支に投ずる諸機械、諸設備を滿洲に投ずるならば、その經費は遙に少なく、その完成期は遙に早く、勞は半ばにして功は倍を超ゆるであらう。これ現實問題として石炭開發は北支より滿洲を選

ぶべき所以であるが、滿洲も最近は勞力不足の感あり、そのためには山東移民の許可數を增加し、一は以て支那難民の救濟策にあて、他は以て滿洲開發の勞力不足に充つべきであらう。

五　北支炭は滿洲炭の補充用

滿洲勞力を北支其他の難民により補充し以て滿洲の勞力難を解決せば、滿洲炭の增產は決して困難でないが玆に一問が殘る。それは周知の如く、滿洲炭はその質が製鐵用に適する物が尠ない。最近この點で、良質石炭が發見されたと傳へられるも現在はその部分を北支炭に仰ぐ要あり、既述の開平炭增產につき援助すると共に山東の中興炭を利用する方法を採るべきである。蓋し同炭山は徐州に近きを以て大運河・隴海線・連雲港等利用の便あり、又青島・徐州への鐵道敷設は他の經濟的理由からも重要であるが、この方面の石炭開發にも利用力が大であり、併せて既設且つ擴大力ある青島港を最有利に活用できるであらう。

第三　鐵鋼

一　我國の鐵鋼過去需給表

本邦鐵鋼の需給狀勢は昭和十一年において（一）鋼は自給率一一三％卽ち國內消費以上の生產力あるも（二）その原料たる銑鐵は自給率六四％に過ぎず從つて之が不足は銑鐵竝に屑鐵の輸入によりて補足せらる。（三）進んで銑鐵の原料たる鐵鑛に至りては僅々一三％の自給率に過ぎざる狀況である。昭和十一年は左の如し。（單位千瓲）

	生產高	需要高	自給率
鐵鑛石	六二〇	四、六四二	一三・三％
銑鐵	二、〇〇八	三、一〇一	六四・七％
鋼材	四、五三九	三、九九六	一一三・〇％

更に昭和七年、昭和十年、昭和十一年を見るに鋼生產の自給率增加に反し、銑鐵自給率は低下し、鐵鑛自給率は一層低下の形勢にあり。前表は全日本の需給表なるが、內地・外地の產出額竝に輸出入を見るに左の如し。（商工省鑛山局調）（單位千瓲）

(甲) 鋼材需給表

	昭和七年	昭和十年	昭和十一年
內地生產	二、一一三	三、九七六	四、五三九
外地から移入	五	四一	四八
外國から輸入	二三〇	三一九	二九六
合計	二、三四八	四、三三六	四、八八三
內地消費	二、〇四八	三、五二二	三、九九六
外地移出	一八四	三六七	四四一
外國輸出	一一六	四四四	四四七

(乙) 銑鐵需給表

	昭和七年	昭和十年	昭和十一年
內地生產	一、〇一一	一、九〇七	二、〇〇八
外地移入	二〇六	一三一	一二三
外國輸入	四四四	九六二	九七二
合計	一、六六一	三、〇〇〇	三、一〇三
內地消費	一、六六〇	二、九九八	三、一〇一

註。(1) 尙ほ我國が銑鐵を輸入する國は昭和十一年度に於て (A) 印度から三七五千瓲 (B) 滿

洲から二七一千瓲 (C) 其他の諸國三二五千瓲である。

(2) 銑鐵の不足を補ふ爲に輸入せる屑鐵は昭和七年五五九千瓲、昭和十年一、六九二千瓲、昭和十一年一、四九七千瓲 (八千萬圓) であるが斯る輸入屑鐵以外に國內屑鐵も昭和十年は一、三〇〇千瓲利用されてゐる。

(丙) 鐵鑛需給表

	昭和七年	昭和十年	昭和十一年
內地產出	二二七	五一六	六二〇
外地移入	一五二	二四二	二四二
外國輸入	一、四八二	三、四〇四	三、七八〇
合計	一、八六一	四、一六二	四、六四二

註。昭和十一年の鐵鑛輸入地は (A) 馬來一、六九一千瓲 (B) 支那一、二五二千瓲 (C) 其他四〇五千瓲であつて滿洲からは銑として輸入されるも鑛は輸入されない。蓋し鑛質の低位と陸運の輸送費高による。

上表の如く昭和十一年の國內鋼需要四七五萬瓲に對し、その原料銑鐵の供給高は內外地合して二百十萬瓲に過ぎず、從つて不足は九十七萬瓲の輸入と三百萬瓲以上の屑鐵使用 (中百五十萬瓲は輸入) によりて補はれてゐる。むろん銑鐵の一部は鋼の原料とならず、其儘鑄物用に向けられる部分あるも何れにしても右の如き銑鐵不足である。

鋼材一千萬瓲案　昭和十一年の四七五萬瓲を基準として一年一割増とせば十六年は七七〇萬瓲、過去五ヶ年には倍増したから、今後の五ヶ年で倍増するとせば九五〇萬瓲となる。

殊に國防充實の強化が一層必要となつた今日、土木建築の制限はあつても、機械鐵工業・鐵道・造船・大陸開發に對する大需要を考量せば十六年の鋼材需要一千萬瓲と推定せられる。本説も決して根據なきものと云へぬ。

この場合に、その所要原料は如何なる數字となるか。鋼鐵專門家小倉製鋼の末松要氏の調査によれば左の如し。（小島精一氏「鐵鋼經濟讀本」）（單位萬瓲）

（甲）鋼	
（一）鋼材生産量	一、〇〇〇萬瓲
（二）その所要鋼量	一、二七五（八五％歩止り）
（三）その製鋼原料所要量	一、二五〇（九四％歩止り）
内譯	
（イ）製鋼屑	三七・五（原料對三％）
（ロ）壓延屑	一二五
（ハ）市場屑	一〇〇
（ニ）輸入屑	一二八・五

屑小計	三九一（三一・五％）
（ホ）合金鐵	九
（ヘ）銑鐵	八五〇（六八・五％）

（乙）銑鐵需給表

銑鐵需要	
（イ）製鋼用	九七〇
（ロ）鑄物用	八五〇
	一二〇
供給源	
（イ）内地、朝鮮	七〇〇
（ロ）滿洲	二〇〇
（ハ）印度、支那	七〇

（丙）鐵鑛

我國銑鐵七百萬瓲生産所要鐵鑛	一、四四五萬瓲
内熔鑛爐用	一、二九五〃
平爐用	一五〇〃

註。右は鐵鑛品位五〇％平均とし、銑鐵一瓲に對し鐵鑛一瓲八五を必要とするものを標準として計算。

上述の鐵鑛石所要量千四百萬瓲に對し、內外地の供給量は如何。

砂鐵の百萬瓲、茂山貧鑛處理を先づ二百萬瓲竝びに內地は俱知安、釜石の增產可能力を見越して合計精々五百五十萬瓲と云はれ、從つて不足八百九十五萬瓲は外國の輸入に仰がねばならぬ。

いま上記國內產出量を表示せば次の如し。（單位萬瓲）

（イ）內地	二五〇	內 普通鐵	一五〇	砂鐵	一〇〇
（ロ）朝鮮	三〇〇	內 普通鑛	一〇〇	茂山	二〇〇
合計	五五〇				
總需要	一、四五〇萬瓲		不足		八九五萬瓲

新增產案 十三年三月、商工省・對滿事務局・企畫院の合同案は日滿支を通じて鋼材一千萬瓲、その所要銑鐵（鑄物用共）は千二百五十萬瓲とせられ之に準じて銑鋼の增產プランが樹立せられ、日本銅管・小倉製鋼其他で二四〇萬瓲、日鐵が六〇五萬瓲、總計約八五〇萬瓲、更に諸方面擴張計畫を加ふれば昭和十六年末の國內銑鐵生產は年九百萬瓲に達する豫定である。

滿洲國增產計畫 右の日本國內增產に對應して、滿洲國にても第一次五箇年計畫を修正した。（單位萬瓲）

	第一次案	修正案
銑鐵	二四〇	五〇〇
鋼塊	二二五	三五〇
鋼材	—	二〇〇

以上の原料鐵鑛は凡て滿洲國にて支給する。

支那增產計畫 （A） 北支。昭和十六年迄に龍烟鐵鑛を主とし、華北鐵鑛公司が年產二百萬瓲の鐵鑛を採掘し、七〇萬瓲は日本へ、殘り一三〇萬瓲は原地精錬とし、天津附近に五〇萬瓲の一貫製鐵所新設。石景山製鐵所（十月火入れ日產二五〇瓲）、西北實業錬鋼廠（日產一五〇瓲）太原の保晉鐵廠（日產二〇瓲）この後三所の年產一五萬瓲と天津新設分と合して鋼年產六五萬瓲の生產豫定。

（B） 中支。華中鐵鑛會社（日錬及民間製鐵會社の共營）が主としてその開發に當る豫定にて、鑛石採掘の他に或は現地精錬にも及ばんとする。

二 鐵鋼を何處に求むべきか

わが自給力 鋼銑の自給は可能なるも鐵鑛は到底不可能。輸入必要。以上述ぶる所により、我國の製鐵事業は（一）製鋼能力は現在竝に將來も自給力一〇〇%の狀勢にあり（二）その原料たる銑鐵の現在生產力は國內需要に對し、內外地生產力は約六六%であり、鐵鑛に至りては一四%將來も精々四〇%に過ぎない。之に對して、昭和十六年末の增產計畫完成時に當り、末松案による銑鐵需要量九七〇萬瓲は、內地及朝鮮において七〇〇萬瓲、滿洲の二〇〇萬瓲、印度、支那からの七〇萬瓲で補充さ

れる事は上述の增產案により略ぼ可能と見られる。

そこで問題は鐵鑛の供給如何である。末松案により、鐵鑛需要を千四百四十五萬瓲として內鮮の產出可能量五五〇萬瓲、差引不足約九〇〇萬瓲として、之を何處より輸入すべきか。昭和十一年度は支那一二五萬、馬來一七〇萬、濠洲其他八八萬瓲、合計三八三萬瓲の輸入であるから、之を三倍する必要がある。それには輸送能力から見て之を近海に求むべきで遠路なる程その往復日數を要し、五—六千噸級の鑛石船を使用するも、一箇年の往復が十回とせばその輸送力僅に五萬噸內外、從つて九百萬噸の輸入には約一八〇隻の貨物船を要し、現に四百萬噸の輸入あるを以て新に五百萬噸の輸入增加とするも尙且つ一〇〇隻の新規配船增を必要とする。この點よりして、鐵鑛輸入地は最も船便の良好なる所たるべく、從つて滿支に求むるの外はない。

滿洲の鐵鑛 然しながら滿洲は鐵鑛埋藏量十二億瓲（滿洲產業統計）と推定されるも、品位五〇％以上の富鑛は頗る尠なく六百萬噸を出ない。これも最近東邊道で良質のものが發見されたといふも之を實際に利用するまでには容易でなく、今のところその使用は滿洲國の需要に一杯で輸出餘力なく、又よし餘力あるも容積大なるためと陸海運の輸送を要し、運賃割高である。從つて從來も鐵鑛は滿洲から輸入されなかつた。

北支鐵鑛 確定埋藏量は龍烟四千五百萬瓲、涿鹿千三百萬瓲と云はれるも、品位が問題である。この他山東金嶺鎭の埋藏量千四百萬噸（品質六〇％餘）、河北灤縣鐵鑛の埋藏量三千二百萬噸など北支

五省の總埋藏量は一億七千萬噸（地質所調査）と推定されるも正確でなく、且つ、その品位も不明である。

なかんづく北支の缺點は、水陸の輸送距離を水上延べ距離運賃に換算すると、中支に及ばない點である。

大冶	一〇〇
金嶺鎭	一四五
龍烟	二五〇

卽ち鐵鑛品を同一とするも、輸送難に於いて龍烟は大冶の二倍半に當る。

中支鐵鑛 湖北の露天掘り大冶と象鼻山を主とし揚子江下流に及ぶ、凡て河畔から二五—一〇〇キロ內にある。象鼻山は埋藏量八千五百萬噸、六〇％內外の富鑛。大冶は埋藏量二億六千萬噸の半分は既に採掘せられ殘半は一億二—三千萬噸と推定せられるも、日鐵調査では一億噸以下とも云はれる。鐵分六〇％の富鑛。この他、江岸下流に及び少なくとも合計四千萬噸に上る鐵鑛山が散在してゐる。安徽の冲桃鐵山等然り。

斯くて前述の如く、昭和十六年約九百萬噸の鐵鑛輸入豫定に對し、昭和十一年度の既定地輸入四百萬瓲に追加すべき今後の五百萬瓲は之を中支の鐵鑛に仰ぐの外なく、今より年々百萬瓲づつ增掘計畫を樹立し、同時に破壞はされたが中支の製鐵能力（漢陽年產一八萬、大冶三〇萬、漢口揚子鐵廠三萬

六千、河南安縣公司、上海和興鋼鐵廠等年產二萬噸）の復興とその利用を圖り乍ら、我國への輸入鐵鑛の開發に全力を傾注すべきである。その埋藏量より見るも、その鐵鑛品位並に採掘生產費よりするも、將又その輸送距離よりするも、ここを適地とする。だが埋藏量の少ないことは何としても玉にきずと云はねばならぬ。

第四　棉花

一　日本の棉花過去需給表

內地の棉花輸移入量　我國の棉花需要は殆ど輸移入に俟つを以て、年により增減あるも約三年の輸移入合計の一年平均せるものを以てその需要量と見れば大過はないであらう。いま昭和十、十一、十二年三箇年の輸移入量を見るに左の如し。（單位千俵、一俵は五〇〇封度、印棉は四〇〇封度）

	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年
印棉	一、六七三	二、一九九	二、一八五
米棉	一、四六八	一、五六四	一、一〇一
支那棉	二〇四	二四四	一五五

埃及棉	八四	八四	一二二
其他	二一七	六五〇	五六八
輸入合計	三、六四六	四、七四一	四、一三一
朝鮮棉	六〇	五三	三六

註。（1）昭和十二年輸移入量合計四、一六七千俵は千四百萬擔（一擔百斤）又は八十四萬瓲に當る。之に對し內地は山陰地方に二百瓲の產出あり、全消費量の〇・〇三％に當る。

（2）三箇年平均の一年輸入量は四、一七三千俵である。

（3）內地消費棉花の五〇％は輸出絲用である。但し之を金額にすると八億五千萬圓の棉花原料全輸入に對し六億三千萬圓の綿絲布製品が輸出される。

上表の示す如く、我國の輸入棉花は印棉の一五〇—二〇〇萬俵を最とし、米棉の一〇〇—一五〇萬俵を次位とする。支那棉は第三位なるもその輸入量は遙に僅か一五—二〇萬俵を出ない。且つ其の用途も蒲團中入用と脫脂綿を主とする。

各國棉花產高と日本への輸出率　如上各國の生產量とその對日輸出量の占むる比率を見るに左の如し。（單位千俵）

	生產量（十年—十一年）	對日輸出割合（十一年）	生產量（十一年—十二年）	對日輸出割合（十二年）
印棉	五、九三三	三六％	六、三〇七	三五％

米　　棉	一一、七二七	一四％	一三、六九九　　八％
支　那　棉	二、四一〇	一〇％	三、七六〇　　四％
埃　及　棉	一、七〇七	五％	一、八二一　　七％
世界生産量合計	二八、五六七		三三、五四七

註。(1) 上表世界生産量合計中には露、ブラジル、トルコ其の他の棉産をも含む。

(2) 米國は元來二千萬俵の生産あるも「ル」大統領の制限政策により最近は減産してゐる。

(3) 支那は昨年豐作なりしも事變にて對日輸出は減少、十二年度支那産棉を百斤一擔に換算すると、千四百萬擔である。

(4) 數字は貿易表及び東洋經濟年鑑により斤、俵、担等を換算したものである。

二　日滿支一體の將來需給量

北支、中支の棉花八年計畫　日本棉花栽培協會の發表によれば昭和十四年を初年となし、八年後の昭和二十二年には左の需給を見る。

(甲) 供　給　量

北支一、〇〇〇萬擔（昭和十一年産高四八〇萬擔）、中支一、〇〇〇萬擔、江蘇浙江五〇〇萬擔、合計二五〇〇萬擔。（十一年全支産高一、四〇〇萬擔）

(乙) 需　要　量

日支鮮滿の紡錘二、四〇〇萬錘（現在、日本内地一、二〇〇萬錘、支那五〇〇萬錘）、その棉花所要量三、九〇〇萬擔。之に對する支那二、五〇〇萬擔の産高は六五％に當る。

註。(1) 現在内地紡績は一、二〇〇萬錘あるも休錘三五％に及び、作業せるは六五％八〇〇萬錘である。

(2) 支那も破壞其他にて一四〇萬錘は廢機、現在は三六〇萬錘である。

(3) 八年後の日支等の紡績數字も正確を缺く所あるも暫く記して參考とす。

朝鮮棉花　朝鮮は昭和十一年産四萬瓲、昭和二十八年には、三倍の十二萬瓲卽ち、二百萬擔とする豫定なるも、昭和二十一年に於いて既に、日滿支の需要約三千九百萬擔に對しては、大した價値をもたない。

滿洲棉花　滿洲は現在約二十萬擔の産出なるも、品質は紡績に適せず、早霜竝に風土上、過去の奬勵實績から見て大なる期待をもてず、棉花增産計畫は放棄すると傳へられる。

三　支那棉の增産

北支棉の價値　支那棉花增産は北、中支を通じて計畫さるべきも、殊に北支は中支に比し棉花栽培に適すと云はれる。

(A) 自然的條件の良好。北支は中、南支よりも氣溫稍々低きも、降雨少なく土壤も肥沃なる黃

土沖積層より成る。

（B）北支にはアルカリ性の土地多く、之を手入れせば棉花適地に爲し易き事。

（C）收穫量多き米棉種の栽培が普及せし事。

支那在來棉は纖維短く、且つ粗にして紡績に適せず、綿毛交織、中入れ用、脱脂綿用となるのみ。從つて次第に米棉化の必要あり、それが幾許程度に米棉化するやは地味、氣候其他と關聯するも、北支には既に之に近き品種の物が出現しつつある。

過去五年の平均年産量は河北、山東、山西の三省にて四〇〇萬擔、その中二〇〇萬擔は米棉である。

（D）北支棉の改善點　棉花は纖維の長さ・光澤・强度・撚曲・含水量・爽雜物の有無等によりその優劣が定まる。

（イ）長さ（粍）。北支棉平均二六。北米海島棉四五。

（ロ）强度（瓦）。北支天津棉五・九三。青島棉三・七〇。北米棉六・七九。

（ハ）撚回數（毎吋）。天津棉七四。山東棉六九。米棉一四〇。

北支棉の米棉に劣る一因は、燐酸及び加里肥料の缺乏と未熟棉の混入である。加ふるに棉花の重量を增して賣らんが爲に故意に水分を含ませ、或は棉實や土砂の混入を策してその聲價を落したが、これ等は改善の餘地も多い。

增産妨害條件と對策　支那に於ける棉花增産が右の如く八年後に二、五〇〇萬擔（最近の平年作平

均一、〇〇〇萬擔の約二倍半）と見積られるのは、可耕面積から推して、農民が自給自足に必要なる米麥其他の土地を、棉花にのみ集中使用する事を好まざる爲である。蓋し棉花は世界的生産物にして、殊に米國竝に印度の豐凶によりて年々甚しき相場の高低あるによる。

故にその既耕地の轉換よりも寧ろ（A）未耕地アルカリ土性の利用、品種改善竝に施肥の改善によろ反當り收穫量の增加、害蟲驅除、摘心の時期・方法など凡て科學的經營を中心とする事であつて、それには棉花試驗所の地方的普及と完備を前提とする。蓋し支那の如きは所により地味・氣候の變化甚しきを以て、單に中央試驗所の實驗が地方的具體的には必ずしも機宜を得ないからである。（B）若し棉花の大增産を必要とせば、一定價格にて買入れる事を保障する事。（C）此場合にその棉花を日滿支の紡績業者に使用さす爲には、米棉印棉の時價に比し割高の部分を政府で補助する事が必要である。

でないと、日滿支紡績業者の原料高、生産費高の爲に輸出が不能となるからである。

何れにしても、棉花に就ては先づ北支三省、之に次で河南、陝西の棉花適地を先きにすべきであらう。

四　支那の棉花需給

全支の棉花生産量　支那全體の生産量は洪水其他の天候如何によりて、非常に變動がある、左の如

し。（單位千擔）

	一九三四年	一九三五年	一九三六年
全支	一一、二〇二	八、一三九	一四、四三九
北支三省	四、七七一	二、八二五	四、八二七
三省對全支比率	四二%	三四%	三三%

右の如く全支の棉花産高は年により消長甚しきも平均一千萬擔と見るべきである。

支那の現在消費量 之に對して消費量は略ぼ次の如し。（單位千擔）

	北支三省	上海	合計
紡績用	二、〇〇〇	四、五二〇	六、五二〇
家内工業其他一般用	一、三〇〇	不明	一、三〇〇
計	三、三〇〇	四、五二〇	七、八二〇

即ち平均生産高一千萬擔に對し、北支及び上海だけの需要が既に七百八十二萬擔なるを以て差引殘高は僅に二百二十萬擔を出でず。之により河南、陝西の紡績及び中南支家内手工絲用、其他一般用に消費せば現在の支那は決して餘剰棉花を持たぬ。即ち貿易の輸出入を見ると、常に入超を示し、少きも一九三六年（豐年）の四萬擔八百萬元、多きは一九三四年の九五萬擔七千五百萬元の大入超である。

註。（1）北支の需要數字は滿洲中央銀行調査課による。（2）上海は東洋棉花上海支店調査による。

（3）全支紡績は昭和十二年六月末に五百萬錘、其内で上海は全支の五三%即ち二七〇萬錘、北支三省は一〇〇萬錘である。北支三省では山東省六二萬錘（青島五六萬、濟南六萬）河北省三〇〇錘（内天津二四萬）である。

五 日支の將來需給觀

支那人の棉花消費量は裸の國、熱帶國の印度よりも劣る。從つて彼等の購買力が增加せばその棉花消費量の急增するや明かである。いま紡績錘數の人口當り計算を見るに各國比率左の如し。（單位千人、千錘、一九三七年末）

	紡績錘數	人口	一錘當り人口
英國	三七、三四〇	四九、九五八	一・三
米國	二六、六一一	一二七、九八〇	四・八
佛國	九、七八三	四一、九〇〇	四・二
獨國	一〇、三二三	六七、一〇五	六・五
日本	一二、二九七	九九、八三五	八・一
印度	九、七六三	三七九、五〇〇	三八・八
支那	五、〇七一	四〇〇、〇〇〇	七八・八

上表により支那の紡績錘數がその人口に比し、いかに尠少なるかが分る。日英の如き、その錘數も時に休錘多く又その五〇%は輸出に向けられるから上表を以て直ちに其國民の棉花消費量の比較はできないが、支那にも休錘竝に輸出用の分もあるから、これらを斟酌するも、將來支那の建設進行と共にその錘數の增加と棉花消費量の增大することは疑ふ餘地がない。

從つて支那の棉花年生產量が現在平均一、〇〇〇萬擔（豐作時一、四〇〇萬擔）が八年後に二、五〇〇萬擔となるも、若し八年後に支那人の綿絲布消費增加の爲にその錘數も倍增の一千萬に及ばば、支那棉花消費量も二、〇〇〇萬擔に急增すべく、支那棉の日本輸入可能量も其時の日本所要量に對し精々三〇%內外に終るかも知れない。

固より、その時でも日本を始め支那でも棉花の國內消費を統制せば別の結果となるから、將來の需要は時の政策如何により多大の伸縮力あり豫測は頗る困難となる。假に前述の日本棉花栽培協會の發表數字によると日滿支全所要の六五%を充たすと云ふも、その需要力に支那人の購買力や統制經濟の緩急度合ひを如何に見積れるかは不明である。

第五　鹽

一　日本の鹽過去需給表

內地の鹽需給狀勢は左の如し。（單位千瓲）

甲表、鹽供給地別

	昭和六年	昭和十年	昭和十一年
內地生產	五二一	六〇四	五一九
外地移入	一〇一	一〇〇	八八
外國輸入	三五三	一、〇八四	一、一八二
計	九七六	一、七八八	一、七八九

乙表、輸移入地內譯

	昭和十年	昭和十一年
臺灣	一〇〇	九八
關東州	一八三	二四〇

青島	一六二	二三六	
滿洲國	六二	一二一	
印度	九三	二八	
アデン	三三	一五	
伊領ソマリーランド	二〇二	一五二	
佛領ソマリーランド	四六	八	
エレトリア	一〇五	八八	
埃及	一〇一	六六	
スペイン	二二	二八	
其他共合計	一、一八四	一、二七〇	

丙表、鹽用途別（專賣局調査）

	昭和十年	昭和十一年
工業用	一、〇六七	一、一五九
漬物	二八八	二九三
醬油	二〇九	二一七
味噌	一二六	一四二
麵類	一四	一八
魚類貯藏	五九	五六

其他共合計	一、八四六	二、〇一八	

註。十一年の鹽供給高と需要量と一致せざるは前年持越其他による。

丁表、昭和十一年工業用內譯

曹達灰	電解苛性曹達	化學藥品	人造色素
九一六	二二七	二一	一五

註。（1）曹達灰は苛性曹達、硝子、藥品、石鹼、炭酸マグネシウム等となり。
（2）苛性曹達は人絹及ス・フ用、染料、晒用、石鹼用等となる。

如上數字の示すが如く、昭和十一年の鹽供給地は內地五十萬瓲、外地九萬瓲であつて他の約百二十萬瓲はアフリカを最大とし、印度、西班牙、米國より輸入されてゐる。

そして內外地の供給分六十—七十萬瓲が略ぼ食用、輸入の百二十萬瓲が工業用である。

二　需要增と輸入難

鹽の用途は右の如く、この中（A）人口增加につれ食用、鹽藏用其他の需要は現在の六十—七十萬瓲から百萬瓲近くに（B）工業用として曹達工業は將來の輸出工業として、又人絹、ス・フ工業にしてもその輸出の發展力洋々たり。加ふるに諸化學工業、化學兵器の發達と共に、鹽の需要は急增すべく、數年後には現在の工業用需要百二十萬瓲は少くとも二百萬瓲に上ると豫想せられる。